発掘調査報告第35集

平成５年度・平成６年度農林漁業用揮発油
税財源身替農道整備事業及び市道丸山線改
良工事事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査

的場（まとば）・門前（もんぜん）遺跡

（本文編）

１９９５．３

上伊那地方事務所
駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告第35集

平成5年度・平成6年度農林漁業用揮発油
税財源身替農道整備事業及び市道丸山線改
良工事事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査

的場（まとば）・門前（もんぜん）遺跡

（本文編）

1995．3

上伊那地方事務所
駒ヶ根市教育委員会

序　　文

今回ここに刊行の運びとなりました報告書は、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業及び市道丸山線改良工事事業に伴い、平成５年度・平成６年度に実施されました的場・門前遺跡の緊急発掘調査報告書であります。

遺跡のある中沢地区は中世の町並みのおもかげを各所にとどめる歴史的に貴重な地域です。当遺跡は、過去に顔面レリーフが施された石匙が採集されるなど、古くから知られた遺跡で、旧石器時代から中近世までの各時代にわたる濃密さは、全国的にも有数な複合遺跡であります。

今回一部の調査を行った訳ですが、縄文時代の早期土器が多量に出土したことをはじめ、縄文中期の大集落址、縄文時代の祭祀に関連したと思われる環状の配石址、中世の建物址群などの諸遺構等々が確認されるなど、その内容の充実は枚挙のいとまがない程で、今後の研究上、重要な役割を果たすものと確信いたしております。

御からだが不自由であるにもかかわらず長期の発掘調査にあたられた林茂樹団長を始めとし、御指導・御協力いただいた名古屋大学の渡辺誠教授はじめ大学院生・大学生諸氏、厳寒から猛暑の厳しい条件の中、発掘に参加いただいた調査団の皆さん、事業に対し深い御理解をいただいた上伊那地方事務所並びに中部電力株式会社、工事請負者、地主の皆様等関係者各位など多くの方々の御協力・御厚志によって無事初期の目的を果たすことができたことに心より感謝申し上げるとともに、この報告書が地域史研究の一助にならんことを念願する次第であります。

平成７年３月

駒ヶ根市教育長　高　坂　　保

例　　言

1．この報告書は、平成５年度・平成６年度農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業及び市道丸山線改良工事に伴うもので、上伊那地方事務所・駒ヶ根市の委託を受けて実施した緊急発掘調査報告である。

2．当遺跡は、調査前には的場遺跡と門前遺跡という２遺跡として知られていたが、縄文時代中期において両遺跡地域にわたって一体の集落が構成されていることが今回の発掘調査の結果判明した。よって工事にかかる部分発掘であることや遺構の存在場所の時代による推移のため、両遺跡の全体像は不明であるが、本報告では「的場・門前遺跡」として一括して取り扱うこととした。但し事業の都合上、調査を進める中では遺跡ごと取り上げ、記録を行ったため、本書中でも遺構名など的場と門前に分けて表記しているが実態は一括遺跡である。

3．報告書は２分冊として編集されているので、本書（本文編）と合わせて別冊（図版編）を参照して御覧いただきたい。

4．本報告書は事業期間内にまとめることを要求されているため、調査によって検出された遺構及び遺物をより多く報告することに重点を置き、資料の再検討は後日の機会にゆだねることとした。なお現場では住居址の覆土、土壙、炉の土層断面など実測を行っているが、紙数の関係上、掲載できなかったため必要に応じて文中で記述することとした。石器については遺跡共伴出土の数量のみにとどめてある。

5．遺構の実測は、縄文遺構が濃密な地区と中世柱穴群とで、航空測量（株式会社ジャステック）を実施した。
その他の実測は本田秀明、木下平八郎、北澤武志、佐野悦子、桐山秀穂、丹下昌之、和田正彦が行い、北澤が製図・編集を行なった。

6．土器の復元作業は気賀沢進、木下が行い、実測は気賀沢（縄文土器）、木下（陶器）が、石器実測は北澤が土器採拓は竹村章子、本田（草創期・早期）が行い、北澤が編集した。

7．写真撮影は現場での撮影を北澤が、遺物撮影を木下が行い、写真図版の編集は木下が行った。

8．本文の執筆は林、北澤・木下が行い、第Ⅱ章第２節の地質は寺平宏氏に調査を依頼し執筆いただいた。本文の編集は北澤が行い、林が監修した。

9．遺構図中、焼土はドットで表わし、正位の埋甕はウメ、逆位の埋甕（伏甕）はフセで表示し、図の縮尺は、各図に示してある。柱穴脇の数字は柱穴の深さをcmで表わしている。

10．遺物及び実測図並びに調査に伴う関係資料は駒ヶ根市立博物館（駒ヶ根市上穂栄町23―１）に保管してある。

目　　次

序　　文
例　　言
目　　次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1
　第1節　発掘調査に至るまでの経過及び保護措置 …… 1
　第2節　発掘調査の組織 …… 1
　第3節　発掘調査経過 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の位置及び環境 …… 3
　第1節　位置及び地形 …… 3
　第2節　地　　質 …… 4
　第3節　歴史的環境 …… 7
第Ⅲ章　発掘調査 …… 8
　第1節　発掘調査の方法 …… 8
第Ⅳ章　遺構と遺物 …… 9
　第1節　旧石器時代 …… 9
　第2節　縄文時代 …… 10
　　Ⅰ．草創期 …… 10
　　1．土　　器 …… 10
　　2．石　　器 …… 10
　　Ⅱ．早　　期 …… 11
　　1．遺　　構 …… 11
　　2．土　　器 …… 12
　　3．石　　器 …… 15
　　Ⅲ．中期及び後・晩期 …… 15
　　1．竪穴式住居址 …… 15
　　2．竪穴址 …… 32
　　3．ロームマウンド …… 32
　　4．土　　壙 …… 33
　　5．配石址 …… 34
　　6．後・晩期の土器 …… 36
　　7．土　　偶 …… 38
　　8．土製円板 …… 39
　　9．縄文時代中期の石器について …… 39
　　10．獣　　骨 …… 41
　第3節　古　　代 …… 42
　第4節　中　　世 …… 43

1．掘立柱建物址 ……43
2．溝 状 遺 構 ……50
3．柱 列 址 遺 構 ……52
4．断 崖 遺 構 ……53
5．中世遺構について ……54
6．出 土 陶 器 ……55
第Ⅴ章 総 括 ……57
第１節 縄文時代中期の集落について ……57
第２節 配 石 遺 構 ……57
第３節 縄文早期押型文土器文化について ……58
第４節 溝状遺構を配した中世居館跡 ……59
第５節 特異な出土品について ……61
第６節 お わ り に ……61
付 表
1．縄文時代住居址一覧表 ……65
2．的場・門前遺跡土壙一覧表 ……69
3．縄文時代住居址別出土石器一覧表 ……82
4．配石址に伴う石器属性表 ……85
5．出土陶器一覧表 ……86
報告書抄録

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至るまでの経過及び保護措置

平成２年９月、農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業（中沢広域農道）に係る事前保護協議が、県教委、上伊那地方事務所、市農林課、市教委並びに日本考古学協会会員林茂樹氏出席のもと現地で行われた。この協議では工事にかかる３遺跡が協議対象となり的場遺跡については3,000m²を工事に先立って発掘調査し、記録保存することとなった。その後、中部電力南信変電所が丸山地籍に建設されることに伴い、市道丸山線の改良工事が隣接地で実施されることになり、平成５年５月再度協議が行われた。このことによって的場遺跡の南側に隣接すると考えられていた門前遺跡にかかる部分が調査対象となり、また工事区北の圃場の整備も実施することとなり、調査対象面積は5,150m²となった。調査費用は3,193万円（的場―農道分14,384千円、的場―市道分10,416千円、門前―市道分7,130千円）として、事業は平成５年度と平成６年度の２年度事業とする計画を策定した。

以後、平成５年７月に中部電力株式会社と駒ヶ根市との間で協定書が、上伊那地方事務所と駒ヶ根市との間で委託契約が取りかわされ、同月に市と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会との間で再委託契約を結んだ。調査会は的場・門前遺跡発掘調査団を編成し、団長には林茂樹氏を委嘱して調査にあたることとなった。調査は土地が未取得であったため地権者の了承を得て、７月13日より開始している。　（北　澤）

第２節　発掘調査の組織

１．駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会

顧　問　林　朝昭（駒ヶ根市教育委員長）

理　事　友野　良一（市文化財審議会会長）　理　事　松村　義也（市文化財審議会副会長）

〃　新井　徳博（〃　委員）　〃　竹村　進（〃　委員）

〃　林　赳（〃　〃）　〃　吉江　修深（〃　〃）

〃　川端　清司（市教育次長　平成６年３月31日まで）

〃　木下　英明（〃　平成６年４月１日から）

〃　気賀沢　進（市立博物館長）

監　事　下平　基雄（市収入役）　監　事　宮脇　昌三（駒ヶ根郷土研究会会長）

幹　事　市村　重実（市教委生涯学習課課長補佐）　幹　事　中村　敏郎（市教委生涯学習係）

〃　北原　純（市教委生涯学習係　平成６年３月31日まで）

〃　唐沢　裕二（〃　平成６年４月１日から）

〃　北澤　武志（市立博物館職員）　幹　事　白沢　由美（市立博物館職員）

2．的場・門前遺跡発掘調査団

団　　長　林　茂樹（日本考古学協会員　発掘担当者）
副 団 長　気賀沢　進（　〃　〃　）
調査主任　北澤　武志（長野県考古学会会員）
調　査　員　木下平八郎（東洋陶磁学会会員）　調　査　員　桐山　秀穂（名古屋大学大学院生）
〃　小町谷　元（上伊那考古学会会員）　〃　丹下　昌之（　〃　）
〃　本田　秀明（長野県考古学会会員）　〔50音順〕
調査補助員　伊藤　和也（成城大学大学生）　調査補助員　和田　正彦（名古屋大学大学生）
〔50音順〕

調査指導及び協力　渡辺　誠（名古屋大学教授）　小野　正敏（国立歴史民俗博物館教授）
西沢　寿晃（信州大学助教授）　宮下　健司（長野県立歴史館）
笹本　政治（信州大学文理学部教授）
萩原　三雄（帝京大学山梨文化財研究所副所長）、蔵沢寺、上伊那考古学会
寺平　宏（駒ヶ根市立博物館学芸員）
小島　孝修（同志社大学）、馬場　保之（飯田市教育委員会）　〔順不同〕

作業協力員　渋谷　鉄雄、林　吉十、林　初江、羽生　正吉、赤羽　慶三郎、春日　津多恵、竹村　文吾
竹村　宗治、竹村　章子、竹村　俊文、春日　きくえ、久保田　節子、小松　千春、小松　かね子
木下　貞子、湯沢　貞男、湯沢　さえ子、佐野　悦子、田中　睦子、吉沢　悦子、小林　宗子
戸枝　菊江、竹村　幹雄、宮脇　江美子、宮脇　たけよ、馬場　由美子、尾崎　忍、宮沢　秀則
宮沢　博晃、丸野　純、中村　猛、小池　政嗣、赤坂　文隆、林　広典、林　智巳、下村　しげ子
熊谷　友子、松崎　吉江、小木曽　ちず、宮沢　さかえ、下村　春江、湯沢　二三子、
小田切　トシ子、唐沢　ますみ、滝沢　直文、下島　貞子、野村　陽次、竹村　普子
〔以上、敬称略〕（北　澤）

第3節　発掘調査経過

発掘調査は長期にわたるため、日誌は省略して概略を記述するのみにとどめる。

〔平成5年度〕

7月—　13日に調査前打合わせ及び事前写真撮影。14日、器材運搬及び試掘トレンチ設定。15日にテントを設営し、調査開始式を行った後、トレンチによる試掘を開始した。試掘の結果、中世面までで掘り下げを一担止めて遺構を検出した後、さらに掘り下げて縄文時代の遺構を確認することとなった。試掘は26日までで終了したがⅠ区、Ⅱ区北半、Ⅲ区が水田耕作のため調査できない状態であったので、Ⅱ区南半北側を先ず調査することとして重機により耕土を南側に排土する。Ⅱ区の東では水田地場面で縄文時代の5号住を発見し、中世面は既に壊されていることがわかった。以降、中世面までの掘り下げを手掘りで行うとともに月末からⅡ区北東にある溝も調査した。

8月—　4日には早実高原教室で中学生20名の発掘参加があった。19日から柱穴検出を順次行い、重機によって廃土をさらに南側へ寄せる。また西からの写真撮影のため第Ⅱ区断崖の竹薮伐採作業も行っている。

9月—　9月は柱穴をできるだけ上の面でとらえることに努め、ジョレンがけで掘り下げを行う。

10月—　稲刈りが終わりⅡ区北半とⅠ区の耕土を重機で除土する。市道工事が急がれるため調査もそちらを先に行うこととなり、Ⅱ区調査を一時中断し、23日にⅢａ区の表土はねを行った後、遺構調査にかかった。

11月— 上伊那考古学会が主催する見学会が14日に当遺跡で行われ郡外者約30名が参観し研究会が開かれた。26日には測量期間短縮のためIII区を空測することになり、㈱ジャステック社のRCヘリによる空撮が行われた。作業はIII区に引き続きII区市道部の縄文時代遺構調査を行っている。

12月— 降雪や霜のため非常に困難な作業が続いていたが、22日に作業続行は無理であると判断して、開発側と相談の上、現場作業は一時中断して冬期は遺物整理作業を行うことになった。そして24日に土のう・シート等で遺構保護作業を行う。

1月— 出土遺物洗浄、注記など遺物整理作業を行う。

2月— 開発側からの要請により季節条件は悪いが急遽17日に現場作業を再開、的場17住から調査に着手する。

3月— 10日までにII区市道部分の調査を終え、11日RCヘリによる空撮を行う。この後、市道部調査のため中断していたII区西側の中世遺構調査を再び始める。14日には散在する焼土址の一つの中に小鍛冶炉体とフイゴ羽口を発見。22日は柱穴群の空撮実施。変電所工事に使う資材運搬のため、30日に大型トレーラーが市道を通過するのでIV区調査を先にするよう依頼があり、23日から道路脇にトレンチを設定して調査にかかった。

〔平成6年度〕

4月— 2日にはII区の発掘を再開し的場29住から調査を始め、30番代の住居址及び29住東側の土壙群の調査を行う。

5月— これまで縄文時代遺構と併行して中世掘立柱建物の確認を行って来たがまとまらないため、18日より当面、重点的にこの作業を行うことにする。27日に地権者、地方事務所、市、調査団で打合わせ、北に隣接する圃場の田面を上げてIIc区の縄文時代遺構は発掘せずに埋立保存することが決まった。

6月— III区では既に道路工事が始まっており、4日に寺平宏氏による土壌サンプルが採取が、道路切り取り断面で行われた。またIV区道路下の遺構は昔の道路工事の時に破壊されたと考えられていたが、今回の工事で舗装を剝したところ遺構が残存しており、工事を一時中断してもらい道路下の調査を緊急に行い、17日までに完了する。6日には歴民博の小野教授、山梨文化財研究所の萩原副所長らが、中世シンポジウムの後当遺跡を訪れ御指導をいただいた。18日からII区土壙群調査に戻る。土壙群調査のため掘り下げを行っていた際に現われた石の配列により、円形になると思われる配石帯があることがわかり、IIb区全体を掘り下げて配石を明らかにして実測等を行う。

7月— IIb区の土壙群を調査。水回しのため残していたI区の調査を12日から19日まで行う。その後、IIb区西側の縄文時代遺構の調査。30日には現地説明会を開催し、県外者を加えて80名余の見学者が参集した。

8月— 猛暑で40℃近くの気温の中での調査となる。4日～6日に旧石器時代の遺構・遺物の確認のため、トレンチ及びグリッドでローム層まで掘り下げるが精査し得ず遺物等の出土もなかった。8日、IIc区保存のため山砂を入れて下の遺跡の保護に備えた。なお出土した石には番号を記入して図に記録し柱穴等に入れる作業も事前に行われている。残された実測等を行い、8月18日には現場での全ての作業を終了した。

その後、整理作業を開始したが、多種にわたる数多くの遺構記録と大量の出土遺物を前に作業は困難を極めた。

（北　澤）

第II章　遺跡の位置及び環境

第1節　位置及び地形（第1・3図、写真1）

的場・門前遺跡は長野県駒ヶ根市中沢4,700番地代の中割区に所在する。今回の調査対象地域は4,754番地他22筆に及んでいる。緯度経度は北緯35度42分37～42秒、東経137度59分36～41秒の位置にあたる。標高は688m～695m

である。交通上から見れば、中央道駒ヶ根ICより駒ヶ根駅へ至り、駅より東へ向って主要地方道路駒ヶ根―長谷線を約6 km行くと、道路分岐点にある蔵沢寺門前の石標に至る。石標の西から南にかけての小高い一帯が当遺跡である。中沢地区の支所・公民館、小学校など主要施設の集っている地域からは南東方向に1 km程度離れた場所である。地形的には、赤石山脈に並行して走る伊那山地から流出して天竜川へとそそぐ新宮川などの複数河川が形成した扇状地の扇頂部に近い山麓に当遺跡は立地している。この付近の全体的な地勢は、東・北・南を伊那山地の山々に囲まれ、西の天竜川側は開けており、概ね東高西低となっている。

遺跡の周辺は、北方約380mの所を新宮川が流れ、南側からは西側にかけてはすぐ下間川の段丘状の河谷となっている。南東からは丸山地籍から続く丘陵が伸び遺跡地の東端で段丘崖を作っている。また東に約500mの地点で新宮川と百々目木川とが合流している。北西方向は、下り傾斜の付いた細長い平坦地が約1.6kmにわたり続いている。これは中沢台地上面の平坦面で、台地の北側は新宮川が、南側は下間川が西流し、侵蝕・下刻作用により深いV字谷が形成されており、両河川の間は舌状の台地地形（仮称―中沢台地）となっているのである。なお台地側面には何箇所か湧水地点がある。

また中沢地区は天竜川左岸に位置しているが、この付近での天竜川河岸段丘は5段を数える。県の重要遺跡の認定を受けている高見原遺跡は中沢台地支脈先端部の台地上に広がる遺跡であるが、この遺跡面が河床側から数えて第5段丘面である。

中沢台地は次節で述べるように厚さ50m余の礫層の上にテフラ土が厚く堆積しており、台地上は古くから畑や水田の耕作に利用されて来た。調査地域も、調査前には畑や水田となっており北へ段々と低くなって行く田が続いていた。以下調査区周囲の微地形を見て行くこととする。東は蔵沢寺参道―市道で掘り下げられているが原地形ではやや傾斜する平坦地が続いていたものと思われる。北東は一段と低く、低湿地となっていたと思われる。II・III区西は人工的と思われる急峻な崖となっており、IV区西側ではゆるやかな傾斜面となっている。南はIV区の西で小谷になっており、北は高見城の掘り割りまで水田、畑となっている。また井筋では寺井と新井が調査地で合流し一本となり北へ流れている。

（北　澤）

第2節　地　　質

中沢地域の段丘面は、形成年代の古いものから順に、蔵沢寺面、赤坂面・鳥居原面・追引面・南割面の、五つの面に区分される（寺平1984）。調査地点の位置する赤坂面は下間川と新宮川に挟まれ、大坪から菅沼にかけて細長く分布する。この面には、新宮川や下間川などによって形成された扇状地礫層の上に、約8 mのテフラ質堆積物が重なり、その下部には、御岳第1テフラ：On-Pm1が厚く堆積している。このテフラの年代は、7.3～9.5万年前とされていることから、扇状地を形成した礫層の離水年代は、およそ10万年前と考えられる。

テフラ質堆積物の観察結果や分析の結果は次頁の柱状図に示し、その特徴を①から⑨のグループに分けて説明する。テフラ名や年代については、竹本ほか（1987）・町田ほか（1992）による。

① 礫層を構成する礫は、黒雲母片麻岩を主とし、そのほかに閃緑岩・はんれい岩・ペグマタイトなどを含んでいる。これらの礫はいずれも近くの山地に分布する岩石で、下間川・百々目木川・新宮川奔流などによって運搬されてきたものである。

② 礫層の上に約80cmの砂～粘土が堆積している。色調から三層に区分されるものの、含まれる鉱物は、石英・長石・黒雲母・角閃石と、どの層も同じ組み合わせである。これらの鉱物には、火山灰中の鉱物にみられるような、自形の結晶面を持つものはない。この堆積物は基盤岩が風化して生じた砂粒が、風によって運搬され、堆積したものであろう。

③ 長径2 cmないし3 cmの軽石が、約2.2mの厚さで堆積している。軽石は粘土化が進み軽石粒が明瞭でな

	柱状図	区分	特　　徴	主　な　鉱　物	火山ガラス bw	火山ガラス pm	その他
0 cm			褐色火山灰 御岳火山灰≫基盤岩風化砂粒≫姶良Ｔｎテフラ ＡＴ	hy＞fl＞qz＞mg＞au＞bi＞ho	•		
				hy＞fl＞qz＞mg＞au＞bi＞ho	•		
50 cm				hy＞fl＞qz＞mg＞au＞bi＞ho	•		
				hy＞fl＞qz＞mg＞au＞bi＞ho	•		
		⑨	褐色火山灰 御岳火山灰≫基盤岩風化砂粒	hy＞fl＞qz＞mg＞au＞ho			
100 cm				mg＞hy＞fl＞qz＞au＞ho＞bi			
				mg＞hy＞fl＞qz＞au＞ho＞bi			
150 cm				mg＞hy＞fl＞qz＞au＞ho			
				mg＞hy＞fl＞qz＞au＞ho			コークス状岩片を含む
	▲ ▲ ▲		褐色火山灰（赤褐色スコリア混入） 御岳火山灰	hy＞mg＞fl＞qz＞au＞ho			コークス状岩片を含む
200 cm				hy＞mg＞fl＞qz＞au＞ho			コークス状岩片を含む
				hy＞mg＞fl＞qz＞au＞ho			
	▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲ ▲	⑧	赤褐色スコリア(3~6mm) 御岳三岳テフラOn-Mt	mg＞hy＞fl＞au≫qz			
250 cm	・ ・ ・		褐色（赤スコリア混入）　砂≧御岳火山灰	fl＞qz＞hy＞mg＞au≫bi･ho			基盤岩風化物多い
	▲ ▲	⑦	褐色火山灰　非常にハード 赤褐色スコリア混入多い　御岳火山灰	fl＞qz＞hy＞mg＞au＞bi＞ho			
		⑥	⬆新期御岳上部テフラと新期御岳下部テフラとの境界	fl＞hy＞mg＞qz＞bi≫ho			
300 cm			淡褐色火山灰 御岳火山灰 1mm内外の白色粒混入	fl＞mg＞hy＞qz＞bi＞ho			灰色火山岩片あり
				fl＞mg＞hy＞qz＞bi＞ho			灰色火山岩片あり
350 cm				fl＞hy＞mg＞ho＞au			灰色火山岩片あり
	△		淡褐色火山灰、橙色軽石混入　御岳火山灰	fl＞hy＞mg＞qz			灰色火山岩片あり
	△ △	⑤	橙色軽石　2~5mm、大10mm 御岳伊那テフラ　On-In	fl＞hy＞mg			
400 cm				fl＞hy＞mg			
				fl＞hy＞mg			
				fl＞hy＞mg			

			青灰色火山灰　御岳火山灰	(灰色火山岩片)≫fl＞mg＞qz＞hy	・	・	ガラスは K-Tz?
450cm		④	灰褐色火山灰（白～淡黄色軽石2~4mm混入多） 御岳火山灰≫基盤岩風化物砂粒	fl＞qz＞mg＞bi＞ho＞hy			基盤岩風化物あり
				fl＞qz＞mg＞bi＞ho＞hy			灰色火山岩片・基盤岩風化物あり
			褐色火山灰(2~4mm白~淡黄色軽石混入多、10~20mm黄色軽石混じる) 御岳火山灰	fl＞qz＞mg＞ho＞bi		・	
500cm	△△△	③	黄色軽石、２～３cm（粘土化が進み、軽石粒が明瞭でない） 御岳第１テフラOn-Pm1	fl＞ho＞bi＞mg		●	
				fl＞ho＞bi＞mg		●	
550cm				fl＞bi＞ho＞mg		●	火山ガラス多い
				fl＞bi＞mg＞ho		●	
				fl＞bi＞mg＞ho		●	
600cm				fl＞bi＞mg＞ho		●	
			黄白色軽石、２～３cm（上部よりも更に粘土化が進む。１～２cmの黒色岩片を含む） 御岳第１テフラOn-Pm1	fl＞bi＞mg＞ho		●	
650cm				fl＞bi＞mg＞ho＞qz		●	
				fl＞bi＞mg＞ho＞qz		●	
				fl＞bi＞mg＞ho＞qz		・	
700cm				fl＞bi＞mg＞ho＞qz			バーミキュライト多い
	・・・	②	青白色砂～粘土 非火山性岩片	qz＞fl≫bi＞ho			
750cm	・・・		褐色砂～粘土 非火山性岩片	qz＞fl≫bi＞ho			
	・・・		黒褐色砂～粘土 非火山性岩片	qz＞fl≫bi＞ho			
	・・・			qz＞fl≫bi＞ho			
800cm	○○○	①	段丘礫層（黒雲母片麻岩≫閃緑岩・はんれい岩・ペグマタイト）				

凡例

〔鉱物〕ol：かんらん石　au：普通輝石　hy：しそ輝石　ho：角閃石　bi：黒雲母
mu：白雲母　zi：ジルコン　ga：ざくろ石　mg：磁鉄鉱　qz：石英　fl：長石
（　）はごくわずか含まれるもの
〔火山ガラス〕bw：バブル型火山ガラス　pm：軽石型火山ガラス　br：褐色ガラス
ガラスの含有量　● 10%以上　● 1～10%　・ 1％以下
〔柱状図〕△ 軽石　▲ スコリア　⋮⋮ 砂～泥　○ 礫　■ 角礫　≡ 黒土
⥮ クラック、白抜きは火山灰

くなっている。また、この傾向は下部にいくほど強くなる。色調は上半部は黄色、下半部は黄白色である。含まれる鉱物は、長石・角閃石・黒雲母・磁鉄鉱などのほかに、軽石型の火山ガラスを多く含んでいる。これらの特徴を持つこの軽石は、御岳第１テフラ：On-Pm1である。

④　青灰色・灰褐色あるいは褐色の火山灰質の堆積物が、約70cmの厚さに堆積している。鉱物は長石・石英・磁鉄鉱・黒雲母・角閃石・しそ輝石などで、御岳火山の火山灰を主とするが、石英や黒雲母などは、基盤岩の風化砂粒が混入したものであろう。この層の上部には、バブル型の火山ガラスがわずかに含まれる。このガラスは、層準や形態から、鬼界葛原テフラ：K-Tzと考えられる。

⑤　２～５mmの橙色軽石が、約60cmの厚さに堆積している。この軽石に含まれる鉱物は、長石・しそ輝石・磁鉄鉱などである。これらの鉱物のうち、しそ輝石は大型で１mmを越えるものが多く、その表面には鉄鉱物が付着している。これらの特徴から、この軽石層は御岳伊那テフラ：On-Inであり、その噴出年代は、7.3～7.5万年前（竹本ほか1987）である。

⑥　厚さ約80cm、淡い褐色の火山灰層である。含まれる鉱物は長石・しそ輝石・磁鉄鉱を主としており、御岳火山の噴出物と考えられる。

⑦　赤褐色スコリアの混入する、非常に硬い褐色火山灰層の上に、砂質の堆積物が重なる。上部の砂質部分は基盤岩の風化物を主とするが、下部は新期御岳上部テフラの火山灰である。厚さは合わせて30cmである。

⑥と⑦との境界から上と下では、テフラの色調がやや異なっている。⑥から下部のテフラは新期御岳下部にテフラ、⑦より上部のテフラは、新期御岳上部テフラと呼ばれている（竹本ほか1987）。

⑧　３～６mmの赤褐色スコリアが、およそ20cmの厚さに堆積する。このスコリアは、磁鉄鉱（かなり大型の自形結晶を含む）・しそ輝石・長石・普通輝石などの鉱物組成から、御岳三岳テフラ：On-Mtと考えられる。On-Mtの年代は、約5.7万年前（竹本ほか1987）である。

⑨　最上部には約２mの褐色火山灰が堆積している。鉱物の組成から、この堆積物は主として御岳の火山灰である。この層の下部に混入する赤褐色のスコリアは、コークス状の岩片を含むことなどから、御岳屋敷野テフラ：On-Yaと考えられる。この層の上部には、バブル型の火山ガラスがわずかに含まれている。このガラスは形態と層準などから姶良Tnテフラ：ATと考えられる。ATは、伊那谷の多くの露頭で、地表から数十cmにその層準がある。この露頭では上部の数十cmが欠如しており、ATの層準は、この柱状図の範囲より上にあるものと思われる。ATの年代は、2.1～2.2万年前（町田・新井1976）である。　（寺平　宏）

第３節　歴史的環境

１．周辺の遺跡（第２図）

中沢地区の中沢台地上および新宮川流域、下間川流域には縄文時代から中世まで30箇所余の遺跡が存在しており、以下、時代毎に概観して行くこととする。

旧石器時代は、表面採集で尖頭器・石斧が発見された以外に周辺遺跡での出土例は無いが、自然湧水地点のある洪積世の段丘地形と地層で構成される本台地において、今後も発見される可能性は高い。

縄文時代の遺跡は、天竜川河岸段丘の第２段丘上には古城南（26・中期）・柴（32・後期）遺跡が、第５段丘面には横山Ａ（17・草創期、早期）、横山Ｂ（19・前期末）はじめ、径80～100mの楕円形集落址の存在が想定されている高見原遺跡（18・中期）が広がっており、衛星的な位置を保つように、東原（21・中期）、久保垣外（20・中期）、日向（15・中期）、下間（16・中期）、持木平（13・中期）の各遺跡が所在している。また下間川左岸の狭い山麓線上には、梨木平（22・中期）、細久保（12・中期）、小山II（６・後期）遺跡が並列している。新宮川流域では、山麓の小規模な台地上に五郎垣外（33・中期）、太座垣外（31・早期）が、低位段丘上に配石址が発見された小林

(30・中期) 遺跡がある。

以上のように縄文時代の遺跡が最も数多くあり、特に中期遺跡の分布が密な状況にある。

弥生時代になると、遺跡数は急に減り、久保垣外 (20・後期)、羽場前 (7・後期) 遺跡に遺物が散見する程度である。高燥で水が少ない台地地形や傾斜面の多い段丘地形が生活条件に適さないためと思われる。

古墳時代の遺跡も少ない。細久保 (12) 遺跡で古式須恵器片が採集されている外、東原 (21) 遺跡に数基の墳丘が過去にあったと伝えられているが定かではない。

奈良・平安時代になると中沢台地周辺で遺跡数が多くなる。台地上に東原 (21・平安)、久保垣外 (20・平安)、徳光地 (28・平安)、一本柿 (4・平安) 遺跡があり、新宮川の低位置に坪の内 (9・平安末) がある。また下間川流域には灰釉陶器が出土する遺跡が多く、梨木平 (22)、横山 (19)、小山 (6)、日向 (15)、ごみ垣外 (11) 遺跡等がある。第2河岸段丘上の古城南では発掘調査によって、奈良時代末の住居址2軒が確認されている。

鎌倉・室町時代においては、台地上に当遺跡はじめ、一本柿 (4)、高見城址 (2)、白山城址 (8)、坪の内 (9)、香花社 (10)、町 (14)、日向 (15)、高見原 (18)、横山 (19) と1.6kmの長さに遺跡が展開している。

坪の内遺跡は昭和60年に地下2mの層位で発見され、12世紀後半～13世紀前半の掘立柱建物址が認められた。

同年、香花社遺跡も社の建つ円形丘の周囲に周濠が廻っていることがわかり古式城郭であると認められた。白山城址には単郭長方形の郭が確認され、古瀬戸灰釉陶器片等が出土していた。また当遺跡の北西に続く高見城址は、西城、外城などの郭が残っており、台地長方向に対して直角に掘り割る堀が何本か認められている。台地上で特に家が密集する地域には町遺跡があり、「ますがた」と直線道路と屋敷割とを現在も残しており中世町屋形式のおもかげをとどめている。台地先端の高見原遺跡では、昭和61年の発掘で中世館址と見られる建物3棟と近世初頭の建物3棟等が検出されている。

当遺跡と下間川をはさんで南の対岸には小山Ⅰ遺跡 (3) があり、昭和59年度の発掘によって室町時代中期に造営された単郭方形居館址であることがわかった。郭の規模は50×60mで、内部には掘立柱建物、池泉、水路、門、櫓などの跡が検出され、15世紀に100年程度の間継続された豪族の生活址であることが判明した。

その他、河岸段丘の第4段丘端に菅沼城址 (24) が、第2段丘端には古城址 (27) が、新宮川右岸の段丘端には原城址 (34) が、新宮川右岸の河岸段丘に曽倉館址があり城郭の形を遺存している。

また菅沼区の大楽寺跡 (25) には「明徳三年」の宝篋印塔があり、現在は常秀院内に移されている。

以上のように中世の遺跡は中沢台地上に密に分布しており、この地域が三峯川以南、陣馬形以北一帯を統治した中沢氏の本拠であることを示している。 (北　澤)

第Ⅲ章　発　掘　調　査

第1節　発掘調査の方法 (第4・5・6図)

調査区の説明は第5図により、大別してⅠ～Ⅳ区を使用し、さらに未掘部分や埋没保存区の説明の必要を考えて、Ⅰa (調査)、Ⅰb (未調査)、Ⅱa (市道工事部分)、Ⅱc (縄文遺構を埋没保存した区域)、Ⅱb (Ⅱa・Ⅱc以外の区域)、Ⅲa (調査)、Ⅲb (未調査) に細別して調査区名として使用するものとする。

調査前の当遺跡は、的場遺跡が縄文から奈良・平安、中世にわたる時代の複合遺跡として、門前遺跡が縄文時代後期の遺跡として考えられていた。両遺跡とも未発掘であり遺跡の境界も不明であったので、調査の便宜上Ⅱ区とⅢ区の間を遺跡を分ける線として、遺跡別の調査計画を策定し調査に着手した。その後の遺構検出によって縄文中期の集落等が両遺跡地域にわたって存在することがわかったが、発掘調査経過で述べたような状況にあったので、

遺構・遺物を遺跡ごとに分けて取り上げや記録を行っている。調査区ではⅠ・Ⅱ区が的場、Ⅲ・Ⅳ区が門前である。

また当初、Ⅱ区とⅢ区とは面積が大きいため4×4mグリッド方眼を設定し、Ⅰ区とⅣ区とは道路部の不定形な調査区であるのでトレンチによる試掘を行い、遺構等を確認した時点で拡張して調査する方針で調査を始めている。後にⅠ区については遺構の状況から面的な調査となったため、グリッド網を伸ばして位置の特定を行った。

グリッドの軸線は、発掘場所の特定を容易にすることを考慮して、広域農道の東西直線部分の方向を基準として設定している。グリッド名は南西隅を基点に東西方向にカタカナを、南北方向にはⅠ・Ⅱ区（的場）算用数字をⅢ区（門前）はアルファベットを用いた。Ⅱ区の4列が先に述べた広域農道の東西直線部分のセンター線と重なることとなる。

調査順は発掘調査経過で記述したように、着手時の対象域が稲作中だったためや、市道工事に合わせなければならない事態となったため調査区ごとに実施し得ず混乱したが、基本的に中世生活面までで掘り下げを一旦止めて記録し、その後さらに掘り下げて縄文時代遺構を確認する方針をたてて本発掘に着手した。調査を進める中で、Ⅰａ・Ⅱａ・Ⅲａ区では、重機で水田耕土を除いた折に地場層もしくは地場面直下で縄文時代遺構を発見し、中世面は水田造成時に既に破壊されていることがわかったために、一部を除き中世面の確認は行っていない。なおこのことから、調査区域の自然地形は東側が高く西が低かったことを推察できる。さらに中世遺構の検出はジョレンがけを数回行って除々に土層を剥ぐことによって、できるだけ上面で中世面をとらえるよう努めたが、柱穴等の埋土とほとんど同色の土層であるため落ちが多いと判断して、ローム漸移層直上まで掘り下げた段階で測量を実施して記録をした。

調査記録は、Ⅱａ区とⅢａ区の縄文時代遺構とⅡｂ、Ⅱｃ区の柱穴群等の中世遺構はRCヘリによる航空測量を実施して期間短縮をはかった。その他で検出した遺構については平板実測や断面実測等で測量している。写真記録は35mmモノクロおよびリバーサルフィルムで撮影を行った。

土層層位はⅠ層—黒褐色土（畑耕土）、Ⅱ①層—灰褐色砂質土（水田土）、Ⅱ②層—灰褐色土（地場土）、Ⅲ①層—黒茶藤褐色土（中世遺物包含層）、Ⅲ②層—黒茶褐色土（縄文遺物包含層）、Ⅲ③層—暗茶褐色土（ローム漸移層）、Ⅳ層—ローム層を標準として、必要に応じて層位を付け加えることとした。　（北　澤）

第Ⅳ章　遺構と遺物

第1節　旧石器時代

1．槍先形尖頭器（第164図、PL71-2）

的場第Ⅱａ区出土の黒曜石製槍先形尖頭器で、現長70㎜幅28㎜厚さ11㎜を測る。先端部及び基部がわずか欠失している。表面及び背面ともに左側縁からの中軸に対して直角に打撃された剥離痕が基部から先端まで4面ないし5面によって調整され、凸レンズ状の器体が作出されている。さらに両縁辺部は微細な剥離が加えられて鋭い刃部が作出されている。

2．大型石斧（第164図-11）

昭和33年4月、的場遺跡第Ⅱ区と第Ⅲ区の境界線の西端付近のローム層から出土した尖基形大型石斧である。緑泥片岩の自然礫を素材にして、これを石斧形に作製する中途の石器と思われる。平面は紡錘形を呈し、断面楕円形を呈し、現長223㎜幅87㎜厚さ57㎜重量1,250gを測る。器体の腹面は中軸線よりやや左側から加えられた打撃によって大きく剥離され、右側縁も5面の剥離によってカマボコ状の器体が作出されている。背面の右側縁の上半部は、

先端部からの大剥離によって調整されているが、剥離が厚くなったために器体が薄くなり、次の剥離が行われなくなった。基部からの薄い剥離も失敗したために調整加工は中止された。そのために断面楕円形になり刃部は作出できないままに終わった。（林）

第2節　縄　文　時　代

Ⅰ．草　創　期

1．土　　器

A．押縄縄文土器（第62図-8～12、PL38-3）　発掘区全面から7点が検出された。全て微細な破片であって出土層位が確かめられたのは1点のみで2次的なものが大部分である。茶褐色の色調を持つ薄手の土器で、胎土に雲母・長石・石英の粒子を含む厚さ3～7㎜の土器で、口縁やや外反し胴部やや膨らむ器形であること以外は細片のため不明である。施文は口縁に対して縦位に、縄文原体の側面を押圧して施文する。縄文原体の太さは2㎜、長さ20㎜、これを5㎜間隔で並列する。（9）は門前第16号住居址から市松文土器はじめ押型文土器群と共に検出された。原体の縄にはLRとRL縄文の2種があって、（8・9・10)はLR、(11・12)はRLである。

B．爪形文土器（第62図-7、PL38-1の下）　外反する口縁部の上端に、縦の爪形文を口縁に平行して並列している。施文は粗い2段的構成で口唇内面にも条痕状の施文がある。口縁は口唇近くで急に外反する。裏面にも横方向の擦痕が認められる。胎土に長石・雲母の細粒を含み、焼成中位の淡灰褐色を呈する、器厚5㎜の土器である。

1片のみで器形は口縁部以外不明である。Ⅱc区中央部のグリッド　ト－8から出土した。

C．表裏縄文土器（第62図-1～6、PL38-1・2）　的場・門前遺跡の第Ⅱ・Ⅲ調査区の全面から12片の土器が検出されたが、プライマリーな包含層から検出されたのは（6）のみで、他は重層する縄文中期遺構の覆土から2次的な包含状態で出土した。口縁はやや外反するもの（1）と、内傾のもの（2）とがある。胴部はやや膨らむ深鉢形土器であるが胴部以下底部の器形は不詳である。胎土に長石・雲母を含み、焼成中位の茶褐色を呈する土器である。器厚は口縁で6～7㎜、胴部以下で7～9㎜を測る。施文は口縁上端部以下、器面全面に不規則な回転縄文が施されている。1～6ではLR縄文が施文され、胴上半部では縦方向回転、胴下半部では不規則な方向となる。縄文原体の条の太さは3～4㎜で、長さは20～40㎜である。

2．石　　器（第164図）

A．槍先形尖頭器　（4）は的場Ⅱc区出土の表採品で、黒曜石製尖頭器である。現長28㎜現幅27㎜厚さ7㎜を測るが、中央から断折しており、推定6～7㎜内外の槍先形尖頭器の先端部である。黒曜石の剥片を母材として両側面から剥離調整を加えて、断面凸レンズ状の器体を作出している。さらに全面に押圧剥離による細部調整を加えられた鮮鋭な尖頭器である。

B．有舌尖頭器　（2）は第Ⅱb区のグリッドから出土した頁岩製有舌尖頭器の基部断欠品である。現長33㎜幅13㎜厚さ8㎜で、丹念な基部調整が両面とも加えられている。

C．抉入尖頭器　（7）は黒曜石の分厚い剥片を素材として、両側から剥離を加えて断面凸レンズ状に調整し、さらに基部の片側を欠取し、「抉（えぐり）」を作出している。さらに全面に押圧剥離を加え、鮮鋭な先端部及び基部を調製している。基部片側のえぐりは「かえし」とも思われ、漁撈用の銛の先端であるのかもしれない。Ⅱc区表採品。

D．石　鏃　（3）は（7）とともに出土した黒曜石製長脚鏃であるが、片側の脚が欠失している。長さ25㎜厚さ2㎜を測る。（8）は長さ26㎜幅18㎜厚さ5㎜を測る青チャート製三角鏃である。脚部も丹念に調整。ともにⅡc区

表採品。

E．搔　器　9・10は拇指状掻器。(9)は黒曜石製の掻器で、径16㎜厚さ6㎜を測る極めて小型の石器で、縁辺に細かな掻器としての調整が認められる。10は青チャートを母材とする拇指状掻器で、径19㎜厚さ5㎜を測り、縁辺に細かに掻器としての刃が整えられている。IIc区既表採品である。

F．石　核　6は黒曜石製の長さ35㎜幅11㎜厚さ6㎜を測り、表裏に4面の剥離痕が認められ、両端から交互に剥離されている、いわゆる曽根型石核である。IIc区既表採品である。

G.剝　片　5は長さ34㎜幅11㎜厚さ8㎜を測る縦長剝片であるが、断面3角形で打面の調整が細かく行われており、角錐状石器としての条件を備えている。IIc区既表採品である。　(林)

II．早　　期

1．遺　　構

(1) 門前第16号竪穴住居址（第42・140・141図、PL31・60）

第1号竪穴式住居址のプラン内床下に検出された。この竪穴遺構の全容は、プラン西半部が発掘区外に属するため未発掘で東半部のみ精査することができた。竪穴のプランは長径2.7m短径2.2m内外の不整楕円形で、深さ40cmを測り、床面は軟らかでほぼ低平である。床面東壁側に太い柱穴が設けられているが、これは第1号住居址の床面下に設けられた支柱の跡であると思われる。出土遺物は覆土中、上部に中期中葉の土器片が出土した。床面上に厚さ15cm程の黒褐色の腐食土層があり、押型文土器破片が市松文19点、山形文8点、格子目文6点、楕円文9点、撚糸・縄文19点、無文9点の計63点。黒曜石剝片が103(縦長フレーク16点・その他フレーク87点)が検出された。

(2) 集　石　址（第10図、PL 4）

集石址5基がIIIa区の南東部隅に直列状態で検出された。その範囲は南北22m、東西8m間である(第7図)。

A．集石址1　長径1m短径40cmの楕円状に自然礫を配置した遺構で、押型文土器(市松文1片)と無文土器片9点を伴った。

B．集石址2　a址－深さ30cmの鍋底形の土壙に径70cmの集礫をしたもので断面形凸レンズ状を呈し厚さ25cmを測る。押型山形文、無文丸底の土器片を共伴した。b址－黒土層中に自然礫10個を1.5mの長さに配列したもの。縄文中期後葉土器片若干を伴った。環状配石址の1部と思われる。

C．集石址3　ローム層上面に枕大の石10個を円形に集めた遺構。押型市松文1点および中期中葉の土器片12点を伴った中期環状配石址の1部と思われる。

D．集石址4　鍋底状の土壙内（長径1.5m深さ15cm）に不整楕円状に枕大の平石4個を敷き詰め、その上に小礫30数個を配したもの。押縄文土器1片、無文土器薄手破片2片を伴った。

E．集石址5　径1m深さ20cmの鍋底状土壙に小礫30数個を配置してあるもの。押型市松文土器、楕円文土器、爪形文土器が各3点、撚糸文4点、格子目文1点、黒曜石剝片3点を伴った。

(3) 土　　壙（第11図、PL 3）

A．的場土壙270　第IIb区西部の丘端に近い位置、ク－3グリッドに検出された。第57号竪穴住居址の床面下のローム面を穿って設けられた長径80cm深さ30cmの楕円状皿形を呈した土壙である。第57号住居址の配石炉址によって南隅の一部を攪乱されている。北半部の低平な床面の北東隅から西壁にかけて円周状に小礫が配列され、これに重なるように絡条体圧痕文土器片及び石山式土器片が遺存しており(第11・68図、PL43)、生活的なピットと思われた。

B．的場土壙276　土壙270の北東４ｍの位置にあり、長径161cm短径141cmの楕円状を呈する深さ30cmのタライ形の土壙である。床面は低平で南側壁に近く４個の小穴が直列状に設けられていた。長さ40cm幅10cmの小溝が東壁に近く設けられている。その小溝の北側に絡条体圧痕文の土器片が遺存していた。

２．土　　器

(1) 押型文土器

発掘区II区とIIIａ区の全域3,400㎡から出土した押型文土器は（撚糸文を含む）、総数527片が検出された。出土地点は縄文時代中期の竪穴住居址群及び土壙群と重層しているため、プライマリーな包含状態は一部の遺構で把握できた以外は大部分が縄文時代中期遺構の覆土に２次的に包含されていたもので、全て微細な破片であり、器形を復元し得るものは１点も存在しなかった。これを文様別にすると大別して５分類できる。

第１類　市松文土器（第63図、PL41）

総数115片が出土し、全体の27％を占める。口縁部やや外反し胴部以下やや膨らむ、底部乳房状の尖底深鉢形土器である。施文は凹部と凸部市松状に構成される粒子の形によりA．方形、B．長方形、C．舟形沈文、D．ネガティブ楕円文に細別される。

A．方形市松文　第63図-１，２，11,15,20,28～30で、やや外反する口縁部の口唇外端に連続刻目文を付す。胎土は色調黒褐色の、器厚は口縁部で８～９㎜、胴部で６～７㎜、金雲母、長石粒を含む。施文原体は20㎜内外で、口縁部は横位の施文、胴部以下は縦位で施文される。

B．長方形市松文（第63図-１，２，６～８，11,12,20,28）　一辺６～３㎜内外の長方形の凹凸が市松状に押捺される文様で、時に平行四辺形に近くなる場合（６，７）等もある。直口に近く立ち上がる口縁の端部は、平坦で連続刻目文が付されるもの（１，２，６）と、円滑で表側斜面にのみ連続刻目が付される場合（７，８）がある。口縁部は横位に胴部以下は縦位に施文される。

C．舟形沈文　紡錘形の陰刻文をもって構成される。市松文状に連続押捺されている文様で従来の呼称を用いた。　第63図-３～５，７，８，10,12,13,14,16,17,21,22,24,25,31以上は大型。18,19,26,27は中型。23,32は粒子小型に分けられる。

D．ネガティブ楕円文（第63図-13,29）　楕円状凹文が連続市松状に施文されているもので、従来の呼称を用いた。　29は方形に近い粒子があり、13は舟形沈文に近い粒子であるが、原体彫刻の形の違いによるものである。原体回転方向は本類に共通して一様のものと思われる。

本類土器は断片のみであるので総合して見ると次のような土器になる。口縁やや外反し胴部はやや膨らみ断面砲弾形を呈する、やや厚手の尖底深鉢形土器である。器厚は口縁部で８～12㎜（25,33）、胴部以下で７～９㎜を測る。　胎土中に長石末、黒曜石末、金雲母末、石英末を含み、焼成中位の茶褐色を呈する。直口状の口唇面の外側斜面または外反する口縁端部に連続刻目状に舟形沈文、長方形市松文を一条回転施文する例が多い（１～８）。器面には原体の中軸に平行して陽刻した方形、長方形、楕円の粒子で構成した市松状の原体を、口縁部では横位に、胴部以下縦位に回転し密接全面施文している。文様の粒子が大きい点や長方形市松文を山形文に併用している点など、奈良県大川遺跡の市松文に類似していよう。

第２類　山形文土器（第64図、PL40）

総数130片が出土し、全体の26％を占める。その内23片を図示する。A．山形が波状になるもの、B．山形が角ばるもの、C．ハ字状のもの等、文様要素により３種類に分類できる。

A．波状文（２，４～６，８，10～13,16～18,23）　口縁部の表裏側に山形が施文され、表側は口縁平行横位に山形

が施され、裏側は縦位に施文される。口唇部にも細かい山形が施文されている(2)。また口唇部に刻みを施された(6)もある。胎土は金雲母、長石、黒曜石の粉末を含み、暗褐色を呈する土器で、器厚は口縁部で4～8㎜、胴部で8～9㎜を測り、薄手ものと厚手のものがある。

B．角形文(3,7,9,14,15,19,20,22)　波状文に比べ山形の角度が直線状のもので、波長が長く20㎜を測り、凹部の幅が4㎜の大型が多い。胎土に長石粒を混入し黒褐色を呈する焼成中位の土器で、器厚7～9㎜で厚手のものが多い。口縁は外反し口唇に山形文を横走するもの(9,19,22)がある。

C．ハ字状文(1,21)　山形線の条がつながらず屈曲点で切断された形状、言い換えれば長楕円文が「ハ」の字状に連続する形状で楕円文の一種とも思われるが、ここでは山形文に入れた。器厚6㎜、胎土中に長石、金雲母が混入された茶褐色の土器で、口縁部は曲線的に外反し胴部はやや膨らむ。

第3類　格子目文土器(第65図-1～12、PL39-1)

出土総数96片を数える。全体18.2%を占め、内12片を図示した。格子目の形により次の3種に分類できる。

A．正格子目文　一辺8㎜の正方形の粗大な格子目が形成される。第65図の4,8,12等で口唇外側に連続刻目が付され、口縁部は縦位、胴部は横位の施文が施される。

B．斜格子目文　一辺4×3㎜の小振りな文様単位で、斜格子状の全面施文が施される口唇部は断面丸く平滑で、時に格子目文が施文されるものがある。胎土は比較的厚く口縁部で8～9㎜、これに対して胴部は6～7㎜と薄い。

C．長格子目文　長方形の格子目文で横8㎜、縦4㎜のいわゆる筵格子状のもの(7)があるが、器面の大部分が剝離して左端に原面が残っている。また⑽は斜格子状であるが格子の規模は(7)と同じである。

以上のようにCを除いて正格子は大型、斜格子は小型であることが本類の特徴の一つである。本類は完形に復元されるものが無いので各部分を総合してみると、口縁わずかに外反し、口唇断面は円滑なものと角張るものとあり、中に外側に斜面が設けられていたものがあり、その面に格子目が付けられる場合がある。口唇施文は無いものと刻目文が付されるものがある。器厚は口縁部で8㎜内外、胴部で10㎜内外の厚さで、胎土に長石、金雲母、黒雲母が含まれ、焼成は中位の黒茶褐色を呈する土器で、尖底深鉢形土器である。

第4類　楕　円　文(第65図-13～30、PL39-2)

総数71片を数え、全体の13.5%を占める。内17片を図示した。従来の楕円押型文を全面に密接施文したもので、粒子の形によりA．円粒文とB．菱形文に分けられる。

A．円粒文　粒子の径により大(L)、中(M)、小(S)に分けられる。大は径7㎜以上(20,24,28,29)、中は3～6㎜(13,19,21～23,26)、小は2㎜以下(14,18)である。

B．菱形文(16,17,25,30)　長径12㎜の菱形の凸文を密接全面施文したもので、口縁部横位回転、胴部以下縦位回転施文している。口縁やや外反するものと直口のものとがある。胴部やや膨らむ尖底深鉢形土器と思われる。器厚は口縁部で7㎜内外、胴部で9㎜内外。胎土に長石、黒雲母等を含み、黒褐色の焼成中位の土器である。楕円文の中ではあまり知られていない文様である。

第5類　撚糸文・斜縄文(第62図、PL42-1)

器面全体に撚糸文を回転し施文した土器で、原体の違いにより3分類できる。A．撚糸文、B．網目状撚糸文、C．斜縄文に分けられる。

A．撚糸文　器面全体に縦位・横位の撚糸文を回転施文した土器である。縦位は第62図－15,16,17,21。横位は20,26である。胎土に長石、金雲母を含み、色調黄褐色を呈し、焼成中位である。

B．網目状撚糸文　太さ1.5㎜の撚糸により、一辺４～５㎜内外の網目を施文するもの(13,14,18,19,22,23,24)で、口縁部の内外面に施文されている(20)は内面が網目状、外面が横位の撚糸文である。

本類土器は、口縁外反するものと口縁直行するものとがある。胴部はわずかに膨らむ砲弾状の尖底深鉢形土器である。口縁部器厚は７～８㎜、胴部は10㎜内外で、胎土に長石、黒雲母、金雲母を含む黄褐色の、焼成中位の土器である。

C．斜縄文　太さ２～４㎜の縄文原体（LRまたはRL）を口縁に横位に回転して施文した土器である。第62図－25はLR、27,28,29,30はRLである。器形は口縁下部から急に外反するものと直立するものとがある。胴部やや膨らむ尖底の(26)深鉢形土器である。

小　　結

出土した押型文527片を大別して５類、小別して15種に分類した。総体的に観て、施文はバラエティーに富む複雑な様相を示している。加えて出土範囲は3,400㎡で、しかも縄文時代中期の遺構が密集して重層し、出土層位をプライマリーな状態で精査し得たのは住居址１基、集石址５基のみであって、わずかな遺構に止まり、大部分が２次的な包含状態で出土した。したがってこの土器群が単一の時期の所産か、複数にわたる時期の所産かを明確にする必要性が生じた。この点を施文による構成比で見てみよう。冒頭に記した出土破片数の構成比もさることながら、土器個体数（口縁部）による算定を行ってみると次のようになる。第１類市松文土器24点・40%、第２類山形文18点・30%、第３類格子目文10点・16.6%、第４類楕円文５点・8.3%、第５類撚糸文・縄文３点・18%の構成比を示している。県内で著名な押型文遺跡の施文構成比とはそのパターンが大きく異なる。最も類似するのは立野式であり、格子目文が47%、山形文28.1%が主要な数を占めるのに対して、本遺跡では市松文、次いで山形文が主位を占めており大きな差異を示している。以上は発掘調査の遺物整理の段階で気付いたことや、肉眼の観察による程度の調査であるので、今後科学的精査により確認し、この土器文化を解明すべきものと考えられる。

(2) 絡条体圧痕文土器

A．第66図－１は的場土壙270から出土した土器で、底部を欠く大型破片である。色調黒褐色を呈し、口縁帯部に絡条体圧痕による装飾状の施文がある。口縁に平行に逆Ｃ字状の文様を横位に並列し、その下部に２条の横位の直線文、その下部に山形文を横位に並列する。その口縁部文様帯に重ねて口縁端部から胴部以下に至るまで器面全面に撚糸文原体を縦位に回転施文する。直口状の口縁の口唇に絡条体を点列し施文する。なおこの撚糸文の条の太さは２㎜を測る。胎土は多量の繊維と長石を含み、焼成下位の粗製の土器で、砲弾状の器形を呈する尖底深鉢形土器であろう。本県出土の同類土器の中では極めて装飾性に富む施文を有するのが特徴である。

B．的場土壙276出土の絡条体圧痕文土器(第66図-２・３）である。胎土に繊維を多量に含み、長石粒も認められ、色調赤褐色を呈する、器厚９㎜の厚手の深鉢である。口縁下部に１条の厚い隆帯が付され、その上に直角に絡条体圧痕を10㎝間隔で点列する。隆帯の下部にこれと平行する絡条体の直線文３条を施文し、その下部は垂下する絡条体直線文３条の施文帯とその横にＸ字状の施文帯とが交互に配される。また別の個体(３)では横走する隆体は無く、その位置に横位の３条の絡条体直線文が施され、その下部は弧状の圧痕文５個が重ねられた施文帯とＸ状施文帯とが交互に交錯する。この２個の土器とも裏面は平滑に調整されている。

(3) 石山式土器

前述(２)の土器と同じく的場土壙270から出土した。口縁下部から胴部までの破片である。現長13㎝の、色調淡黒褐色を呈し、器厚４㎜の薄手の土器で、胎土に長石微粒を含む、焼成上位の堅緻な深鉢形土器である。口縁下部に大型の爪形文が横位に３帯施文される。各列の爪形の角度が異なり矢羽根状を呈している。爪形は長さ10～12㎜

幅３㎜を測る。これに天神山式土器破片(第67図-2)が共伴した。

(4) 薄手細線斜縄文土器

的場第７号竪穴式住居址から出土した１個体の半部であるが、14片に断片化している(第67図の上、PL41の下)。　口縁ゆるやかに外反し胴部わずかに膨らみ、底部は欠失しているが砲弾形の尖底になるであろう。色調は黒褐色を呈し、器壁は薄く２～４㎜で、胎土に長石粒を含み、焼成は堅緻である。器面の裏面に無数の指圧痕が点綴される。ゆるやかに外反する口縁は端部に至ると厚くなり器厚７㎜を測る。平坦な口唇面にRL縄文を回転施文し、口縁内外両面に横位に回転施文し斜縄文帯(幅15㎜)を作り、それに重ねて幅20㎜の櫛状原体で口縁に平行した波状文を描き、その下部以下は、胴下部まで全面に同工具をもって条線文を施す。時に波状文と交錯する場合もある。おそらく東海地方の縄文早期後葉に属すると思われるが本県内では未知見の土器である。

(5) 薄手細線指痕文土器

発掘区の全域から単片で出土した土器片11片(第67図の下)である。極めて薄手の土器片で器厚２～５㎜を測り、胎土に長石、雲母の微粒子を含み、淡黒褐色を呈した焼成堅緻な土器である。何れも器面の表裏に指圧痕が無数に点綴されている。12は外反する深鉢の口縁で、外面に貼付られて肥厚した口唇の平坦面に径６㎜の楕円形圧痕を点列施文する。口縁帯下部は１条の変色部があり、薄い隆帯が付されていたと考えられる。口唇下部から縦位の細線が全面に施されている。14・16・18・22は微片であるが12と同様の土器と思われ、表面に細線文が認められる。14は薄い口唇が貼付によりやや厚くなる(４㎜)。口唇端から縦位の細線文が施され、13・15・17・20・21は胎土色調ともに12と同じであるが表裏とも細線文は認められない。

３．石　　器 (PL72)

石器は47点程が発掘区全面で出土している。

A．石　鏃　黒曜石製石鏃６点で、鍬形鏃始め早期の石鏃が大部分である(２)。

B．小型磨製石斧　緑色岩製の局部磨製石斧が１点(４)。

C．黒曜石斧剝片　小型縦長剝片20点、小型横長剝片８点等が出土している(１・３・４)。　(林)

III．中期及び後・晩期

１．竪穴式住居址 (12～55図、縄文時代住居址一覧表)

前述のように、現場では的場が第１～63号を、門前が第１～24号の住居址番号を付して調査にあたったが、再検討によって的場第６、19、41～50号住居址は欠番とした、また中期土器編年による時期区分は中葉をⅠ～Ⅵ期の６編年に準拠している。本遺跡では石で囲う炉の形態に２種類あり、石組炉と掘炬燵(ほりごたつ)状石囲炉とに大別できる。石組炉は自然石を炉の周りに並べるもので、掘り込みは概して浅くなる。掘炬燵状石囲炉は方形もしくは長方形の深い掘り込みの側壁を割石を立てて囲うもので、焚口は平らに石を据える例も多い。なお紙数の関係上出土遺物の詳述ができないので、出土石器は住居址別一覧表を、出土土器は各実測図・拓影図を参照されたい。　(林・北澤)

(1) 的場第１号住居址 (第12・68図、PL ５)

本址は集落の西部に位置している。プランは西側が崖で切られているが五角形と思われ、4.8×(4.5) m程度の規模であろう。掘り込みは０～８ cmと浅く上部は削られていると思われる。住居址内には土壙350、351が本址より後に掘られている。炉は中央やや奥に偏しており、掘炬燵状石囲炉で炉石は全て抜かれている。周溝は南東に

認められるのみである。主柱穴で残っているのはP_1～P_4で元は5本と思われ、主軸はN-61°-Wである。埋甕が口縁部を欠く状態で入口中央に埋設されている。石器は覆土から6点、床面で5点が出土している。出土土器は後葉III期の上伊那タイプのものが多く、住居址の時期は中期後葉III期に属する。

(2) 的場第2号居住址（第15・69図、PL 6・4・45）

第1号居住址の東に位置し、南東で55住を切り、北東は54住によって貼床されている。また本址より一回り小さい56住の上に貼床をして作られている。土壙は358・359・390が切っており、357は上面に床面が貼ってあり本址より後のものである。また、本址は覆土に多量の炭や焼土が混ざっており火に遭っている住居址である。プランは円形で5.6×6.1mを測る。掘り込みは20～30cm。炉は掘炬燵状石囲炉で中央奥寄りに位置している。炉石は焚口側の一部が抜かれているが、三方の炉石は薄い割石を45°の角度で据えており整った形態である。周溝は全周する。

主柱穴は6本と思われるが現存するものはP_6～P_9の4本であり、主軸はN-55°-Wとなる。

埋甕は入口中央やや右の位置に口縁部を欠く状態で埋められている。出土石器は覆土6点、床面12点が出土している。なお覆土上面に片麻岩製の石皿があったが、配石帯に伴うものであろう。出土土器は後葉III期のものも混ざるが主体はII期で下伊那タイプのものが多い。特に本址の炉の東で、底部を床面に接し口縁部を覆土上面に出した正立の状態で完形の鍔付土器が検出された。胴の張る壺形で一対の輪（筒）状の把手が付く。内面及び把手上面と把手と対角の隆帯には朱彩が施され、把手内側の上は黒色の彩色があると思われる特殊な土器である。焼きは悪く、特に胴下半部がもろくなっている。隆帯間は縄文を地文とし沈線による入組文が配されており、時期は後葉II期のものである。住居址の時期は中期後葉II期に属する。

(3) 的場第3号住居址（第13図）

第54号住居址の北に位置する。本址は炉址を確認したのみで西半は調査区外で未調査である。炉から東の段差までは70cmとさほど大きくない住居址であることが予測できる。炉はコ字状の石組炉だが西側の炉石が抜かれている可能性もある。石器は剝片が出土したのみで、土器の出土はなく時期は不明であるが炉の形態からみて縄文中期と思われる。

(4) 的場第4号住居址（第14・70図、写真6・45）

第2号住居址の南に位置し、土壙23・347・348・349・354・355が切っており、上部に集石が伴う土壙356は本址より後に作られている。プランは隅丸長方形に近い変五角形で4.0×5.0mを測る。掘り込みは0～20cm。炉は掘炬燵状石囲炉で中央やや奥に位置し、炉石は一つを炉内に残す外は抜かれている。周溝は北東に認められるのみである。主柱穴はP_1～P_5の5本で、主軸はN-86°-Wとなる。埋甕は入口中央よりやや右に、口縁と胴下半を欠いた状態で埋設されている。出土石器は少なく7点が出土したのみである。土器は概ねIII期の上伊那タイプのものがほとんどで、住居址の時期は中期後葉III期に属する。

(5) 的場第5号住居址（第16・71図、写真7）

本址は耕土除土中に、水田地場面上に炉石がわずかに面を出す形で発見された。後葉I～II期に属する第27号住居址より、層位的に10cm程度上部に作られているのでII期より新しいことは確かである。炉址は掘炬燵状囲炉で、主柱穴は認められずプラン等も不明である。地場層と床面がほとんど同じレベルで不確かであるが、炉の外側に直径3m位の環状に石が配列されているようにも見受けられた。石器は24点が散らばった状態であり、土器は炉内出土のものも含め中期中葉から後葉II期までのものが混在していた。

なお第16図中の埋甕は本址に属さない単独のものと思われ、後葉I期梨久保B式の深鉢が埋設されていた（第

72図)。 (北　澤)

(6) 的場第7号住居址（第17・73・74図、写真7・45）

第60・61号住居址の東側で、集落の北東部に位置する。プランは五角形で5.9×5.3mを測る。掘り込みは30～40cmで周溝が全周する。炉は中央奥寄り位置し、変五角形の石組炉で炉石は南半のものが抜かれている。主柱穴はP_1～P_5の5本でP_3・P_4間に入口があり、主軸はN-24°-Eである。

本址は床上の遺物は小破片がわずかで、多量の石と共に土器・石器が覆土中に含まれていた。住居中央に向って、断面では凹レンズ状に遺物・石等の包含が観察できた。住居廃絶後の廃棄があったと考えることができる。

出土石器は磨石と打製斧を床面上で検出した外は、78点が覆土出土のもので打製石斧が28点と特に多い。また、チャート製のナイフ形石器2点も出土している。直属する土器は狢沢式であるが廃棄された覆土上層のものは縄文を地文とする加曽利E式系の個体が多く認められる点で特徴的である。住居址の時期は中期中葉I期に属する。

(林)

(7) 的場第8号住居址（第18・75図、PL 8）

的場第13号住居址の南、門前第13号住居址の北に位置し、次の的場第9号住居址と同一地点に位置している。

本址の上に9住が作られているが明確な床面は認められなかった。壁は失われているが周溝（a）が西を除いて回っており、プランは隅丸長方形と思われ、南北方向では3.8mを測る。炉（f_1）は中央に位置し、長方形の石囲炉であったと思われるが炉石は抜かれている。主柱穴は（P_1）～P_5の5本で、主軸はN-81°-Eである。住居址の時期は8・9住で取り上げた遺物の中に中葉期のものが混じっており、住居址の前後関係から中期中葉IV期と見られる。

(8) 的場第9号住居址（第18・75図、PL 8）

本址は第8号住居址より後の時期に一回り大きく作られている。炉・周溝・柱穴の状態から2軒分かもしくは建て替えが行われていると思われる。

古住居址は周溝bを伴い円形のプランで4.8×4.5mを測る。炉址はf_2で、柱穴は判然としないがP_1・P_6～P_{10}の6本とすると主軸はN-49°-Wとなる。

新住居址は周溝cが全周する円形プランで4.6×4.9mを測る。掘り込みは10～20cmで住居中央がやや低くなっている。炉址f_3は奥寄りやや左にあり、大型の楕円形石組炉で、炉石は一部を除き抜かれている。主柱穴はP_1、P_{11}～P_{14}の5本で主軸はN-78°-Eである。

出土石器は床面で44点、覆土で16点が出土しており、打製石斧が30点、横刃製石器が12点、磨石11点など多量の石器がみられた。出土土器は下伊那タイプの唐草文系の深鉢が主体的で、若干細条線を地文とする後葉II期の破片が混在する。このことから古住居址は中期後葉II期に、新住居址は後葉III期に属すると見られる。

(9) 的場第10号住居址（第19・76図、PL 8・47）

第15号住居址の南、第8・9号住居址の北側に位置する。本址は土壙の上に作られ、また本址より後の時期の土壙群に掘り込まれている。床面は固くなく本址より古い時期の土壙上にも明確な貼床は認められなかった。

プランは変五角形で4.8×5.3mを測る。掘り込みは10～25cmで周溝はない。炉は土壙覆土上部に焼土が認められる状態で確認された。位置は中央やや奥寄りで、形態は不明であるが掘り込みが浅いことからすると、地床炉か石組炉であった可能性が高い。主柱穴はP_1～P_6の6本で、P_1とP_6の間が入口となり主軸はN-1°-Wである。

石器は覆土で31点、床面で15点が出土している。このうち打製石斧が29点と最も多く、花崗岩製の台石、片麻岩製の石皿がP_4中にあった外、石棒片など大型石器も出土した。土器は後葉III期のものが主体的であるが、土壙群

に属するとみられる藤内II期や結節縄文＋縄文を地文とする後葉IV期の土器片や称名寺式の土器片も混在する。住居は中期後葉III期に属する。

⑽ 的場第11号住居址（第20・21・77図、PL 9 ・44・46・47）

第10号住居址の東、第17号住居址の南東に位置し、第12号住居址及び第16号住居址を切っている。本址では第21図のような状況で炭化材及び炭と焼土が認められ、火に遭った住居址である。また住居中心部には石が集中してあり、投棄されたものと思われる。プランは偏平な六角形で5.2×6.1m を測る。掘り込みは南側で60cm と深く、周溝は南西の入口部で一部途切れる外はほぼ全周し、床面は固い。炉は掘炬燵状石囲炉で中央やや奥に切られている。1.0×1.2m と大型の長方形で三方を割石で囲み、焚口側は平らに石を敷いた整然とした炉である。主柱穴は P_1～P_6の６本で主軸は N-72°-E である。埋甕は入口部中央よりやや右に東西に２つ並べて、両方とも口縁部を欠く状態で埋められていた。石器は覆土で21点が床面で18点が出土している。土器は P_4の西の炭混じりの覆土中、やや床から浮いた状態で完形の香炉型土器が出土した。釣手は橋状で渦巻文を配するもので、沈線文は棒状施文具による押引きによって施文されている。また下半部の外面及び内面には煤が付着する。他の出土土器は概ね後葉III期のものであり、埋甕も同時期であることから住居址の時期は中期後葉III期である。

⑾ 的場第12号住居址（第20・78図、PL10・47）

西側は第11号住居址に切られ、東側は井の水路によって壊されておりプラン等は不明である。炉は炉石の一部が移動しているが円形の石組炉であろう。掘り込みは20cm 程度で、現存する部分で周溝は認められなかった。柱穴は P_{10}のみが残っているが他の柱穴は不明である。石器は覆土で７点、床面で２点が出土している。土器は梨久保Ｂ式土器が主体で、客体として壷状の形状で縄文を地文とし、剣先文が付く渦巻文を沈線で施文する土器（大木８ｂ式に相似する）もみられた。総じて住居址の時期は中期後葉Ｉ期に属する。

⑿ 的場第13号住居址（第23・79図、PL10）

第８・９号住居址と第18号住居址の間に位置し、第２号竪穴址を切り、第14号住居址に貼床される。また土壙66～69に切られている。プランは楕円形を呈し、5.4×5.1m を測る。掘り込みは20～30cm 程度で、周溝は南側の一部で検出されたのみである。炉は中央やや奥寄りにあり、炉石は無く掘り込みが浅いことから地床炉か石組炉であったと思われる。主柱穴は P_1～P_6の６本で主軸は N-7°-E である。伏甕は入口左側に底部を欠いて埋設されていた。石器は多量に出土しており、覆土で18点、床面で25点である。打製石斧が17点と最も多く、横刃製石器が９点とこれに次ぎ、石錘も３点出土している。土器は中葉期土壙に伴うとみられる新道式土器や後葉III期の土器片も混在するが、後葉II期の下伊那タイプのものが多い。埋甕の時期もII期であり、総じて住居址の時期は中期後葉II期に属する。

⒀ 的場第14号住居址（第23・80図、PL10）

本址は第13号住居址の周縁部に貼床（第23図中斜線部分）が検出されたことから、その存在が確認された。13住の上に貼床をして本址を作ったと思われるが、貼床の一部が認められたのみで、プラン・炉址等不明である。13住の覆土上面に結節縄文を施文した土器がつぶれた状態で出土していることから後葉IV期に属する住居址とみられるが詳細は不明である。

⒁ 的場第15号住居址（第22・81図、PL11・47）

第10号住居址の北、第23号住居址の南に位置する。プランは隅丸方形で、規模は3.6×3.4m と小型の住居址で

ある。掘り込みは15～30cmで、住居西側には床面から5 cm高くなっている段差がある。周溝は北、西、南東の3ケ所で途切れている。炉は中央やや北寄りに位置し、円形石組炉で炉内には縄文地文で3条の平行沈線が垂下する土器の底部のみが貼り付けられていた。主柱穴はP_1～P_5の5本である。入口はP_2の西側も考えうるがP_6・P_7間であろう。主軸はN-51°-Wとなる。石器は覆土11点、床面8点が出土している。P_5中から片麻岩製の石皿が出土し、炉の北側の炉石は裏面にくぼみがあり、石皿を炉石に転用したものであった。土器は後葉II期の下伊那タイプのものが多い。また輪状の把手が一対付き、小さな円錐形の粘土を多数貼り付けた土器が床面上で出土している。

住居址の時期は後葉II期である。

⑮ 的場第16号住居址（第20・82図、PL11）

第12号住居址の北西に位置し、本址の南側の大部分は第11号住居址によって切られている。プランは不明で、現存する部分では周溝は認められず、掘り込みは20cm程度である。炉は11住によって半分壊されていて形態は不明だが石組炉である。主柱穴はP_7～P_9の3本が残っていた。石器は磨石1点、横刃製石器2点が出土したのみである。土器は井戸尻III式期のものが多く、住居址の時期も中期中葉VI期に属する。

⑯ 的場第17号住居址（第24・83図、PL12・48）

第16号住居址の北西、第59号住居址の西に位置し、第18号住居址を切っている。プランは隅丸方形で5.9×5.9mを測る。掘り込みは30～40cmで、床面は固い。周溝は東側で一部途切れる外はほぼ全周する。炉は中央やや奥寄りに位置し、形態は掘炬燵状石囲炉で炉石は全て抜かれている。主柱穴はP_1～P_6の6本で主軸はN-60°-Eである。

埋甕は入口中央部に口縁部を欠く状態で埋設され、蓋石がされていた。石器は打製石斧6、乳棒状石斧1、石匙1、石錘1、磨石1、小型棒状石1、凹石1、はちのす石1、石皿1、横刃製石器4、石錐1の計19点で、各種石器が出土している。土器は後葉III期土器が主体的であり、特に指頭なぞりによって沈線を表現する加曽利E式系土器の個体が多い。埋甕は渦巻文（唐草文）が沈線でやや時期が古いと思われるが、総じて住居址の時期は中期後葉III期に属する。

⑰ 的場第18号住居址（第24・84図、PL12・48）

本址は東側を第17号住居址に切られている。プランは六角形と思われ、南北方向では5.3mを測る。掘り込みは25～30cmで、周溝は現存する部分では認められない。炉は失われているが、17住埋甕の西に若干焼土粒が混じる箇所があり、この近辺に炉があったと思われる。主柱穴はP_7～P_9の3本が残っていた。石器は覆土15点、床面9点の出土があった。土器は後葉III期の土器も混ざっているが、後葉II期の下伊那タイプが主体であり、住居址の時期は中期後葉II期に属する。

⑱ 的場第20号住居址（第25・85図、PL12・13・48）

第23号住居址の西、第26住居址の南、第38・39号住居址の南東に位置し、第21号住居址より古い時期に作られている。プランは変五角形を呈し、規模は6.9×6.2mを測る大型の住居址である。掘り込みも60～90cmと深い。床面は固い。周溝は東側と南西部に一部が認められるのみである。炉は中央奥寄りに位置し、掘炬燵状石囲炉であるが炉石は全て抜かれている。主柱穴はP_1～P_6の6本で、主軸はN-57°-Eである。また炉の南側床上には10～20cm程度の礫と土器片が集中している箇所があった。石器は覆土で12点、床面で12点が出土している。打製石斧24点、凹石が6点と数が多い点が特徴的である。また幅3 cmの緑色岩製の小型石棒片が床面より出土している。土器は指頭なぞりにより沈線を施した加曽利E式系の土器が多く見られる。住居址の時期は中期後葉III期に属する。

⑲ **的場第21号住居址**（第25・86図、PL12・13・48）

本址は第20号住居址の北東に重なる形で作られている。本址の炉が20住の周溝を切っていることから本址の方が新しい。東半の床面はソフトローム土そのままで周囲から炉へ向って窪んでいる。西半は明確な床面等認められなかった。プランは不明で、周溝は認められなかった。主柱穴はP_7～P_{12}の6本である。炉は方形石囲炉で、柱穴の位置から住居奥寄りにあると考えることができる。主軸はN-57°-Eである。石器は覆土で24点、床面で7点が出土している外、はちのす石が3個出土しているが配石址に伴うものであろう。土器は結節縄文を施文したものが多く、住居址の時期も中期後葉IV期に属する。

⑳ **的場第22号住居址**（第25・87図、PL12・13）

本址は炉址のみの確認でプラン等不明である。炉は方形の掘炬燵状の石囲炉で65×70cmの規模である。遺物は炉の周辺で結節縄文土器や雑な「ハ」字状の地文を施した土器があり、中期後葉IV期の住居址と思われる。

㉑ **的場第23号住居址**（第26・88図、PL14・48）

第15号住居址の北、第25号住居址の南東に位置し、東の第24号住居址によって切られている。また土壙23・99・100・104に切られている。プランは基本的に変五角形だが、南西入口部が幅2.5mにわたって0.5cm程度張り出す形状となっている。規模は4.8×4.8mを測る。掘り込みは35～40cmで、周溝は無い。炉は土壙100の掘り込みによって壊されていた。主柱穴はP_8～P_{12}の5本である。埋甕は入口右に底部を欠く状態で埋められていた。

石器は25点が出土しているが打製石斧が20点を占める。土器は中葉の新道式等混在するが後葉II期の土器が主体的である。埋甕は縄文を地文とするが、口縁部が無文で直線的に大きく開く曽利式の影響を受けた土器である。

総じて住居址の時期は中期後葉II期に属する。

㉒ **的場第24号住居址**（第26・89・90図、PL14・48・49）

第23号住居址の北東に位置し23住を切っている。プランは五角形で、規模は5.1×4.9mを測る。掘り込みは30～45cmで、周溝は東の一部で30cm途切れる外はほぼ全周する。炉は掘炬燵状石囲炉で中央やや奥寄りに位置する。炉石は北側の一部が抜かれている。主柱穴はP_1～P_6の6本で、主軸はN-69°-Eである。埋甕は入口右寄りに蓋石を乗せ、正位で埋められていた。なお埋甕の底部には穿孔が行われている。入口付近では、床面上に石器が散らばった状態で検出された。石器は覆土で45点、床面で32点と数多く出土している。打製石斧が最も多く42点である。また黒曜石製のヘラ状の掻器1点が覆土から出土している。土器は後葉II期とIII期の土器が混在しており、中葉土器片も若干混ざる。また、口縁部が丸く内湾する咲畑式の影響を受けた土器や、器台、手づくね土器も出土している。埋甕はII期に属する。総じて住居址の時期は中期後葉II～III期である。

㉓ **的場第25号住居址**（第27・91図、PL15・49）

第23号住居址の北西、第27号住居址の南東に位置し、本址南西部は第26号住居址によって切られている。また本址の東側には、一部分33cm程の掘り込みがあり、本址より古い時期の住居址の一部であろうか。

本址プランは円形に近い八角形を呈し、規模は5.1×5.3mを測る。掘り込みは40cm程度で、周溝は26住に切られている部分は不明であるが、それ以外は周溝を廻らせている。炉は中央やや奥寄りに位置しており、南東は土壙107によって切られている。形態は掘炬燵状石囲炉であるが炉石は全て抜かれている。主柱穴はP_1～P_5の5本が確認されたが元は6本で、主軸はN-13°-Eである。埋甕は入口中央に口縁部と底部を欠く状態で埋められていた。

石器の出土は全く無かった。埋甕は細条線地文の後葉II期のものであり、他の出土土器も同期であることから、住居址の時期は中期後葉II期に属する。

㉔ 的場第26号住居址（第27・92図、PL16・49）

第20号住居址の北、第30号住居址の南、第38・39号住居址の東に位置し、本址は東側で第25号住居址を切っている。また中央部は土壙484によって切られており、炉は失われている。プランは変五角形で、規模は4.2×4.6mを測る。掘り込みは30cm程度で、周溝は入口部を除いてほぼ全周する。主柱穴はP_6～P_{12}の6本である。P_{11}・P_{12}間が入口となるが、P_{13}とP_{14}とが入口支柱であり、入口施設は南西方向に斜めに作られていたと思われる。埋甕は入口左寄りに埋設されており土器には底部穿孔が行われていた。石器は覆土で12点、床面で9点が出土している。

土器は後葉III期のものが主体的であり、住居址の時期も中期後葉III期に属する。

㉕ 的場第27号住居址（第28・93図、PL16・49）

第24号住居址の北西に位置し、第28号住居址を切っている。また南西で第25住居址を切り、南側では土壙105に切られている。プランは隅丸方形で、規模は4.4×4.0mを測る。掘り込みは50cm程度で、周溝は北側の4分の1がないが、後の4分の3は廻らせている。炉は掘炬燵状石囲炉で、入口側の辺は炉石を平らに据えて、他の3方の辺は割石を立てて囲っている。炉の位置は中央やや奥寄りである。本址では柱の建て替えが行われており、P_1～P_4の4本が古く、P_4及びP_5～P_7の4本が新しい。主軸は古がN-73°-E、新がN-68°-Eである。埋甕は入口左寄りに埋設されていた。使用土器は細条線を地文とする後葉II期の土器で、口縁部と底部を欠いた状態で埋められていた。石器は35点が出土しており内訳は打製石斧19、磨製蛤刃石斧2、乳棒状石斧1、石匙3、石錘1、敲打器1、磨石2、凹石2、横刃製石器5点である。土器は梨久保B式土器と頸部無文帯のある加曽利E系土器などの後葉II期土器土器とが混在しており、住居址の時期は中期後葉I～II期に属する。

㉖ 的場第28号住居址（第28・94図、PL16）

本址は第27号住居址の北東側に位置しており、南西部を大きく27住に切られている。西側は深さ40cm程度の掘り込みが本址周溝の外側に残っており、本址よりさらに古い時期の住居址があった可能性がある。プランは不整楕円形で、東西方向では5.2mを測る。掘り込みは40cm前後で、現存する部分では周溝が全周する。炉は南東、奥寄りにあり、27住炉に切られているが地床炉である。柱穴はP_8～P_{11}の4本と思われ、主軸はN-69°-Eとなる。

出土遺物は少なく、石器は石匙1、磨石1、横刃製石器1の3点のみである。出土土器も少なく、新道式、藤内I式、後葉II期の土器片が混在している。27住との前後関係及び住居形態から中葉期の住居址であることは確実で、本址の時期は炉内出土土器から中期中葉IV期に比定することができる。

㉗ 的場第30号住居址（第29・95・96図、PL17・49・50）

第26号住居址の北西に位置し、南西側で第33号住居址を切り、北側で第62号住居址を切る。プランは五角形を呈し、規模は4.9×4.9mを測る。掘り込みは20～40cm程度で、周溝は全周する。床面は堅緻である。炉は中央やや奥寄りに位置し、掘炬燵状石囲炉で炉石は1つが炉内に落ち込んで残っている外は抜かれている。主柱穴はP_1～P_4の4本で、P_5・P_6は入口支柱である。主軸はN-16°-Eである。埋甕は入口部に、やや斜めに横並びで2個埋設されていた。埋甕1は入口中央に、口縁部把手をローム土でくるむような形で埋められていた。使用土器は唐草文系の樽形土器で、口縁部に四角い把手が付き、地文は重弧状の沈線文となる後葉III期の下伊那タイプのものである。埋甕2は入口の左でP_6に接するように、底部を欠く状態で埋められており胴上半は大きく壊されていた。使用土器は腕骨文が付き、地文は綾杉文となる後葉II期末からIII期初位の時期の土器である。また伏甕が炉の南西、70cm離れた所に、口縁部と底部を欠いた状態で埋められていた。使用土器は細条線を地文とする小型のII期後半の土器である。石器は小型棒状石1点が出土したのみである。土器は後葉III期のものが多く、II期の土器も混在す

る。

炉内出土の土器は埋甕1と同型式でIII期のものである。総じて住居址の時期は中期後葉II期後半～III期に属する。

(28) 的場第31号住居址（第30図）

第28・29号住居址の北西、第62号住居址の東に位置する。本址は床面の一部を確認したのみで、プラン・時期等一切不明である。

(29) 的場第32号住居址（第31・97・98図、PL17・50・51）

第33号住居址の北、第40号住居址の東に位置し、第62号住居址と第63号住居址に貼床して作られている。

プランや掘り込み等は不明で、床面は南側の一部に残っている。炉は円形石組炉で、炉上に土器が集中して検出された。主柱穴は近辺にピットが多く判然としないがP_1～P_6の6本が想定でき、主軸はN-6°-Wとなる。石器は覆土から11点、床面で31点が出土している。ことに定角石斧は1つは緑色岩製だが、もう1つは赤色チャート製であり珍らしい例である。土器は炉上の土器集中部分はじめ井戸尻III式土器がほとんどで、異系統である北屋敷式の古い段階の土器もみられる。住居址の時期は中期中葉VI期末に属する。

(30) 的場第33号住居址（第34・99～101図、PL18）

本址は第40号住居址の南に位置し、第30号住居址に切られ、第36号、第37号、第38号住居址を切っている。

また土壙455、456に切られている。プランは隅丸方形で、規模は4.5×4.6mを測る。掘り込みは20～25cmで、周溝は全周し、床面は固い。炉は掘炬燵状石囲炉で中央やや奥寄りに位置し、炉石は北側と東側が抜かれている。

主柱穴はP_1～P_4の4本で、P_5は支柱穴であろうか、深さ10cmと浅いピットである。主軸はN-77°-Eである。

また本址の覆土の状況は特異なパターンであった。床面上からの覆土下層は黒茶褐色土でローム粒、炭粒を含み、3～5cmの厚さで堆積している。覆土中層はロームブロックを多く含む黒茶褐色土で、住居の北・西・南側から住居中央部へ向って斜めに入っており、住居中央部では床面まで達している。また住居南半ではこの層に多数の石が含まれていた。これらの状況からこの層位は人偽的に埋められた土層である可能性が高いと思われる。覆土上層はロームを含まない黒茶褐色土で炭粒をわずかに含む。この層は中層の埋土が無い北側から埋められているものと思われる。各層に包含される土器は、下層が後葉III期土器、中層が新道式土器、土層が井戸尻III～梨久保B式土器となっている。またP_3の北西の土器は覆土土層中からほぼ完形に近い状態で出土している。床面からは2cm程浮き、やや東へ傾いており、時期は後葉III期に属する。石器は16点が出土している。住居址の時期は床上出土の土器から判断して中期後葉III期に属する。

(31) 的場第35号住居址（第33・102・103図、PL16・51）

第36号住居址の北に位置し、床面は第40号住居址と同じレベルで40住に切られている。また本址炉から80cm離れた所には第58号住居址の炉址がある。壁は後世の削平によって失われており、炉と床面の確認のみでプラン等不明である。炉は石組炉で炉石は3個残すのみである。炉の南東部では角張った礫と土器片が集中して検出された。

石器は第58号住居址と一括して取り上げており10点が出土している。土器は新道式～井戸尻I式及び平出III A土器まで混在して出土している。住居址の時期は炉南東の土器から中期中葉IV期と思われる。

(32) 的場第36号住居址（第32・104図、PL19・51）

第40号住居址の南に位置し、第35号住居址を切り、第33・37号住居址に切られている。また土壙461、462、463によって切られており、大型の土壙463の掘り込みによって本址炉は失われていた。プランは円形に近い五角形で、

規模は南北方向で5 mを測る。掘り込みは20cm弱で床面は固い。周溝は現存する部分では北半に廻らせている。

本址では建て替えがあったと思われ、P_1～P_4の4本とP_5～P_8が想定でき、いずれも元は5本であったと思われる。また本址には埋甕3個、伏甕2個が埋設されており、全て縄文を地文とする長胴の加曽利E式系土器を使用しており時期は後葉II期のものである。埋甕1は胴下半部を欠いた状態で、埋甕2・3は縦半分が失われた状態で、伏甕1・2は口縁部・底部を欠く状態（底部は両方ともつぶれていた）で埋められていた。

新住居址には柱穴P_1～P_4、埋甕1（入口P_1・P_2間の中央）、伏甕1（炉位置の南）が伴い、古住居址には柱穴P_5～P_8、埋甕2・3（入口P_5・P_6間の右寄り）、伏甕2が伴うが、ほとんど時期差は無い。

石器は打製石斧4点、磨製蛤刃石斧1点が出土したのみである。土器は中葉期、後葉期の土器も混ざるが主体は後葉II期であり、住居址の時期は中期後葉II期に属する。

(33) 的場第37号住居址（第34・105図、PL18）

第26号住居址の西に位置し、第33号住居址に北側から大きく切られる。また第38号住居址には南側から切られるが、本址東側の周溝付近は貼床されている。プランは大きく他住居に切られているため不明であるが、五角形か六角形になると思われる。規模は東西方向に6.2mを測る。掘り込みは15～20cm程度で、周溝は現存する部分では廻っている。柱穴はP_6～P_8の3本と思われるが定かではない。炉は失われている。石器は4点が出土しており、内1点は黒曜石をナイフ形に加工したものである。出土土器は概ね後葉III期で、住居址の時期も中期後葉III期に属すると思われる。

(34) 的場第38号住居址（第35・106図、PL20）

第20号住居址の北西に位置し、第33号住居址に切られ、第37号住居址を切っている。また第39号住居址に貼床される。プランは北側が失われているが五角形になると思われる。掘り込みは上部が削られていると思われるが現存で15cmである。周溝は北側が不明確だが全周すると思われる。炉址は円形の石組炉で中央奥寄りに位置する。また本址炉と同位置で上に重なる形で39住の炉が作られている。柱穴はP_4及びP_5～P_7の4本で、主軸はN-43°-Eである。石器は38住と39住一括で取り上げているが本址床面では5点が出土している。土器も39住のものと混ざっており、明確でないが後葉III期土器が本址に伴う土器と判断した。住居址の時期は他の住居址との前後関係も考慮すると中期後葉III期に属すると思われる。

(35) 的場第39号住居址（第35・107図、PL20）

本址は第38号住居址の上部に位置し、炉と柱穴の位置が38住とほとんど同じ位置であることから、意図して38住に重ねるよう住居が作られたものと思われる。また平安時代の第34住に貼床（第35図の断面図中点線部分）されている。プラン等は不明である。床面も明確な面が認められなかった。炉は38住の上に重ねて作られており、炉石は一部しか残っていないが石組炉である。柱穴はP_1～P_4の4本で、主軸はN-45°-Eである。石器は38住と39住一括で取り上げたが、その覆土分では16点が出土している。土器も38住との分別が困難であるが、出土した土器の中では結節縄文を施文した後葉IV期のものが大半を占めている。炉内出土土器も結節＋縄文を施文したものであることから本址の所属時期は中期後葉IV期であると思われる。

(36) 的場第40号住居址（第33・108図、PL20）

第32号住居址の西、第36号住居址の北に位置し、第35号住居址と第58号住居址の炉址の北東に位置して同レベルで両住居址を切っている。プランは後世の削平によって壁が失われており不明である。規模は北東—南西方向で4.7mを測る。周溝は南東側の一部でみられるのみで、床面は固い。炉は変四角形の石組炉である。主柱穴はP_1

～P_5の５本であろう。主軸はN-7°-Wである。石器は７点の出土があり、土器は藤内II式～井戸尻Ⅰ式の土器が出土しており、住居址は中期中葉IV～Ⅴ期に属する。

(37) 的場第41号住居址（第36図）

第35・40・58号住居址の西に位置している。土層確認のためのトレンチを掘ったところ本址の一部が現われた。

炉は南北で1.2mを測る大型の石組炉である。本址は存在のみを確認し、炉内その他未調査であり、その後砂を入れて埋戻しを行った。

(38) 的場第42号住居址（第36・109図）

第41号住居址の北西に位置し、第43号住居址に切られている。調査対象区外に排土用のトレンチを掘った折、本址と43住を発見したものである。なので住居位置と時期のみ確認することとした。地場層直下で住居輪郭が現われ上部は削られていると思われるが、西側の掘り込みは現存で15cm程度あった。土器は狢沢式、藤内II式、井戸尻Ⅰ式の土器片が混在し、中期中葉期の住居址であることは確かだが時期は不明である。

(39) 的場第43号住居址（第36・109図）

第41号住居址の北西に位置し、第42号住居址を切っている。発見の経過は42住と同様である。西側の掘り込みは現存で12cm程度であった。時期は中期中葉期の住居址であるが型式は不明である。

(40) 的場第51号住居址（第37・110図、PL21）

第Ⅰ調査区にあるが、周囲に住居址は確認されていない。北東側が後世の削平によって失われているが、プランは楕円形と思われる。規模は5.3×5.1mを測る。掘り込みは、水田地場層直下で本址プランが現われたため上部を削られている可能性があるが、10～20cm程度であった。周溝は無いと思われる。炉は中央から北西にやや偏した位置にある。炉形態は石組炉で、南の入口側が２重もしくは３重の石の配列となっているが、西側の３分の１が後世撹乱によって破壊されており形状は不明である。主柱穴はP_1～P_6の６本で、主軸はN-15°-Eとなる。石器は打製石斧６、磨製蛤刃石斧１、磨石１、横刃製石器２の10点の出土があった。土器は藤内II式期のものも若干混じるが井戸尻Ⅰ式期土器が多く、住居址の時期は中期中葉Ⅴ期に属する。

(41) 的場第53号住居址（第38・111図、PL21）

第Ⅰ調査区の北西にあり、周囲に住居址は確認されていない。本址は南側が調査対象区外で、北側が後世の段切りのため失われており、東側の壁の一部のみが残っていたためプラン、炉址等不明である。掘り込みは東側で15cm程度で、周溝は認められない。柱穴はP_1～P_3であろうか。石器は小型棒状石が１点出土したのみである。土器は中葉期のものが出土しており、住居址の時期は中期中葉Ⅴ期に属する。

(42) 的場第54号住居址（第15・112図、PL22・51）

第１号住居址の北東に位置し、本址南東側は第２・56号住居址に貼床して作られている。また本址北側は土壙363～368、358によって掘り込まれて破壊されている。プランは変五角形で、規模は3.7×4.2mを測る。掘り込みは５cmと浅く、周溝は全周する。床面は固く、東側では第２号住居址との床面差は無い。炉は西に偏した位置にあり、掘炬燵状石囲炉である。炉石は１つを炉内に残して抜かれている。柱穴はP_{13}～P_{16}の４本が残っているが元は６本であったと思われ、入口は南東側となる。埋甕は入口部に口縁部を欠き、底部に穿孔した状態で埋められており、上には蓋石が乗せられていた。使用土器は後葉III期の典型的唐草文樽形深鉢である。石器の出土は無く剝

片5点が出土したものであった。土器は炉覆土上面に集中して検出されている。後葉V期の土器が若干見られるものの、その他は後葉III期の上伊那タイプの土器が占めている。住居址の時期は中期後葉III期に属する。(北　澤)

(43)　的場第55号住居址（第15・113図、PL22）

第4号住居址の北東に位置し、本址西側は第2・56号住居址によって切られている。プランは六角形で規模は北東一南西方向で5.3mを測る。掘り込みは5～10cmと浅く、周溝は無いと思われる。第2号住居址との床面差は25cm位である。炉は中央よりやや北東に偏した位置に地床炉と思われる焼土痕跡が認められた。主柱穴はP_1～P_5の5本で、主軸はN-59°-Wである。石器は4点の出土がある。土器は前期末の篦畑式併行の土器から、藤内II式、後葉II、III、IV期までの土器が混在している。住居址の時期は中期後葉II期より古いことは確実だが所属時期は不明である。　(林)

(44)　的場第56号住居址（第15・114図、PL 6）

本址は第2号住居址より古い時期に一回り小さく作られており、2号住に貼床された住居址である。北側は第54号住居址に貼床され、東側で第55号住居址を切ることは第2号住居址と同様である。プランは楕円形と思われ、規模は4.0×5.6mを測る。周溝は北半で第2号住居址のものと区別され一回り内側を廻っている。炉址は2号住と同位置にあったと思われる。柱穴で現存するものはP_9～P_{12}でP_9は2号住と共有する。主軸はN-50°-Wである。埋甕は入口やや右寄りに口縁部と底部を欠く状態で埋められ、上は2号住によって貼床されていた。使用土器は縄文地文に3本の沈線が垂下する胴部文様をもつ後葉II期の深鉢である。遺物は埋甕の他は2号住と分別できるものは出土していない。以上の状況から本址と第2号住居址とではほとんど時期差は無く、建替によるものであると思われる。住居址の時期は中期後葉II期に属する。

(45)　的場第57号住居址（第11図、PL 3）

II b調査区の南西隅にあり、第4号住居址から南へ12m離れた場所に位置する。本址は炉址のみが確認された。

絡条体圧痕文土器等が出土した土壙270を切る形で本址炉は作られている。形態は掘炬燵状石囲炉で、炉石は1つを残して抜かれている。炉形態は中期後葉期に多く見られるものであるが、炉内出土土器は中葉期のものであり時期は不明である。

(46)　的場第58号住居址（第33図、PL16）

第36号住居址の北西に位置し、第40号住居址に切られている。第35号住居址の炉址から80cm北西に離れた位置に本址炉がある。この付近は後世の削平によって縄文時代住居址の壁が失われている地域で、本址もプラン等不明である。炉はわずかに窪む程度で炉石は無い状態で、地床炉から石組炉であったと思われる。近接する第35号住居址炉には炉石が床面より上へ出て残っており、両住居址の床面レベルは同じであるので本址の方が第35号住居址より古いと言える。しかし出土遺物は中葉期の土器が混在する状況で、時期については特定できず不明である。

(47)　的場第59号住居址（第39・115図、PL23）

第17号住居址の東、第3号竪穴址の北、第60・61号住居址の南東に位置する。プランは不整形で五角形である。

規模は3.6×3.3mを測る。掘り込みは25cm程で、周溝は無い。炉は埋甕炉であり口縁部と胴下部を欠く状態で埋められていた。使用土器は井戸尻III式に併行する時期のものと思われる土器で、胴土には金雲母が多く含まれ、器厚は5～6 mmである。胴部の沈線による枝が横に伸びるようなモチーフは、井戸尻III式土器の胴部模様では隆帯表現でみられるものである。柱穴はP_1～P_4の4本で、主軸はN-7°-Eになると思われる。石器は打製石斧1

点、横刃製石器２点が出土している。土器は井戸尻III式の破片の外、古段階の北屋敷式土器、埋甕炉と同型式で口径37cmの大型深鉢等も見られる。住居址の時期は中期中葉VI期に属する。

(48) 的場第60号住居址（第41・116図、PL23）

第59号住居址の北西、第７号住居址の南西、第17号住居址の北東に位置する。当初本址と第61号住居址とは一体となる特殊な遺構であるととらえていたが、その後の検討により床面の違い、柱穴の様相から２住居址分として分けることとした。第61号住居址は本址の北西に連なるような形で存在している。プランは不整の長楕円形で南東部に張り出しがあり入口であろうか。規模は幅が2.4m、長さは第61号住との境のくびれる部分までが3.5mと小型である。掘り込みは北西側が25cm、南東側が８cmと、北西から南東へ浅くなって行く。床面はソフトローム土で軟らかい。また周溝は無い。主柱穴は炉の回りに現存でP_1～P_4の４本があるが、本址を切る土壙98の位置にもう一本あり５本であったと思われる。炉は北西寄りに位置している。円形石組炉で炉内のやや南東側に口縁部と胴下半部を欠く状態の土器が上下逆に埋設されていた。使用土器は無文の口縁が直線的に開き、胴部には縄文を施す井戸尻III式末もしくは後葉Ｉ期位の時期の土器である。石器は打製石斧２点、敲打器１点が出土している。土器は井戸尻III式末の様相を示すものが多く、住居址の時期は中期中葉VI期に属する。

なお本址南端より60cm南の位置にある小ピットからは中葉期の大型土偶下半部が出土している。

(49) 的場第61号住居址（第41・117図、PL23）

第７号住居址の西に位置し、第60号住居址に連なるような形で存在している。プランは長い辺の中央で両側がくびれ、北西に入口と思われる張り出しの付く不整長楕円形となっている。規模は幅が3.6m、長さが張り出し部から第60号住居址との境のくびれる部分までが5.2mである。掘り込みは10cm前後と浅く、周溝は無い。床面は固く、PL23のように凹凸が激しい。炉は住居中央付近の床面が焼けており地床炉である。広い範囲で焼けており掘り窪めた部分も無いので位置の特定はできない。主柱穴はP_5～P_8の４本であろう。P_9の周縁には片麻岩の石組が南側に残っており、北側では長さ40cm幅15cmの花崗岩立石が壁に寄りかかるように斜めに立った状態で検出され、屋内祭祀に関係した石組遺構である可能性が高い。またP_{10}の底部では長さ30cm幅10cmの硬砂岩が検出された。石器は横刃製石器１点の出土があった。土器は井戸尻III式のものが出土しており、住居址の時期は第60住居址と同じく中期中葉VI期に属する。

(50) 的場第62号住居址（第29・118図、PL24）

第31号住居址の西、第63号住居址の南に位置し、南側を第30号住居址に切られ、北東の一部を第32号住居址に貼床される。プランは円形で、規模は東西方向で4.2mを測る。掘り込みは東側で30cm、西側で10cmで、周溝は無い。また本址には炉址が見あたらず、第30号住に切られた部分にあるとも考えられるが、本址を住居址とするには問題が残る。柱穴はP_7～P_{11}の５本が現存するが元は６本であったと思われる。石器は覆土から12点、床面で横刃製石器１点が出土している。土器は平出III A系土器片が多い。第59号住居址埋甕炉と同型式の土器片１点も出土しており、平出III A系の土器とは別系統である可能性がある。住居址の時期は中期中葉VI期に属する。

(51) 的場第63号住居址（第41・119図、PL24）

第62号住居址の北に位置し、北半は後世の溝などにより破壊されていた。本址南西側は第32号住居址に貼床される（第31図参照）。プランは不明で、規模は東西方向で4.2mを測る。掘り込みは５cm程度だが上部は削られているものと思われる。周溝は無いと思われる。炉は現存する部分では認められなかった。柱穴はピットが多く判然としないがP_1～P_3が想定できる。石器は小型棒状石が１点出土している外、長さ32.5cm幅５cmで刀のようにや

や反った形状の石英製石器１点が出土している。土器は破片が11点と少ないが、藤内Ⅰ式の土器が床面から出土している。住居址の時期は中期中葉Ⅲ期に属する。

⑸2 門前第１号住居址（第42・120図、PL25・52～54）

門前第２号住居址の南に位置し、第16号住居址の上に作られている。第16号住居址の方が時期が古いので、その覆土上面に本址の床があったはずであるが明確な床面は認められなかった。本址西側は調査対象地区外のため未調査である。そのためプランは不明であるが、調査した部分からすると楕円形になるように思われる。規模は南北方向で4.6mを測る。掘り込みは１～10cmで、周溝は調査した部分では全周する。炉は南東に寄った位置にあり、円形石組炉である。柱穴はP_1・P_2以外は不明である。入口は炉の位置からすると北西方向である可能性が高い。

石器は25点が出土している。土器は多数の梨久保Ｂ式土器個体がつぶれた状態で、床面上で集中して検出された。梨久保Ｂ式期の住居址では、このような状況での出土例が多く、この時期の特色であろうか。復元できたものは13個であった。住居址は中期後葉Ⅰ期に属する。

⑸3 門前第２号住居址（第43・123図、PL25・54）

門前第１・16号住居址の北・第３号住居址の東に位置し、西側は第７号住居址に切られている。また門前土壙１、10、11が本址を切っている。また早期押型文期のものとみられる集石１と集石４も本址と同じ場所にあった。

プランは東側に壁の一部が残っている外は不明で、３cmの段差が残っていた。周溝は無いと思われる。主柱穴はP_1～P_6の６本で、主軸はN-44°-Wになると思われる。柱穴の位置からすると炉の位置は中央やや奥寄りとなる。炉の形態は円形石組炉で、炉の上では土器が集中して検出された。石器は片麻岩製台石１点を含む54点が、剝片も硬砂岩28・黒曜石97・緑色岩８点と数多く出土している。土器は第１号住居址からの流入と思われる梨久保Ｂ式が混じるが、炉上土器はじめ井戸尻Ⅰ式が主体となる。復元できたものに口径34cm、器高60cmの大型深鉢がある。頸部が強くくびれて、口縁は１山１対・２山１対を対角に配する波状口縁となる。胎土は暗黒褐色の色調である。住居址の時期は中期中葉Ⅴ期に属する。

⑸4 門前第３号住居址（第44・124・125図、PL26・54～57）

第２号住居址の東に位置し、北東部は中葉期の第４号住居址の上に貼床して作られている。プランは西辺が丸くなるが基本的に隅丸方形である。規模は4.9×4.7mを測る。掘り込みは５～20cmで、床面は固い。周溝は東辺と南辺で検出された。主柱穴はP_1～P_4の４本でP_5・P_6は入口支柱である。炉は中央やや奥寄りにあり、掘炬燵状石囲炉で炉石は全て抜かれている。主軸はS-76°-Eである。本址では埋甕３個、伏甕１個が埋設されていた。埋甕１と２とは入口右寄りに縦並びに埋められていた。埋甕１は底を欠き、また底部はつぶれた状態で、内部から第162図２の小型土偶頭部が出土している。埋甕２は口縁部と胴下半を欠く状態で出土した。使用土器は細条線を地文とする後葉Ⅱ期の土器を両者共使っている。埋甕３は入口左寄りに口縁部と底部を欠いた状態で埋められており、使用土器は隆帯腕骨文が付き、地文は綾形文でやはり後葉Ⅱ期に属する土器である。伏甕は炉の右側すなわち南西側に底部を欠く状態で埋められており、使用土器は細条線地文に入組文を配する小型の後葉Ⅱ期の土器である。遺物は大小の石とともに、住居中央付近の覆土中に集中し多量に出土しているので、住居廃絶後に廃棄が行われたものとみられる。土器は藤内式、梨久保Ｂ式土器が混ざり、後葉Ⅱ期とⅢ期の土器が混在していた。住居址の時期は、埋甕の時期から中期後葉Ⅱ期に建てられ、覆土中の土器に後葉Ⅲ期のものがあることから中期後葉Ⅲ期まで存続したものと思われる。

(55) 門前第4号住居址（第44・126図、PL27・57・58）

第5号住居址の北東・第7・8・9号住居址の東に位置し、本址南西側は第3住居址に貼床される。プランは円形を呈し、規模は4.5×4.5mを測る。掘り込みは20cm前後で、周溝は無い。炉はほぼ中央部に位置し、長方形の石囲炉である。柱穴は柱の建て替えがあったとみえ、古い柱穴がP_7～P_{10}の4本で主軸はN-23°-W、新しい柱穴はP_{11}～P_{15}の5本で主軸はN-24°-Wである。石器は床面で硬砂岩製台石1点を含む6点が出土している。覆土では35点が出土しているが第3号住居址のものも混入していると思われる。土器は藤内II式～井戸尻I式期のものが出土しており、住居址の時期も中期中葉IV～V期に属するであろう。

(56) 門前第5号住居址（第45・127図、PL27・58）

第4号住居址の南西に位置している。東側は水田土手の造作によって破壊されているため、プラン等不明であるが、残存部からすると楕円形か円形プランであったと推察できる。掘り込みは5～10cmと浅く、周溝は認められない。柱穴はP_1が主柱穴の1本と思われるが、それ以外は不明である。石器は6点が出土し、土器は梨久保B式も混入するが藤内I式の方が多い。住居址の時期は中期中葉III期に属する。

(57) 門前第6号住居址（第46・128・129図、PL28・58）

第4号住居址の北、第10号住居址の南に位置する。本址は北側のロームマウンド及び土壙2に切られており、また集石2の上に貼床して作られている。プランは六角形だが、入口部となる南西辺が若干張り出し気味の形となっている。掘り込みは10cm以下と浅く、周溝は入口部の両側の辺となる北西と南東辺に見られた。炉は中央よりやや北に偏した位置にある。炉の形態は五角形石組炉で、入口側の南西部の炉石が2重の石組となっている。主柱穴はP_1～P_6の6本で、主軸はN-38°-Eである。石器は打製石斧9、敲打器3、磨石4、凹石1、横刃製石器4点の出土があった。土器は梨久保B式期の土器がつぶれた状態で検出された。北屋敷式系の土器1点も見られるが、この時期では梨久保B式の一器種のように一諸に出土する例が多い。住居址の時期は中期後葉I期に属する。

(58) 門前第7号住居址（第47・130図、PL29・59）

第2号住居址の北、第4号住居址の北西に位置する。覆土上面には第14号住居が作られていた。第8号住居址、第9号住居址との前後関係は遺構が輻輳しているため分別が明らかではないが、状況から判断すると、明確な床面は確認されなかったものの第8、第9号住居址より新しく作られているものと思われる。また第2号住居址、土壙9と土壙11とを切り、土壙5・6には切られている。プラン（a）は一部不明であるが隅丸方形に近い形であろう。規模は（5.6）×5.6m程度と思われる。掘り込みは東から南にかけて25cm位ある。周溝は入口に当たる南東に認められる。炉はくずれているが円形石組炉と思われ、西に偏した位置にある（f3）。柱穴はP_1～P_3が主柱穴と思われるが、それ以外は不明である。主軸はN-60°-Wである。埋甕は入口中央よりやや右に完形の状態で埋設され、上には蓋石が乗せられていた。使用土器は細条線を地文とする後葉II期の土器である。遺物は第7号、第8号住居址と分別し得ず、一括して取り上げている。石器は床面で22点、覆土で60点が出土した。土器は藤内I式期、井戸尻III式期～後葉I期、後葉II期のものが混在する。本址には埋甕の時期と一致する後葉II期の土器が伴うと推察される。総じて住居址の時期は中期後葉II期に属する。

(59) 門前第8号住居址（第47・131図、PL29）

本址は東側の大部分を第7号、第8号住居址に切られている。プラン（b）は西側が不明であるが長楕円形になると思われる。規模は南北方向で4.7mを測る。掘り込みは南側で20cmある。周溝は北側と南側の一部に認められる。床面レベルは第7号住居址とほぼ同一レベルである。柱穴はP_4～P_8と思われるが判然としない。P_4の上に

は貼床があり、焼土が散っており第9号住居址の炉f1の痕跡である。本址入口は北西にあったと推定できるが、炉は南東奥寄りに位置している（f2)。炉形態は不明であるが、自然石炉石が炉内に残存していることから石組炉であろう。出土遺物は第7号住居址で述べたとおりだが、住居の前後関係から本址には藤内Ⅰ式土器が伴うものとみなされ、住居址の時期も中期中葉Ⅲ期に属するものと推察できる。

(60) 門前第9号住居址（第47・132図、PL29・59）

第8号住居址の内側に本址周溝の一部（c）が認められるが、本址壁は第7号住居址に削られプラン等は不明である。炉（f_1）は第8号住居址の柱穴P_4貼床上に焼土が薄く散っている状態で検出され地床炉であろうか。出土遺物は前述の一括取り上げ中に含まれ、後葉Ⅰ期の土器が本址に伴うものとみなされる。したがって埋甕1・2は本址に伴うものと推定できる。埋甕はf_1炉の南西にあり、南北方向に2個並べて埋められていた。使用土器は両者とも口縁と底部を欠く状態で埋められており地文は縄文である。埋甕1には的場第18号住居址埋甕炉土器に見られる、技状に曲折する沈線文が施されている。住居址の時期は後葉Ⅰ期に属する。

(61) 門前第10号住居址（第48・133図、PL28）

第6号住居址・ロームマウンドの北、第15号住居址の南に位置する。本址は南側に25cm掘り込まれた壁の一部を残すのみで、東側の大半は水田土手に破壊されているためにプラン等一切不明である。出土遺物も石器は3点、土器は中葉から後葉の土器片が混在する状況で、住居址の時期も不明である。

(62) 門前第11号住居址（第49・134図、PL30・60）

第6号住居址・ロームマウンドの北西、第10号住居址の西に位置し、西側は第12号住居址に切られている。プランは隅丸方形を呈し、規模は推定で4.3×（4.7）mである。掘り込みは10～20cm程度で、周溝は全周するものと思われる。柱穴は建て替えがあり、現存P_1・P_2・P_3・P_5・P_7・P_8と現存P_1・P_2・P_4・P_6とに分けることができ、元はそれぞれ6本と5本であったと思われる。炉は掘炬燵状石囲炉で中央やや奥寄りに位置する。炉石は全て抜かれていた。主軸はN-63°-Eである。伏甕は炉の左（北）に底部を欠く状態で埋められていた。使用土器は縄文地文に入組文を施す小型の土器である。石器は覆土で9点、床面で18点が出土し、土器は炉内出土のものも含め、かなり中葉土器片が混じり、埋甕と同時期の土器は少な目である。住居址の時期は中期後葉Ⅱ期に属する。

(63) 門前第12号住居址（第49・135図、PL10・60）

第13号住居址の東、第15号住居址の西に位置し、南東側で第11号住居址を切り、北側は後世の造作によって破壊されている。プランは北半が無いため不明ではあるが、変五角形か六角形になると思われる。規模は東西方向で5.4mを測る。掘り込みは5～35cm程で、周溝は一部で途切れる外は全周していたと思われる。柱穴は現存でP_9～P_{12}の4本であるが、元は6本もしくは5本であったと思われる。炉は中央やや奥寄りに位置し、掘炬燵状石囲炉で炉石は全て抜かれている。主軸はN-63°-Eとなる。埋甕は入口中央に底部を欠いた状態で埋設されていた。北側の平らな石は蓋石であろう。使用土器は樽形状の下伊那タイプの唐草文系深鉢である。石器は石鏃1点が出土したのみである。土器も少なく後葉Ⅲ期土器に中葉期の土器片が混ざっている。住居址の時期は中期後葉Ⅲ期に属する。

(64) 門前第13号住居址（第50・136図、PL30・60）

第12号住居址の西に位置する。本址は当初、西半が調査対象地区外となるため東半のみ調査を行ったが、その後調査の切土が1m西まで及ぶことがわかり、入口付近のみ別時期に調査した。プランは不明である。規模は南北

方向で5.4mを測る。掘り込みは15～20cm程で、調査した部分では周溝は全周する。主柱穴はP_1～P_5の5本が現存していたが元は6本であったと思われる。炉は中央奥寄りに位置している。炉形態は掘炬燵状石囲炉で、炉石は1つを炉内に残す外は抜かれている。入口は埋甕が検出された西側であろう。埋甕の位置は入口中央もしくは中央よりやや右に埋設されていたと推定される。埋甕は口縁部を欠く状態で、上伊那タイプの唐草文系深鉢が使用されている。石器は覆土で9点、床面で18点が出土した。土器は後葉III期に属するものが主体となるが、覆土中には結節縄文土器や、口縁部に勾玉形の文様を付けた後葉IV期の土器も見られたが、本址に伴うものではないだろう。

住居址の時期は中期後葉III期に属する。なおP_3の近くで花崗岩製立石が出土しているが、本址に伴うものではなく配石帯に関連したものとみられる。

(65) 門前第14号住居址（第47・138図、PL29・31）

第7号住居址の北側上層で本址炉が検出された。炉は楕円形石組炉で、本址の推定床面と下の第7号住居址床面との差は30cm近くある。また炉の南東の位置にある土器は逆位で口縁と底部を欠いた状態で出土しており、時期は後葉III期に属する土器である。下面は第7号住の床面と同レベルだが、第7号住は後葉II期に属する住居址であり、この土器は本址に伴う伏甕である可能性が高い。炉以外では本址プラン等の遺構は不明である。石器は横刃製石器3点が炉付近で出土している。土器は他に中葉期の小片が出土したのみで不詳であるが、一応本址の所属時期は後葉III期とする。

(66) 門前第15号住居址（第48・139図、PL31）

第10号住居址の北に位置する。南側と西側に周溝及び壁をとどめるのみで、北側は削られて失われ、東側は水田土手のため破壊されているためプラン等は一切不明である。残存する部分の掘り込みは25cm程度である。石器は打製石斧1点、横刃製石器2点が出土している。土器は中葉期の小片が混ざっているが、床面で後葉I期の大きな破片が出土しており、住居址の時期も中期後葉I期に属すると思われる。

(67) 門前第17号住居址（第51・142図、PL32・62）

本址は第IV調査区の門前第20号住居址の南、第22号住居址の北東に位置する。西半をトレンチ3調査時に、東半を市道舗装下調査時に調査している。図示していないが市道と水田の境界にコンクリート壁が入っており、その部分は破壊されていた。プランは隅丸方形で、規模は6.2×6.3mを測る大型の住居址である。掘り込みは25～45cm程度で、周溝はほぼ全周する。主柱穴はP_1～P_4の4本で、P_2・P_3よりP_1・P_4の柱穴の方が大きい。P_5とP_6とは入口部支柱である。炉は中央やや奥寄りに位置し、掘炬燵状石囲炉である。主軸はS-68°-Eとなる。石器は7点の出土があった。土器は唐草文系深鉢など上伊那タイプが全般に多い。住居址の時期は中期後葉III期に属する。

(68) 門前第18号住居址（第52・143図、PL33・62）

第IV調査区のトレンチ3内にあり、第19号・第21号住居址の北に位置する。北西側の半分は調査対象地区外のため未調査である。全体を確認できていないが調査部分からすると、プランは円形になると思われる。規模は北東—南西方向で5.8mを測る。掘り込みは20～25cm程度で、調査部分では周溝は全周する。柱穴は現存でP_1～P_3の3本とP_1～P_3それぞれの柱穴の内側にもう3本あり、建て替えがあったとみられる。炉址は調査部分では見られないので未調査部分にあると思われる。石器は4点の出土があった。土器は後葉II期のものも混ざるが主体は中葉藤内I式土器である。住居址の時期は中期中葉III期に属する。

(69) **門前第19号住居址**（第53・144図、PL33）

第IV区トレンチ3調査時に検出され、第18号住居址の南に位置する。第20号住居址には貼床される。第21号住居址にも切られているとみられるが、床面レベルは同一であり、また本址東側は市道脇のコンクリート製側溝で破壊されているため切り合い関係は不明である。プラン、規模等も不明である。掘り込みは北側の壁のわかる部分では10cm程度ある。P_1とP_2が柱穴と思われるがそれ以外は不明となっている。炉は円形石組炉で、炉石は二重の石組となっている。炉の南にはローム土があったが、第20号住居址を作った際に入ったものであろう。石器は覆土で3点、床面で4点の出土があった。土器は多段横帯楕円区画文土器など藤内II式土器が主体的である。住居址の時期は中期中葉IV期に属する。

(70) **門前第20号住居址**（第53・145図、PL33）

第17号住居址の北東に位置し、第19号住居址に貼床する。本址は第IV区トレンチ3調査時に貼床の一部を確認し市道舗装下調査時にプランの一部を調査した。北東側は土壙群に掘り込まれ、中央部は道路側溝工事で破壊されているためプラン等不明である。掘り込みは南東部で4 cm程度認められた。柱穴はP_3以外は不明である。石器は出土していない。土器は中葉期や後葉III期などのものも混在するが後葉IV期土器が主体となる。住居址の時期は中期後葉IV期に属する。

(71) **門前第21号住居址**（第53・146・147図、PL33）

第18号住居址の南東に位置する。第23住居址を切り、第19号住居址も恐らく切っているとみられる。住居内部は道路側溝によって一部壊されていた。プランは東側が不明確だが円形に近い隅丸方形になると思われる。規模は北西一南東方向で5.5mを測る。掘り込みは20～35cm程度で、周溝は無い。柱穴はP_4～P_6の3本が現存するが元は4本であったと思われる。入口は北西側と思われ、炉は中央やや奥寄りに位置する。炉形態は石組炉と思われるが炉石は全て抜かれていた。住居の南と北との床面にある石が炉石であろう。石器は覆土で10点、床面で2点が出土した。土器は結節縄文土器や、深鉢に付く釣手及びU字区画の磨消縄文土器、雨垂れ状の沈線文を地文とする土器が主体である。住居址の時期は中期後葉IV期に属する。なお本址のP_5の西の覆土中から小型のハート尻土偶の腹部が出土しているが、流れ込みによるもので本址に伴うものではない。

(72) **門前第22号住居址**（第54・148図、PL33）

第IV区トレンチ4調査時に本址炉の一部が発見された。第17号住居址の南東に本址は位置する。水田地場直下で検出され、壁は削られておりプラン等不明である。また炉より西側は調査対象地区外のため未調査である。炉は掘炬燵状石囲炉であるが、北側は土壙の掘り込みによって壊されている。柱穴はP_1～P_3の3本が想定できるが、それ以外は不明である。石器は打製石斧1点、土器は後葉期の土器片が炉の付近にみられたが本址に伴うものかどうか不明で、住居址の時期も不明とする。

(73) **門前第23号住居址**（第53・149図、PL33）

第IV区トレンチ3の東側の市道舗装下より発見され、住居北側は第21号住居址に切られている。プランは変五角形を呈すると思われ、規模は東西方向で4.6mを測り、南北で5 m以上あったと推定できる。掘り込みは15～30 cm程度で、周溝は全周するものと思われる。主柱穴はP_7～P_{10}の5本で、入口は北西側であろう。炉は中央やや奥寄りにあり、掘炬燵状石囲炉である。炉石は炉内に3個を残して抜かれている。炉の南西の床上にある石は炉石の1つである。埋甕は検出されなかったがP_5南のピットに埋められていたことも考え得る。石器は7点が出土している。土器の出土も少なく、狢沢式、新崎式系土器片などの中葉期のものと後葉III期の小片が混在する状況であ

る。住居の形態からすると住居址の時期は中期後葉III期に属すると思われるが定かではない。

(74) 門前第24号住居址（第55・150図、PL34）

本址は第20号住居址から北東へ10m離れた位置にある。道路工事で法面を削り始めた時、本址の住居断面が現われ、水路マスの入る部分のみ掘り下げて住居址の極一部のみを調査した。住居の北東の大部分は既に破壊されておりプラン等不明である。切土壁面に現われた断面では4.9mを測るので、これ以上の規模の住居址であったことは確かである。掘り込みは南西部では50cmで、周溝も認められた。また住居址の断面観察からすると北西からは水田地場土であるII②層が伸びて来ており、住居の壁上部を壊している様子が見てとれる。柱穴は深さ46cmのピット1を検出し柱穴と思われるが、それ以外は不明である。石器は敲打器1点が出土し、土器は藤内I式とみられる浅鉢破片が出土している。住居址の時期は中期中葉III期に属すると思われる。（北　澤）

2．竪　穴　址（第23・56・57図、PL34）

炉が無く明確な床面も認められない不整形な住居址以外の遺構を竪穴址とした。なお第1号竪穴址は欠番である。

(1) 第2号竪穴址（第23図、PL34）

的場第13・14号住居址の北西に位置する。北西と南西に壁と思われる29cm程度の段差が認められたが、それ以外は土壙や柱穴などによって不明確であった。南東側は第13号住居址の掘り込みがあり、その50cm位手前で底面がやや上がり気味となるが壁は認められなかった。また焼土等炉の痕跡は検出されていない。石器は打製石斧2・石錘1・横刃製石器3が出土した。土器は結節縄文を施した土器が底面より2 cm浮いた状態で検出された。本址の所属時期は中期後葉IV期である。

(2) 第3号竪穴址（第56図）

的場第59号住居址の南、第16号住居址の北に位置する。北側は土壙126に、南側は土壙128、129、132によって切られる。プランは長楕円形で3.9×2.2mを測る。堀り込みは30～40cm程度である。本址西側の底面上に15cm位の石が5個かたまってあったが、炉の痕跡は認められなかった。石器は打製石斧1、定角石斧1、石匙1、横刃製石器4が出土している。土器の出土は無く所属時期は不明である。

(3) 第4号竪穴址（第57図・PL34）

的場第15号住居址の西、第20号住居址の南に位置する。プランは南東側の壁が無く不明。堀り込みは20～35cm程度である。炉址は認められず、柱穴も内部に幾つかのピットはあるが不明である。北側の張り出した部分には15～20cmの大きさの石が6個かたまって検出された。当初、土壙の石組の可能性もあるとみられたが、覆土が本址と同一であった。石器は打製石斧1・蛤刃石斧1・敲打品2、磨石7、横刃製石器が出土している。土器は破片で67点が出土しているが、中期中葉から後期まで混在しており時期は不明とする。（北　澤）

3．ロームマウンド（第46・153図、PL28）

門前第6号住居跡の北側にロームマウンドBが発見されている。第6号住居址及び土壙26、集石2を切り、土壙2に切られている。プランは変五角形を呈し、240×296cmを測る。掘り込み舟底状で下部にローム再堆積土が上部には暗茶褐色土が堆積し、マウンドの周囲には黒茶褐色土が入る。出土土器は梨久保B式土器が出土しており、時期は中期後葉I期に属する。

第II区の西南隈グリッド、ク、ケ、コ、サ～3、4、5、6の範囲に黄褐色のハード・ローム層が小高く円形に堆積されておりその4分の一分角が発掘された。マウンドの半経凡そ10mを測り、発掘した扇形200m²の中に土壙

40基が散在した。縄文中期後葉22基で、内６基が後葉Ⅳ期に属する。　（林・北澤）

４．土　　壙（第７・58・67・68図）

現場調査中に確認した土壙は的場500基、門前88基の計588基であるが、その後11基を欠番としたため実際の土壙数は577基となる。各土壙の詳細は土壙一覧表に示したとおりであるが、時期については、複合遺跡であるため各時期の土器が混ざって出土する例が多く、土器の出土状況や土器の状態から土壙の時期を一概に決定することは困難であるため、確実と思われるもののみ一覧表に時期を示してある。断面形については桶状、ドラム缶状など、容器の形状に比した分類である。

プランは円形や楕円形のものが多いが、表中五角形とした変五角形プランの土壙が多いことは本遺跡の特徴であろうか。基本的には台形の底辺の一角を欠くような変五角形の形状で、円形に近くなるものもあり、当時の掘り方に特徴があったのかもしれない。その他プランでは長三角形となるものが６基あり、二等辺三角形の角が丸くなった形状で、長軸のどちらか片側の底面が低くなっている。また長方形のプランの土壙は的場第29号住居跡の周囲に見られ、縄文時代以降のものと思われるが出土遺物では時期を特定できない。土壙の断面形では浅いもので皿状、タライ状となるもの、深いもので桶状、鉢状、ドラム缶状のものが多い。なお土壙の形状と時期の関係は中期後葉と後・晩期では特に認められないが、早期の土壙はタライ状や皿状の浅いものに限られ、断面形が袋状となるものは中期中葉期に限定されると思われる。

土壙の分布状況は時期を特定できたものが少ないため定かではないが、時期別に検討すると、一般に住居跡の分布域がやや内側に該期の土壙が比較的多く分布する傾向にあり、集落の中央部に一部の土壙がみられる。

以下、特徴的な土壙について若干ふれてみたい。

(ア)　内部に石組みを持つもの

土壙の底部に石組みを持つものは的場土壙65、75、490、門前土壙１、10、19、87の７例がある。この外門前土壙19は断面形がドラム缶状となる土壙で、底部には９個の石を置き、その上にはローム土を入れて、中層には第156図の釣手付深鉢が釣手部を破損しただけのほぼ完形で横倒しの状態で発見された。土器の付近から上層にかけては多量の骨片が含まれており、土壙の最も上層は暗黒色土が覆っている。骨片は石膏で固めて取り上げた。

また、底部よりやや浮いた状態で土壙下部層に石が入るものとしては的場土壙６・37・39・62・69・71・83・139・144・152・232・310・322・329・359・363・364・368・369・373及び門前土壙22の21例があり、性格的には底部に石組みを持つものと大差ないと思われる。なお１例のみであるが土壙486は内部に石や礫がぎっしり詰まった土壙である。下部は石を逆円錐形に組んであり、その上部には10cm大の多数の礫が入れられているもので、南半は的場第20号住居跡の壁に切られている。

(イ)　上部に石組みがあるもの

土壙の上面あるいは上層に石組みが位置しているものは、的場土壙50・173・191・277・309・332・356・358・374・392・397・408・495の13例があり、上部の石組みが環状配石址に属するとみられるものが大半であるが、必ずしも上部の石組みと下部の土壙とが共伴関係にあると言うことができず、今後の検討が必要と考えられる。

(ウ)　多量の土器が出土したもの

土壙中から多量の土器が出土したものは的場土壙476、門前土壙57、58がある。的場土壙476は中期後葉Ⅳ期のもので、門前土壙57は中期中葉Ⅳ～Ⅴ期にかけてのもので土壙58は中葉Ⅵ期のものである。

(エ)　そ　の　他

的場土壙153の底部ではヒスイ玉３個がまとまった状態で発見された。的場土壙269の炭化物を含む層からは元祐通宝２枚が出土しており中世火葬墓であろう。

また後述する配石址に属する花崗岩立石が土壙中に落ち込んだ状態で発見されたものが３例あり、的場土壙132

では立石⑪が、土壙254では立石⑧が、土壙255では立石④が入っており、配石址より新しい時期のものであることは確かであると思われる。

土壙の黄土中に炭粒や焼土粒を含むものは何例かあり、的場土壙373や380は底部に焼土層を持つものである。あるいは後述するように中期後葉以降の住居跡炉である可能性も残るものである。（北　澤）

5．配　石　址（第59、61図、PL31、35、37、付表4）

第II調査区及び第III a 区の全面、東西70m 南北40m の全範囲にわたって検出された配石遺構は、最大形状が径70m の半環状に展開する配石列であるが、これに対応する南半部は第III b 区の発掘調査区外で未発掘のため不詳である。第II区および第III a 区の調査結果からみて第III区全域に列石址の環状南半部が存在するものと考えられる。

第II区全面に検出された配石列は同心円状に展開する大・中・小の3帯で構成されている。まず内帯にあたる環状配石址Ⅰは径約15m で半円形に展開し、その外側に中帯として環状配石址IIが径約30m の半円形に展開する。また、その北部外側に径70m 内外の環状配石址3が幅約20m の帯状に展開する。各配石は組織的ではなく散発的であるが、これは中世の掘立柱式建物や溝状遺構によって若干の攪乱があったものとみられる。

環状配石址Ⅰ（第60図）は、（註：第59・60図の集石の表記は全配石址についての一連番号である。）第II区の東部中央にある径10m の空間を中心に半径4 m、西から東へ配石列がとりまく。すなわち集石1の南西5 mにある集石5を南の基点として、北へ5 mに位置する集石4は小礫数個の蝟集、それから北東へ4 mの位置に枕大の石3個の蝟集する集石15。そこから3 m東へ集石14が位置する。それより東へ3 mに集石3が位置している。集石3は石棒状の立石2個をとりまく10個内外の礫の集合によって構成される。石棒のうち円柱状の石棒は北側、それより1 m東へ離れて片麻岩製角柱状石棒が樹立している。集石3から2 m東に集石13が5 mの長さにわたって列状に展開する。枕大の石7個をもって構成され、その中に花崗岩棒状石が1点、石皿1点が配置されている。さらに南へ1 m離れて集石12が4 m列状に展開する。その北端に花崗岩立石が位置する。

環状配石址II　以上の環状配石址Ⅰの周囲に、幅2 mの空間帯をおいて同心円状に展開する環状配石址IIについて詳述しよう。まず環状配石址―集石5の位置から西断崖遺構突端に近く、環状配石址IIの西端部すなわち集石11が位置する。ここから列石は北方へ続く。そしてさらに東方へ循環して行く。まず集石11は枕大の石3個が蝟集し、多凹石 H11・12が配置されている。この3 m北に枕大の石6個が6 mの間に直列し、その最北端に花崗岩立石①が位置する。これが集石10である。ここから8 m北に8個の枕大の石が列状に蝟集する。これが集石9である。ここから次第に列石は方向を変える。そこから3 m北東に集石8がある。集石8では枕大の石20個が不整楕円形状に配置され、その中央近くに石棒状花崗岩立石1個、その北に多凹石1個が配置されている。これに接して集石7が列状に東へ展開する。

環状配石址III（第59図、PL13）　環状配石址IIの外側線に平行して、幅15m の帯状に循環する配石址であって、検出されたのは、その北半部である。規模は外径70m 以上である（70m と表記したのは段丘の東西側は中世の断崖遺構によって西側では30m、東側では10m 内外を削除されているからである）。

幅15m の配石帯は環状配石址Ⅰ・IIとは異なり、集石遺構など組織的なものは認められず、礫が不規則な状態で展開している。しかしこれは中世の溝状遺構 c が、この地点を東西に走っており、この南側に沿って掘立柱建物址が続いているので、これらの造営工事によって攪乱されたものとみられる。しかし、この配石帯の外縁に近く立石列が認められる。

すなわち東部に立石⑪があり、この10m 北寄りに立石⑫が位置し、これから20m 西寄りに立石⑬が位置し、さらに20m 北寄りに石棒が樹立し、これより西30m に立石⑨が位置し、またこれら立石をつなぐ線のやや内側に、多凹石20数個が不整ながら50m にわたって列状に展開し、その内側に4～5 mの間隔をおいて石皿5個が各10m

の間隔をもって弧状に展開している。以上の事柄からみて、この配石帯には組織的な石組があったことを傍証していよう。

さらにこの配石帯は第II a 区東端からIII a 区に伸びていると思われる。III a 区では前述の押型文遺構で触れたように、集石２・３と並んでいて、第２号竪穴住居址の浅い土壙に枕大の石８個の集石がある。接続する第１号竪穴住居址の覆土中にも４つの枕大石が並べられており、その北部ハ一Ａグリッド区では粘土層下部から立石状の長大な石が検出されている。また第III区中央部のネ一Ａグリッドに位置する土壙19からは、土壙内に鹿の成獣骨が大量に集積されており、その下部から大型の釣手付深鉢形土器が斜位に埋設された状態で出土した。

この土壙から東方５ｍに位置する第６号竪穴住居址（中期後葉Ｉ期）の北側部分に径３ｍのロームマウンドＡ址があり、梨久保Ｂ式の土器片が検出されている。これに対応するロームマウンドは第II区南西隅に発見されたロームマウンドＢ址である。ハードロームを再堆積したゆるやかな丘面を持つ、径10m程の円丘状を呈するロームマウンドである。この内部は土壙が41基設けられていたが、その内土器が出土したのは22基である。

出土土器により分類すれば中期中葉３基、中期後葉22基で、この内訳は後葉IV期が６基、後葉III期が５基、同Ｉ期が４基でII期は無い。

このように中期後葉後半の頻度が高い。以上のことから環状配石址３の東西に対応して位置しているものとみられ、環状配石址を考える上で重要な施設と思われる。その他、環状配石址に関連する遺構・遺物について若干述べよう。

１．炉　址　第II調査区で発掘された炉址のうち、前述で的場第５号住居址としてあるものは野外の炉址であろう。　炉址は中位の方形石囲炉で、最上層黒土層内に包含され、隣接する第27号竪穴住居址（中期後葉II期）の側壁上面より高い層位に含まれていた。また炉址と同平面の南４ｍに検出された単独埋甕は後葉Ｉ期に属するもので、明らかに縄文中期後葉II期以降の所産であることを示している。しかもその位置は環状配石址IIIの配石帯外縁に位置し、配石帯の一部を構成するものと認められよう。

２．飾り玉出土の土壙　環状配石址Ｉの集石13の１ｍ東に位置する土壙153から硬玉の珠３点が出土した。土壙153は径180×130cm、深さ63cmを測る桶状の深い土壙で、低平な底面中央にヒスイ製の飾り玉３個がかたまって出土した。他の遺物は認められず、北東部を土壙152に切られていた。土壙152は同じプランで土壙153より20cm深く掘られている。底部に８個の石積みがあり、称名寺式土器を出土した。以上のことからみて、環状配石址２に伴った土壙とみられる。飾り玉は第166図11・12・13で、13は長さ53mm、11は長さ37mm、12はさらに小さく30mmの小型製品である。この飾り玉の形から見て縄文時代後期の垂飾品と思われる。

３．竪穴址（第23・56・57、PL34）　竪穴址は第II区のナ一７からハ一６グリッドにかけて３基が検出された。

第４号竪穴址は居住帯の内側に位置し、隅丸方形（４×３ｍ）の竪穴で、低平な床面に６個の石が蝟集し、打斧１、磨斧１、磨石１、横刃１点を伴い、土器片67点を出土した。時期は縄文時代中期後葉IV期とみられる。

第２号竪穴址は居住帯の中軸線上に位置し、１辺３ｍの隅丸方形の建物と思われるが、南側が攪乱されており不明である。低平な床面には炉が無く、石器は横刃３、石錘１点を出土した。土器は中期後葉IV期とみられる。

第３号竪穴址は居住帯の外側に近く位置し、径3.9mの長楕円形、深さは同じ40cm内外、床面上に石５個が集まっていた。石斧２、石匙１、横刃１点を出土した。

以上のように、この竪穴址は環状住居址帯の北半部の東弦を、横に横断するかのように30mの直線上に並び位置している。この竪穴址群は環状配石址IIの列と関係があると思われる。

４．土器の分布状況　黒土層上半部の中世遺構・遺物の検出作業中に、第II調査区の全面から縄文時代中期中葉及び後葉の土器片、同後期・晩期の土器片が散布状態で検出されている。その状況からみると最も密度の高いのは縄文時代中期後葉の土器片であって、このことは下層に同期の竪穴住居址群が密集状態で包含されているので、その原由は明白である。ここで注目されたのは比較的数の少ない縄文後・晩期土器片であった。

小　結

以上配石址について詳述して来たが、環状配石址のあり方についてまとめてみよう。

環状配石址Ⅰは本配石址全体の中心部を占めている集石遺構であるが、集石３、立石２点を伴っており、西側の立石（３ａ）は径15cmの花崗岩製で中央から切断されているが、全面が敲製されたもので、恐らく有頭の石棒と思われる。これより東90cmの位置に東立石（３ｂ）がある。この立石は片麻岩を打剝した、一辺13cmの角柱状立石である（PL37）。

環状配石址Ⅱは東端部から立石①～⑦までが、環状配石帯中軸に位置している。すべて大型の花崗岩質の棒状自然石であって、④は長さ1.4mを測る。ただし⑥は球状の大石である。

以上８個の石から成る立石列をみると、環状配石址Ⅱの配石帯の円周を６分割する位置に各立石が設けられているのであって、極めて意図的な配置であることが看取される。各立石の間隔はおよそ３ｍを測る。

環状配石址Ⅲは環状配石址Ⅱの外側に接して20m内外の幅で帯状に展開する。全面に立石、多凹石、石皿等が集石内に配置されているが、極めて不規則であって列状をなさない。環状配石址Ⅱにみられた石器の配置状況は激変する。環状配石址Ⅱが石皿１、多凹石４点であるのに対し、環状配石址Ⅲでは石皿６点、多凹29点と激増し、その範囲も広がり、150㎡に不規則的に配置されている。その反面、立石は４点に減少する。この地点は前述したように中世溝・宅地、近世の水田造成によって浅い攪乱を受けているらしく、組織的な配石は見られないが、原状は石器配列遺構が存在したと考えられる。29個の多凹石は配石帯の外縁側に多く、したがってこれを多凹石配置遺構と命名したい。

次に立石及び石器の配置状況をまとめてみると、立石は環状配石址Ⅰにおいては、集石３にのみ２本の立石があり、環状配石址Ⅱでは配石列の中に、東から集石12、13、14、６、７、８、９、10と８個の立石が弧状に列をなして展開する。つまり、この半円形の円周を６分割する位置に各立石が設けられているのであって、極めて意図的に配置されていることがわかる。

石器の配置状況から見ると、環状配石址Ⅰでは中心的な集石上のみであって、石器の配置は無く、環状列石においては、集石２に石皿が１個配置されていた。ところが環状配石址Ⅲにおいては、石皿・多凹石の数が激増して、しかも多凹石33点がほぼ弧状に配置されている。以上が本環状列石遺構を特徴づける立石並びに石器の配置状態である。

（林）

６．後・晩期の土器（第157～161図、PL63～66）

当遺跡では後期から晩期まで連続した変遷を辿ることができる良好な資料が出土している。本来であれば遺構あるいは出土状況と出土土器とを関連づけて報告しなければならないが、もはや時間も紙数もないため十分な報告ができないことは誠に残念であり、責任を痛感する次第である。遺構について現場調査中に後期遺構の住居址として第44～50号住居址を想定し実測を行ったが、再検討の結果、住居址とは認定できないとの結論に至り欠番とした。

また写真35の１に見るように第Ⅱ調査区の南側中央部付近においては、掘立柱建物址の柱穴と混在しているため判然としないが、小ピットが円形に並ぶ箇所が幾箇所かあり後・晩期の住居址である可能性がある。

以上のように配石址との関連も含め、遺構については本報告では責を果たせないので後の機会に期することとし、せめてできるだけ多くの土器を図示するよう努めた。土器は大別して第１～12群に分類し図示してあるので、以下その概要と問題点について記述していくこととする。

第１群（第157図１～20）は東日本の称名寺式･綱取Ⅰ式土器、西日本の中津式土器に相当する後期初頭の土器群である。型式内の時期細分を行っていないため定かではないが、当地域独自の展開はみられず、東西両地域に見ることができる土器が混在する状況である。広域的な分布と交流とがある該期土器の編年研究は東日本と西日本からのアプローチがなされているが、両地域の中間にあたる中部高地では十分な資料が少なく、これらの土器は良好な

一資料となり得るものである。胎土や焼成の違いは、1・4・12・15・16は白っぽい淡灰褐色を呈し、やや軟質で、胎土には金雲母が含まれている。2・6・10・11・13・14は赤味がかった暗褐色を呈し堅緻である。3・5・9は胎土に長石、石英が多い粒の荒い砂粒を多量に含む土器である。3・9は外面の調整は丹念に行っており、胎土の土質は共通する。5は非常にもろい土器である。17・18は薄手で堅緻なもので、縄文の細かさから、あるいは時期が新しくなるかもしれない。なお図示できなかったが、PL63の右上の口縁がねじり紐状となり円形の指頭圧痕の付く土器は中期最末に相当するものと思われる。

第2群（第158図1～21）は後期前葉の堀之内Ⅰ・Ⅱ式に相当する土器群である。深鉢の器形では頸部がくびれるもの（1・5・6・12)、頸部がわずかにくびれるもの（10・13・18)、直線的に立ち上がるもの（8）等がみられる。2は口縁部が「く」字状に内湾し、西日本で主体となる縁帯文土器である。口縁部装飾が付くもののうち4は非常に堅緻な土器で朱彩の痕跡がわずかに残っており珍しい例である。21は把手付の注口土器。19・20は縄文を転がしたC字形の装飾が付くもので、類例を知らず時期は不明であるが、円形の刺突文からの類推により仮に本群に含めた。

第3群（第158図22～33）は後期中葉から後葉にかけてのものと思われる波状口縁をもつ土器及び口縁部装飾が付く土器を集めた。24・25・26は加曽利BⅡ～Ⅲ式土器の波状口縁部で、29は加曽利BⅡ式の口縁部装飾である。22・23・27・28・31～33は曽谷・高井東式の波状口縁各種である。また30は装飾の手法から安行Ⅱ式期のものと思われる。

第4群（第159図1～30、17・21・23を除く）は後期中葉から晩期前半までの平口縁となる在地系土器群である。縄文施文は口縁部に限定され、晩期に至ってはみられなくなる。そして胴部文様は羽状沈線が主体であり、やはり晩期になると無文化する。時期的な変遷は十分整理できていない感があるが、羽状沈線をもち口唇部に刻目がある3・4・5や幅広の口縁部区画のある7・8は加曽利BⅢ式併行期のものである。1・2・6・11～13は曽谷式併行期のものであろう。15・22・28は楕円沈線の間に一条の沈線が入る口縁部文様をもつ土器で後期末あるいは晩期初頭の安行式に併行するものと思われる。また口縁部に突起などが付き口縁部下が無文となる16・19・20・25・26・29などは晩期前半に属する土器であろうと思われる。なお細そい隆帯に刻目を付ける30は曽谷式併行の土器である。

17・21・23は作図時誤って本群に入れてしまったが、大洞A式の工字文をもつ土器である。

第5群（第160図1～6）は加曽利BⅠ・Ⅱ式土器の深鉢にみられる文様で、縄文施文の後に斜めに条線を交叉するように描いた文様をもつ一群の土器片である。

第6群（第160図7～14）は晩期初頭の安行式Ⅲa、b式、大洞B・B－C式期に相当する土器である。9・11・12は暗褐色を呈する土器で器面の磨きを丹念に行った搬入品と思われる。11・12は胎土に金雲母が目立ち、9は外面に朱彩が施されている。14は北陸の八日市新保式系の波状口縁をもつ土器であろう。

第7群（第160図15～25）は東北地方の大洞C_1に相当する土器である。15～22は大洞C_1式の搬入品で、灰黒色を呈し混和材の砂粒も非常に細かく精選されたものである。23・24はこれらの土器に伴うと思われる在地の粗製深鉢片で、口唇部に刻目を付け、口縁内面には指頭による沈線を廻らせいる。混和材には荒い砂粒を使っているが内面の調整は丹念である。20の鉢は黒色研磨を施した土器で、胎土には雲母が多く含まれている。25は壷形土器の模倣品と思われる。

第8群（第160図27～32）は、後期中葉から晩期と思われる注口土器である。27は加曽利BⅠ式の胴部片で搬入品。29・30は基部に縄文がみられ晩期初頭のものであろうか。32は沈線部が主となる浮線文が基部下面に施されており氷Ⅰ式期に属する。なお群外となるが第160図26は晩期中空土偶の脚部である可能性が高い。

第9群（第161図1・5～7、第159図17・21・23）は氷Ⅰ式に併行する時期の土器である。第161図1は内外とも研磨が行われる堅緻な土器である。5は内面の調整は丹念だが外面は荒れており、2山の三角形装飾が口唇上に付き、胴部には沈線文がみられる。6・7の器面の状態は5と同じで、2条の平行沈線が間隔を開けて止まる文様を

持つ。

第10群（第161図８～14）は口縁部に沈線を廻らせる土器である。８～10・14は幅の狭い沈線で、８は内外面とも黒色研磨され、14は淡褐色を呈し内面のヘラ磨きが行われている。12・13は浅く幅広の沈線であり、沈線施文後研磨されており器厚は厚い。12の外面には朱彩痕が認められる。

第11群（第161図15～25）は隆帯に刻目をもつ各種土器である。16・18・19は棒状施文具側部による刻目で、15・20・22・23はヘラ状施文具による刻目である。15の隆帯は断面が三角形となる点特徴的である。21は口縁部隆帯を指頭により連続して押圧したもので、25は隆帯間に極浅く細かく押引文が付くもので大洞C_2式に類例がある。

第12群（第161図２～４・26～28）は無文土器に類する一群である。２は口縁内部を肥厚させ、口唇上部は小単位の波状となる。３は黒褐色でがさついた感じの器面の土器で口唇部は上部が平らでわずかに外へ張り出す。４は胴部にかすかに条痕が付くかなり大型の土器で、口縁部の立ち上がりに特徴がある。口縁の屈曲部には刻目が付けられ、その後に調整が行われている。胎土には雲母粒が目立つ。26は厚手で波状口縁を持つ深鉢で口唇上にヘラ状施文具による深い沈線を中央に付け、その内側に刻目を付けている。内面の調整は非常に丹念に行っており滑らかな器面となっている。外側は縦方向の調整を行っている。27は粗製の深鉢で口唇上端には山形の装飾が付き、山の上には刻目が付けられている。28は補修孔を持つ無文深鉢で口唇部は肥厚し、外側に貼り出す。

以上、急場の分類であり、浅学のため型式の認識が甘く分類上の問題も多いことと思う。大方の御教示を願う次第である。

（北　澤）

７．土　　偶（第160・162図、PL61・65・68・69）

当遺跡からは12例の土偶が出土している。第162図中**１**（PL61－5）は的場第60号住居址から60cm離れた60×50cm深さ25cm程度のピットから出土した（PL69－１・２）。大型で重量感のある土偶で、上半身は欠失しているが原形は少なくとも30cm以上あったと思われる。胴と脚の接合は胴部接合面をくぼませ、脚部接合面を丸く突出させ接合しており芯棒は使われていない。胎土には粒が均一な多量の砂粒が含まれている。文様は下腹部に双直弧文を彫刻し、沈線部は尖端を尖らせた施文具による連続押引文によって表現されており、中期中葉期の有脚尻張り立像である。**２**（PL68－７）は的場テ－12グリッドから出土した容器形の中空土偶である。頭部は首座から欠失しており、現高は7.3cm、胴部径は６cm前後で、底部はゆるやかな円面に整形され、体壁は輪積みで作られており、胎土には１mm以下の砂粒を含み、焼成は良好で茶褐色を呈する。文様は簡略で臍は刺突で表し、妊娠線及び陰部や尻部の文様はヘラ状施文具で細く弱い線によって描出されている。**３**（PL68－４）はネ～ハ－２グリッドの地場土から出土した土偶の胴部断欠品で、手足、頭とも失われ、乳房も剝落しており、現高8.3cmを測る。**４**（PL68－１）は門前第３号住居址の埋甕１内より検出された径2.2cmを測る小型土偶頭部で、右耳部に径1.5mm程度の貫通孔が上下に空けられていた。鼻より上は失われているが、頭の上の部分は後傾し扁平な形である。**５**は門前第Ⅲ調査区のニ－Ｂグリッドから出土した土偶の足部断片で、踵と踝が象形され、踵の長さは3.9cmを測る。**６**（PL68－３）は中期後葉期によく見られる土偶の頭部残欠品で、左右の径4.8cmの頭部に頭頂から後頭部にかけて斜めに孔が貫通している。**７**は的場土壙97・99から出土した土偶体部の残欠品で、肩から胸部の破片である。**８**（PL68－２）は的場第15号住居址の覆土から出土した小型土偶の胸部断片で、左右に開いた両手端部には直系２mm程度の孔が貫通している。両手の長さ7.1cmを測る。胎土は緻密で混和砂粒は少なく茶褐色を呈する。**９**（PL68－８）は有脚尻張り立像の胴部片であるが、臀部は角が取れて丸く、臍も突出させるなど表現が特徴的である。**10**（PL68－5・6）は的場テ－11グリッドから出土した脚部片で、中実土偶立像の右脚と思われる。中期の土偶に属する。**11**（PL68－9・10）は中期後葉期に当地域で盛行する有脚尻張り立像（ハート尻土偶）の胴部以下破片で、現高７cm。足裏に芯棒の孔が認められる。なお第160図の26は中空土偶の脚部片と思われる。縄文晩期に属するものであろうか。

（林・北　澤）

8．土　製　円　板（第163図、PL67）

当遺跡からは21点の土器片を加工した土製円板が出土している。大きさからすると径2.5cm位の小型のものと径4 cm位のやや大型のものとの2種類があるようである。表面に土器の文様をとどめるものとしては、3、9、11、14、16が縄文、7、12、15、19が沈線文、18は中期中葉土器の区画文、20は中期後葉の結節縄文の文様が残っている。重量では大型のものが平均で20g、小型のものが9 g程度である。（北　澤）

9．縄文時代中期の石器について

（第165・166図、PL69・70・71、縄文時代住居址別出土石器一覧表）

遺跡出土の石器は石皿、石棒、はちのす石などの大型石器を除いても整理箱換算で80箱と膨大な量であり、全点について詳細な分類を短期間で行うことはできず、ここでは縄文時代中期住居址から出土した石器を中心に概観することとしたい。

石器は第165・166図で代表的なものを図示してあり、数量は縄文時代住居址別一覧表を参照していただきたい。

全体では住居址からは1,272点の石器（小型剥片石器を除く）が出土している。石材別では硬砂岩674点、緑色岩345点、黒曜石40点、チャート3点、粘板岩・泥岩等その他石材が211点の内訳となっている。なお剥片は3,338点が出土しており、硬砂岩2,066点、緑色岩117点、黒曜石1,256点、チャート3点、その他石材57点の内訳である。

以下、石器の種類ごとに総体的な傾向をみていくこととする。

(1) 打　製　石　斧（第165図－1）

総数で524点と最も多量に出土している。覆土出土のものも含めてであるが、1住居址で30点近く出土する住居址もあり点数が多くなっている。形態や加工法で細分類していないが、石材別では硬砂岩製のものが272点と最も多く、緑色岩製が272点、粘板岩・泥岩等が92点とこれに次ぐ。なお緑色岩製272点の内、部分的に磨きを施すものが18点あり、本来なら局部磨製石斧として分類すべきであるが、打撃による整形が主体であったので打製石斧の類に含めている。

(2) 磨　製　石　斧（第165図－2～5）

定角石斧は24点が出土している。緑色岩製が20点で、使用痕が認められるものもあり実用品として使用されたものと思われ、チャートや蛇紋岩の研磨がいきとどいた美麗な3点は実用品ではないだろう。第165図中2は蛇紋岩製で、同図の3は赤色チャート製で擦切痕が側辺部に残っている。

蛤刃石斧は石材がほぼ特定され、39点中38点が緑色岩製で1点が泥岩製である。全点に敲打整形→研磨の製作工程の痕跡が認められる。

乳棒状石斧は慣例で石斧の名称を用いているが、刃部をもたず機能的には敲打器に分類すべき石器である。14点が出土しており全点が緑色岩で作られている。欠損品が多く先端部まで残っているのは3点のみで、その他は基部のみである。

(3) 石　　匙（第165図－6・7）

34点が住居址から出土している。石材等さまざまだが縦型が16点、横型が18点である。石材別では硬砂岩製16点、黒曜石製2点、チャート製1点、緑色岩製9点、頁岩等その他石材が6点となっている。硬砂岩で作られる大型粗製石匙は5点と、市内縄文時代中期の他遺跡と比べてかなり少ないことは本遺跡の特徴である。また緑色岩製の石匙は縦型6点、横型3点と薄い剥片から作られる縦型石匙が多い傾向がある。

(4) 石　　錘（165図－8）

24点全点が硬砂岩製である。また総てが平板な河原石の両端を打ち欠いた礫石錘である。

(5) 敲　打　器（第165図－9～12）

「たたく」機能をもつ石器であるが、形態、機能は多種多様で、磨面をもつものも多く磨石と分けることは難しい。機能的には「強い打撃」、「こつこつ敲く」、「たたきつぶす」等用途別に分けることが必要であるが、細分類は行わず一括して敲打器に分類した。53点が出土しており、硬砂岩製30点、緑色岩製21点、その他2点の石材内訳となっている。図中11は4方向からの打撃であり、あるいは石錘に分類してもよいかもしれない。12は台形で泥岩製の特殊敲打器である。

(6) 磨　　石（第165図－13・14）

131点が出土しており、石材別では硬砂岩製が92点と最も多く、緑色岩製が26点でこれに次ぎ、その他石材が13点となっている。形態はさまざまで、球形、円盤形、台形のものが70点、楕円形、三角柱状など細長い形状のもの61点ある。このうち図中13は平らな河原石を用いた磨石だが、磨面の中央付近にかすかに打痕があるタイプで同様のものが10個認められた。また図中14は断面が二等辺三角形を成す三角柱状のもので、この形態のものも多く、1タイプとして認められる。

(7) 小型棒状石（第165図－15）

5～10cmの細長い、一方がやや太くなる角が無い河原石で、加工痕や使用痕は認められないので石器とするには問題があるかもしれない。用途は不明だが15点中11点が緑色岩で4点が硬砂岩であり、当遺跡地にない石材であるので何らかの目的をもって持ち込まれたことは確かと思われる。あるいは錘として使用されたことも考えうる。

(8) 凹　　石（第166図－1）

多凹で据えて使うはちのす石に対し、小型で手に持って使うことができるものを凹石として分類した。石材は41点中縞状片麻岩が29点、花崗岩7点、硬砂岩3点、泥岩1点、コートランド岩1点が使用されている。くぼみは両面もしくは片面に1～2ケ所付けられている。

(9) 多　凹　石（第166図－2）

住居址の床面近くから出土したものは5点で、この他に覆土から9点の出土があるが配石址に併う可能性が高い。

石材は軟らかい縞状片麻岩が使用されている。図中2は配石址に伴うはちのす石だが、住居址出土のものも同様であり、特に違いはみられない。

(10) 石　　皿（第166図－3）

住居址から15点が出土しているが、的場第2号住居址のものは覆土上層からの出土であり配石址に伴うものである。石材は縞状片麻岩製が9点、花崗岩製4点でコートランド岩製のものが1点ある。転用例が多く、的場第15号住居址と32号住居址では裏を向けて炉石として使っており、第23号住居址では埋甕の蓋石として使用されている。

また図中3は裏面に多凹があり、はちのす石としても使用された例である。

(11) 横刃製石器（第166図－4）

図中4は形状が明らかな例であるが、剥片を使用した刃部を持つ大型石器は横刃製石器として分類しているで広

義の分類である。そのため点数が多くなっているが総数で310点を確認した。石材は硬砂岩製のものが234点と圧倒的で、緑色岩製が45点、その他粘板岩や泥岩製のものが31点となっている。

⑿ 石　　鏃（第166図－５）

石鏃については細分類を行っていないが、全点が双基鏃である点特徴的である。石材は25点中24点が黒曜石製で、１点は頁岩製である。

⒀ 石　　錐（第166図－６）

石錐は住居址から11点が出土しており、全点が黒曜石製のものである。

10. 獣　　骨

骨片出土は、数箇所に亘って認められたが単発的で微細な状態なものが大部分であった。

特に群状態で出土したのは、門前土壙第19号址と的場テ－12、ト－12のグリッドであった。

門前土壙第19号址。第Ⅲａ区の中央部、門前第11号竪穴住居址（縄文中期後葉Ⅲ期）の南外側１ｍに位置するドラム缶状を呈する径136cm 深さ116cm の土壙である。底部に枕大の石９箇が積まれ、その上に吊手付深鉢形土器が斜位に埋納され、その上部にニホンジカ成獣の四肢骨を折って束にした状態で置かれていた。崩壊が著しいので周囲を石膏で固め土塊のまま採取した。

信州大学医学部助教授西沢寿晃氏が精査されその結果を次のように発表された。

的場・門前遺跡の出土の獣骨について

Ａ．門前土壙19号の上部で発見された骨。

１．骨の現状　骨類はかなりの高熱を受けて完全に燃焼したもので、銀ねず色ないし白色を呈する焼骨である。しかし焼骨特有の堅い骨質として保存されず、極めて脆く崩壊がすすんでいる。

２．獣骨の種類　ニホンシカ　すべての骨片はシカのものと見なされる。大形獣としてはイノシシの存在も考えられるが、確認できない。

３．骨格部位（深鉢の直上で検出された骨）

頭蓋骨：破砕された一部分が認められる。椎骨：椎体部分が数点以上数えられる。これらは一箇所に集積された状態である。脛骨：遠位関節の一部がやや形状を保っている。骨体部分は破損し骨粉状となる。肢骨：上下肢の長骨が束状に揃えられて残る箇所があるが、各骨の部位は確認できない。骨端線から外れた幼獣の骨が存在している。中手骨：断片。前面の縦溝が認められる。

４．深鉢内の上方で検出された骨については

ツノ：鹿角の断片である。大腿骨（？）の遠位関節の小部分。骨端線から外れている。

Ｂ．グリッド、テの12の、第Ⅲ層全面から中期後葉の土器片が多数検出され、その南部から焼けた骨片がめだつ程出土した。すべて粉状で崩れやすいため包含土と共に採集した。これについての観察鑑定結果は次の通りである。

すべて焼骨であって崩壊が著しく判定が困難であるが中にニホンシカの上腕骨があり、遠位関接（滑車）の一部と判定できる。　（林）

第3節　古　　代

(1)　的場29号住居址（第167図・PL73）

当住居址はIIb調査区の南側、グリッドでタ～テー4～5に位置している。プランは西側のカマド付近がわずかに張るが、東西6.1m、南北5.1mを測る方形に近い長方形である。主軸はS-70°-Eを示す。壁は直に近く、壁高はほぼ均一に50cm前後を測る。ローム床面は堅くタタキしめられており北西側がやや低い。北側の東西に4ケ所並ぶ浅い掘込み、及び南東隅の掘込みは上面に本址貼床があり、縄文時代の土壙底部と思われる。カマドは石芯粘土造りで、天井部は下に崩れていた。袖石は両側に8個ずつの石を組んでおり、支脚石も残っていた。火床部は8cm程掘りくぼめられ焼土が堆積していた。主柱穴は掘り込みの外に掘られたP_1～P_4及び南北の壁際に2本ずつ掘られたP_{11}・P_{12}・P_{17}・P_{18}である。壁際の4本の主柱穴の内側に掘られたP_{27}～P_{29}及びP_{30}～P_{32}は支柱穴と思われる。また住居の四隅には径20cm程の柱穴2本と浅い円錐形の小ピットの3本1組の柱穴があり添柱が使われていると思われる。西側の入口部の両側にはP_5・P_6とP_7・P_8の2本1組の柱穴があり、住居内部の対応する位置にP_{25}とP_{26}とが掘られている。遺物はカマドのある西壁付近に集中して出土しており、土師器が主体となる。1は内面黒色処理の坏で赤褐色を呈し、底部は回転糸切りである。2は高台付皿だが高台は取れてしまっている。多量の細かい砂粒を含み赤褐色を呈する。3は甕底部で内面は横ナデ、外面は縦のハケ目が付く。内面は赤褐色、外面は暗茶褐色を呈し、胎土は細かい砂粒を含み雲母粒が目立つ。4は甕口縁部で口縁部は水平に近く強く外反する。調整は外面が縦のハケの後に横ナデ、内面は斜め及び横方向のハケによる。5・6は須恵器坏である。5は青黒色を呈し、胎土には長石・石英が目立つ大粒の砂粒が含まれ、底部は回転糸切りである。7～10は灰釉陶器。7は薄手の碗で、高台はやや内湾する。釉は内面がハケ塗り、外面は無釉、胎土は猿投と思われる。8の皿も猿投産で内面のみ施釉され、高台は付高台である。9は段皿で内面はハケ塗りによる施釉で外面は無釉。10は壷の底部。11は泥岩質の砥石で、12はP_{28}・P_{29}間の床上で出土した灰色の片麻岩製砥石で砥面は3面ある。住居址の時期は幅があるが灰釉陶器は黒笹5号窯期のものと思われ、平安時代の9世紀後半位の時期にあたる。

(2)　的場第34号住居址（第168図・PL74）

本址は縄文時代の第38・39住居址の上に貼床をして作られている。壁や床の大部分は失われており、プラン等は不明である。床面はカマドの手前と住居南側及び南東側にわずかに残るのみだが、ロームを堅くタタキしめて貼床を行っている。主柱穴はP_1～P_4の4本で径50～80cm、深さ45～90cmと大型の柱穴である。柱穴間は南北で4.5m、西が5.6m、東が5.3mを測る。なお住居址南側に残る貼床面の南及び南東貼床の東はわずかに立ち上がる様子があり、ここを壁とすれば柱穴は住居掘り込みの内側にかけて四隅に掘られていた可能性が高く、さらに柱間の規模程度の住居址であったと推定される。カマドは西壁の中央の位置にあったと思われる。石芯粘土造りである。袖石は乱れているが両側に5個ずつの石組で、支脚石も遺存していた。天井部は崩れて内部に落ちていた。

遺物はさほど多くない。13～15は土師器。13から内面黒色研磨する坏で口縁部は直線的に外傾する。胎土は大粒の赤褐色粒を含む砂粒が入り、暗褐色を呈する。14は口径9 cmの小型甕。外面は縦のハケ目、内面は横ナデ。外反する口縁部は内側から張り付けるように作られている。胎土は赤褐色砂粒が含まれる。15の大型甕底部の調整は14の小型甕と同様で、胎土には多量の砂粒が含まれ、赤褐色粒が目立つ。16は住居覆土出土の須恵器坏で、底部は回転糸切り、胎土に含まれる砂粒には黒色、灰色粒がられる。17も覆土等出土の灰釉碗で内外面とも施釉、口縁部は丸く内湾する。住居址の時期は平安時代の9世紀代と思われる。

(3) 的場第52号住居址（第169図、PL74）

本址は第Ⅰ調査区内にあり、第53号住居址の南東に位置する。北側は後世の段切りで破壊され、東側は断崖に切り取られ、住居の南西部を残すのみの状態であった。壁はゆるく傾斜しており南側で20cm、西側で5 cmを測る。

床面はソフトロームである。柱穴は南壁沿いに3本、西壁沿いに3本が残っていた。径は25cm内外で、深さは南側の3本が22～37cm、西側の3本が43～58cmを測る。遺物は縄文土器に混じって土師器甕片が何点か出土しているが時期は不明である。（北　澤）

第4節　中　　世

1．掘立柱建物址（第171図、PL75～78）

掘立柱の柱穴址は、第Ⅰ調査区から第Ⅳ調査区までの全域にわたって検出されたが、各区とも縄文時代竪穴式住居址群、土壙密集群の上に設けられていたためと、工事計画の急激な変更に伴う発掘計画の急変と、加えて地形上使用重機の進入通路としてⅡａ区のうち約800m²を利用せざるを得なくなり、中世の柱穴址の検出が不能となった面があり、柱穴址の確認が不徹底に終ったことは誠に残念であり、遺憾なことであった。しかし幸いにもⅡ調査区の大半（Ⅱｂ区～Ⅱｃ区）、約2,100m²の全面にわたって柱穴址の検出を実施することが出来得たことは誠に幸いであった。よって当該区の状況について詳細に報告したい。

当第Ⅱ調査区および第Ⅳ区の地形は南西側と東北側を中世の切岸遺構により南北線で切削され、さらに北側は高さ4 mの切岸状に切られ、南側の丘陵頂部を削平して、方形に1辺100mに区画形成され、台地状となる。台地の上面の約10,000m²は三面の長方形（80m×40m）に分割され南北に並行する。各面の比高は1.5～2 m内外である。第Ⅱ区はその中区に辺り、第Ⅰ区及び第Ⅲ区とは溝遺構で区画されている。柱穴址群はⅡｂ区、Ⅱｃ区の全面に展開（第171図）しており、加えてⅡａ区も同様であったが、Ⅱａ区は前述のとおり一部を調査不備に終ってしまった。またⅡｂ区には平安時代竪穴住居址やその南に縄文後期柱列址群が存在し、ほとんど層位を同じくしたため紛らわしく、この部分200m²は中世柱穴址の検出は除外した。調査を加えた約2,100m²からは中世の掘立柱建物址29棟が検出された。以下各建物址ごとに報告したい。

なお本稿で表示する中世の遺構や遺物に関する編年区分及び表記は、長野県埋蔵文化財センターの遺跡調査に用いる中世の土器、陶器、磁器等の「各形態消長表」に準拠した。したがって「中世Ⅰ期」は12世紀代前半に始まり、13世紀を経て、14世紀前半過ぎまでとする。「中世Ⅱ期」は14世紀末から15世紀、16世紀を経て、17世紀初頭までとし、以降近代に入るわけである。他の中世各時代の歴史的事項と対比して参考にされたい。（林）

(1) 掘立柱建物第1号址（第172図）

第Ⅱ調査区の中央グリッド8・7－シ・ス・ソに位置し、東西棟の桁行1227cm、梁行488mの5間×2間の建物址であるが、3間×2間の総柱式建物（主屋）の東に2間×2間の側柱式建物（副屋）が付設された形で、主軸はN-88°-Eを示す。副屋は桁梁行500cmを測る正方形プランで北寄りには一辺2.2mの隅丸正方形て深さ20～25cmの第1号竪穴状遺構が掘り込まれている。床面には薄く炭化物が見られ、竪穴の南縁部には焼土塊7があり、西側床面に焼土塊6があり工作場と思われた。主屋の3間2間の建物は、桁行柱間が230cm、梁行で300cmを測り、6 m²の方形区が6区あり、居住的機能をもつものと推定される。柱穴径は15～30cmで細い。出土遺物は竪穴状遺構底面から大型磨製石鏃1点、白瓷片1点、灰釉碗1点、土師坏片1点、常滑焼甕片1点である。中世Ⅰ期前半に処属する建物址と見られる。竪穴状遺構内から鉄滓粒が検出された。

(2) 掘立柱建物第2号址（第172図）

本址は第1号址の東側に接した南北棟の建物（主軸N-3°-W）2間×1間の長方形側柱式である。規模は桁行821cm、梁行430cmを測る。内部の北寄りには第2号竪穴状遺構が掘られている。2.4×2.9mの隅丸方形に近いプランで掘り込みは10cm内外と浅い。形態上第1号竪穴状遺構と同じであり、機能的にも同様のものであろう。柱穴径は15～50cmとばらつきがある。深さは30～65cmである。遺物は山茶碗片1、土師器坏片1、須恵器甕・坏片各1、天目碗片1が伴出した。また竪穴状遺構から鉄滓粒が多く検出された。中世Ⅰ期後半に属する建物と見られる。

(3) 掘立柱建物第3号址（第172図）

第Ⅱ区のソ・ター9・10グリッドに位置する。方形に近いプランを呈する。桁行530cm、梁行500cmを測り、柱間2間（214-190-103）×2間（302-158）を測り不整である。北側柱は小柱列が複走しているが、補修の柱と思われる。主軸はN-9°-Wを示す。また第22号址と対角的に大きく交錯して切り合っている。

内部北寄りに焼土塊15～17が互いに近接して存在した。山茶碗片1、施釉陶盤片1、白瓷坏片1を出土した。切り合い部分の中央を除く敷地面からは青磁碗片1、山茶碗片1、須恵器坏1が出土した。中世第Ⅰ期前半に属する建物址と見られる。

(4) 掘立柱建物第4号址（第172図）

第4号址は2間×2間の東西棟総柱式建物で、桁行560cm、梁行450cmの方形に近いプランである。主軸はN-83°-Eを示す。桁行は柱間は340-210cm、梁行柱間は240-230cmである。柱穴径は20～30cmで深さは50cm内外である。遺物は土師器坏片、須恵器片数点、青磁鉢片1、山茶碗片1、白瓷捏鉢片1等である。中世Ⅰ期前半のものと推定される。

(5) 掘立柱建物第5号址（第173図）

第1号址の南側に約2mの間隔をもって並行状態で位置する。桁行780cm、梁行380cmの長方形プランを持つ東西棟3間2間の建物で、主軸・棟方向はN-86°-Wを示す。桁行柱間は240-300-240cmと中央が広い。梁行柱間は200-180cmである。P_3・P_4・P_7・P_8の空間には焼土5が、P_7・P_8・$P_{11}P_{12}$の空間には焼土2がある。また建物外となるがP_8の北東には焼土3がある。柱穴は径50cmの大きいものもあるが、径30cm程度の柱穴が基本的に使われている。柱穴の深さは25～60cmである。出土遺物は青磁碗片2点、宋銭6点（皇宋通宝、天聖元宝、元宝通宝）であった。なお実測図中、本址中央に縦に6つ並んだ柱穴は、方向がN-1°-Eとなり本址とは関係のない柱列である。この柱列が本址を南北の各建物に分ける塀か垣根とも考え、本址周辺を詳細に調査したが関連づけられる柱穴等無く、本址とは別時期のものであると判断した。

(6) 掘立柱建物第6号址（第173図）

第Ⅱ調査区の南部グリッド、ト・ナー3・4グリッドから検出された2間×2間の方形プランの建物で、東側妻幅3m内外の下屋を付設し、更に南側壁に沿って幅70cm内外の庇を付設した構造である。主軸はN-75°-Eを示す。主屋東部に焼土塊が検出され、須恵器、土師器数点および施釉陶器盤破片が出土した。中世第Ⅱ期後半の建物址であろう。

(7) 掘立柱建物第7号址（第173図）

第6号址の西側に接し位置する方形プランの建物で、桁、梁行共に480cmを測る側柱式建物で、南側に沿って

幅80cmの100cmの庇が付設されている。主軸はN-77°-Eを示す。柱数は密で太さ、深さは不整である。遺物は土師器甕破片、施釉陶器鉢破片1が出土した。中世第II期末葉の建物と見られる。

(8) 掘立柱建物第8号址（第173図）

平安時代竪穴住居址の北部へ検出された桁行760cm、梁行540cmの南北棟の長方形側柱式建物である。主軸はN-13°-Wを示す。柱間が520cm・260cm、160cmと不整である。1間2mとする2間3間の規模の建物と思われる。中央部北寄りの床面に焼土塊があり、その周辺から青磁碗片および鉄片、土師器甕破片数片が出土した。中世I期前半に処属する建物址と思われる。

(9) 掘立柱建物第9号址（第173図）

第IIb区のチ・ツ・テ－8・9・10グリッドに位置し、北西の隅を第22号址に切られ、東側を第24号址に接する大形の長方形に近いプランを持つ側柱式建物で、桁行760cm、梁行560cmを測る。柱穴の径も20～40cmで不整、柱間も不定であるが、ほぼ3間×2間の、主軸N-10°-Wを示す南北棟の建物と思われる。内部に焼土等は見当らず、須恵器小片や灰釉碗片が10数片及び常滑甕破片1片、宋銭「政和通宝」1点（第184図）を出土した。中世第I期前半の建物址と見られる。

(10) 掘立柱建物第10号址（第174図）

建物址群の最南西端に位置し、中世の断崖造成工事によって、南端部を切断された建物址である。桁行現長810cm、梁行404cmを測る2間×1間の南北棟長方形を呈する側柱式建物と推定される。主軸はN-10°-Wを示す。柱穴は径60～40cm、深さ70～60cmを測り、本建物址群の中では確然とした構造である。柱間は東側柱295、204、320cmで中央の1間が狭い。東部分のP_3に接して元祐通宝2枚が出土した。中世第I期後半の建物址と見られる。

(11) 掘立柱建物第11号址（第174図）

第11号址は側柱が南北に4本ずつ並ぶ4間1間の側柱式建物である。規模は桁行810cm、梁行470cmで、長方形プランである。桁行柱間は西から235-190-200cmと西側1間の間隔がやや広くなっている。主軸はN-89°-Wを示す。柱穴は平面上円形で、径はP_2～P_3が50cmと大きいが、その他の柱穴は30cm内外である。柱穴の深さは35～50cmである。遺物は土師器坏片、古瀬戸灰釉壷片、同天目碗各1片が出土した。中世第II期後半の建物址と思われる。

(12) 掘立柱建物第12号址（第174図）

本址は西側で第18号址と切り合う関係にあるが前後関係は不明である。3間×2間の総柱式建物で、規模は桁行560cm、深さ390cmの長方形プランである。主軸はN-89°-Eでほぼ棟方向が東西である。桁行柱間は西から190-190-180cm、梁行柱間は200-190cmで多少のばらつきはあるものの一定の間隔で柱が建てられている。柱穴は平面形が円形になるものもあるが、隅丸の四角形あるいは五角形を呈するものが多く、やや北西－南東に長くなるよう掘られている。柱穴径は15～45cmだが基本的には20cm内外で、深さは35～60cmである。なおP_{13}～P_{15}は南側に一部付設した庇の束柱である。出土遺物は古瀬戸天目碗3片、灰釉陶碗1片、須恵器水瓶片1が伴った中世II期初頭に処属する建物と見られる。

(13) 掘立柱建物第13号址（第175・184図、PL77・83）

本址は小鍛冶遺構を伴う建物址である。第II調査区の南端、第12号址の東北に接して位置する。規模は桁行940

cm、梁行530cmを測る、東西棟長方形プランの2間×4間の総柱的建物であるが、東半部の二間は束柱が無く、平地式で小鍛冶遺構が設けられていた。西半部2間は田の字形に区切られる。この形態は第1号址及び第2号址と共通する機能空間を示すものかもしれない。建物西半は桁行柱間が西から220-280cmで、梁行柱間が200-260cmとなっている。主軸はN-80°-Eとなる。柱穴径は25cm内外とほぼ一律で深さは20～60cmである。

東半部は410cm×270cmで、第3号竪穴状遺構が、約11m²のこの空間の中央部に設けられている。プランは南北に長い隅丸長方形で2.3×1.7mを測る。深さは25～30cmで中央部が周囲よりやや深くなっている。竪穴状遺構の主軸方向はN-3°-Eを示す。

この第3号竪穴状遺構は内部に多量の炭・灰・焼土が塊状、層状に堆積し、また底面上あるいはやや浮いた状態で縞状片麻岩10個、コートランド岩3個が遺存していた。石の大きさは12～40cm位の大きいな石が多い。また南西部からは泥岩質の砥石1個が底面上で検出された。なお焼土1は焼土下に薄い灰層があり、位置は竪穴状遺構の北東にあり、他の焼土址と同様の薄い焼土層を持つものである。

第3号竪穴状遺構の南西限に接する26cm離れた位置の焼土下に小鍛冶炉体とフイゴ羽口が検出された。炉体は粘土製で規模は56×56cmを測る。炉体の周縁部は断面台形に作られており、南東部で2ケ所途切れていた。両側が途切れて周縁部が残っている箇所の方位は炉の中間からS-62°-Eの方向にあたる。周縁部の幅は南東で9 cm北西で12cm、地上高は南東で3 cm、北西で7.5cmとなっている。炉の内部は椀形で径22×26cm、深さは12cmである。炉体底部粘土は約2 cmと薄い。また内部には底に焼土層が2 cm程の厚さであり、その上部は南東側から黒茶褐色の流れ込み土層が入り、一番上は焼土混じりの土に覆われていた。

炉体内からは粘土製フイゴ羽口が壊れた状態で出土した。送風口部は南東S-62°-Eを向き、北西のフイゴと装着する基部の方がやや高く、傾いた状態で検出された。土層的には一番上の焼土混じりの土の中に含まれる。すべての断片は無く、接合できたのは口端部のみであるが、全長20cm以上、口端部径9 cm、基部径12cm位の羽口であったと思われる。送風孔は径3 cmで、送風口端部には金属が融けて付着している。

この炉体と竪穴状遺構とは小鍛冶作業に伴う遺構であり、本址は小鍛冶工房としての建物であると言うことができる。出土遺物は前述した以外に全面に鉄滓粒が多く検出された。また敷地の西半部から天目碗4片、東半部外側から施釉陶坏片1が出土した。中世第II期前半の建物址と見られる。

⑭ 掘立柱建物第14号址（第176図）

第14号址は第5号址の北側に併行し、南側の第13号址とも併行する関係で位置する。東西棟の長方形、4間×1間の側柱式建物である。桁行780cm、梁行330cmを測る。主軸はN-87°-Eを示す。桁行柱間は西から200-180-200-200cmを測る。柱穴の平面形は円形で径25cm内外、深さは20～30cmである。遺物は土師器・破片各2点、古瀬戸天目片1点を伴った。中世第II期前半の建物址と見られる。

⑮ 掘立柱建物第15号址（第176図）

第II調査区の中央部、グリッド5・6・7－ツ・チ区に検出され、第25号址の南、第7号址の北に位置する。側柱のみの建物と思われ、桁行630cm、梁行370cmの長方形プランである。主軸はN-81°-Eを示す。四隅の柱穴径は20～50cmとばらつきがある。P_1～P_2間には径10～20cmの小ピット列（P_8～P_{20}の13箇）があり、このうちP_{10}とP_{17}の2柱穴は列よりやや北側にずれている。この北側の小柱列は壁体構成用の支柱と考えられる。南側も柱間4箇あって東側には柱痕が無い。式は妻入りを意味していようか。遺物は須恵器片、灰釉陶器片、古瀬戸天目碗片があり、中世II期前半期に属する建物と見られる。

⑯ 掘立柱建物第16号址（第176図）

第Ⅱ調査区の最南西端に検出された。第10号址の北側に位置し、東側は第11号址と切り合う関係にある。側柱式建物と思われ、桁行750cm、梁行は西側571cm、東側638cmと東側がやや広がる方形に近い長方形を呈するが、P_1・P_2・P_3・$P_4$$P_{12}$・$P_{13}$・$P_{14}$・$P_{15}$をもって構成される桁行750cm、梁行380cmの母屋と、この南側に付設されたP_5～P_{10}の柱列をもって構成された下屋を見ることができる。主軸はN-73°-Wを示す。柱穴径は25～45cm。出土遺物は古瀬戸灰釉碗片、常滑甕片各1点である。中世Ⅰ期中葉に属する建物と見られる。

⑰ 掘立柱建物第17号址（第176図）

第1号址の西、第16号址の北、第Ⅱ調査区の最北西端（グリッドコ－8）に位置する。2間×1間の側柱式建物で、桁行は東側616cm、西側532cmと東側が長く、梁行は490cmで変形した方形に近いプランである。主軸はN-8°-Wを示す。桁行柱間は北から300cm前後を測る。南北側は側柱間467cmで中間の柱は無い。柱穴径は25～50cm。青磁鉢片1、古瀬戸天目碗片1、美濃焼盤片1、鉄滓2箇を出土した。中世Ⅱ期前半に属する建物と見られる。

⑱ 掘立柱建物第18号址（第176図）

第18号址は南東部分が調査対象地区外で未発掘であるが、北接する第11号址と同様、東西棟の長方形プラン4間×1間の側柱式建物である。規模は桁行770cm、梁行460cmと桁行全長が第11号址より短い。桁行柱間は南から200-190-190cmである。主軸はN-88°-Wで第11号址とほぼ一致する。柱穴は径20～40cmの間でばらつきがあり、深さは50～70cmで深い掘り込みである。古瀬戸天目碗2片、施釉陶器盤1片が共伴した。中世第Ⅱ期後半の建物址と思われ、第11号址に南接して同時的に存在したと思われる。

⑲ 掘立柱建物第19号址（第176図）

第3号址の西に位置し、第27号址南東隅と本址西側と一部が切り合う。桁行は450cm、梁行は320cmだが北側が広がる変形した長方形プランの小規模建物である。主軸はN-12°-Wを示す。1間×1間の方形建物で、南側に幅150cm内外の庇を付設したプランと思われる。四隅のP_2・P_5の柱穴径は35cm内外に対してP_1・P_7・P_6は20cm内外で細く庇柱に相当すると考えられる。あるいは下屋であるかもしれない。桁行柱間は北が310cm、南が140cmを測る。また建物中央部やや北寄りには比較的大きな焼土13・同14がある。山茶碗片、白磁碗片各1点を出土した。中世Ⅰ期前半期の建物と見られる。

⑳ 掘立柱建物第20号址（第177図）

本址はⅡC調査区の北西端の溝址に臨む位置にある。3間×2間の長方形を呈する建物で、規模は桁行780cm、梁行460cmを測る。主軸はN-3°-Eを示し、南北棟の総柱式建物で、桁行柱間は南から280-230-260cm、梁行柱間は西から250-220cmを測る。一部を第21号址と交錯し、建物址の北東部を切られているためかもしれない。柱穴は平面円形で深さ・径ともに40～50cmを測り、この集落群の中では比較的に確りした建物である。砥石、青磁碗片、施釉陶片口片、灰釉等が共伴出土した。中世第Ⅱ期前半期の建物址と見られる。

㉑ 掘立柱建物第21号址（第177図）

第19号址の北側で建物群の最北端に位置し、第4号址、第20号址とは切り合う関係にある。側柱式建物で桁行700cm、梁行370cmを測り、主軸はN-45°-Wを示す。柱穴は比較的大きく径は30～60cmを測る。北端のP_1が北に張り出すためプランはやや歪む。2間×1間の南北棟の母屋の北側に1間×1間の下屋を付設したものと思われ

る。美濃焼捏鉢片１、灰釉碗片１、須恵器片１が出土した。中世Ⅰ期後半の建物址と見られる。

(22) 掘立柱建物第22号址（第177図）

第２号址の北、第４号址の南に位置し、第３号址、第９号址と切り合う関係にある。桁行690cm、梁行500cmを測る南北棟の長方形プラン（２間×２間）の母屋の東側に幅150cmの庇または下屋を付設した規模で比較的大形の建物ある。主軸はN-55°-Wを示す。建物内の北西に焼土15・16があるが第３号址に伴うとみられ、本址には建物中央北東寄りにある焼土18が伴う。四隅の柱の柱穴径は25～35cmを測る。遺物は灰釉陶片、白瓷坏片、山茶碗片が伴った。中世第Ⅰ期後半の建物と見られる。

(23) 掘立柱建物第23号址（第177図）

第４号址の東、第９号址の北、第４号址の東に並び位置する。プランは南北棟の長方形プランを呈する２間×１間の側柱式建物である。桁行は510cm、梁行全長は350cmを測る。梁行柱間は西から170-180cmを測る。主軸はN-17°-Wを示す。焼土址は２ケ所にあり、焼土８が南寄りに、焼土20が北寄りに位置している。柱穴径は30cm戦後といずれも大き目の柱穴である。遺物は青磁片、灰釉碗片、美濃捏鉢片等が出土した。中世第Ⅰ期後葉の建物址と見られる。

(24) 掘立柱建物第24号址（第177図）

第25号址の北、第28号址の南に位置する。本址は縄文や平安時代竪穴式住居址が東側にあり、そのため必ずしも柱穴の状況が判然としないが、南北棟の２間×３間の側柱式建物と思われるが柱数が整然としない。桁行は630cm、梁行は430cmを測り、主軸はN-19°-Wを示す。焼土址19が建物中央からやや南西寄りの位置にある。柱穴径は20～30cmと径はそろっている。共伴遺物は常滑焼甕、灰釉碗、土師器各１片、美濃捏鉢片が出土した。中世第Ⅰ期中葉の建物址と見られる。

(25) 掘立柱建物第25号址（第178図）

第15号址の北、第24号址の南に位置する。本址プランは台形状にやや歪んでいるが、桁行が497cmと576cm、梁行が368cmと445cmと一律でない。主軸は長軸でとるとN-６°-Wとなり、梁行の短い２間×２間の側柱式建物と思われるが柱間は不整である。P_4とP_9とを棟受柱とすれば南北棟で屋根の両下の幅が異なり、東側が広い片屋根に近い上屋が想定できる。遺物は物茶碗片２、古瀬戸灰釉壷片１、捏鉢片１点が出土した。中世第Ⅰ期中葉の建物址と見られる。

(26) 掘立柱建物第26号址（第178図）

第６号址の北東に位置する。第Ⅱ調査区の東側は以前の水田造成によって中世表面が欠かれており、本址も柱穴下部の位置からの建物想定である。桁行は770cm、梁行は400cmを測る。東西棟の長方形プランであるが平行四辺形に歪んでいる。主軸はN-77°-Eを示す。四隅の柱穴径は25cm前後となっている。遺物は須恵器及び土師器片数点、青磁片１点、古瀬戸灰釉陶１点が出土した。中世第Ⅰ期後半の建物址と見られる。

(27) 掘立柱建物第27号址（第178図）

第１号址の北、第20号址の南に位置する。基本的には桁行700cm、梁行530cmを測る長方形プランだが、やや台形状に歪んだ大型の側柱式建物であって、四隅の柱の間に入る柱穴はP_2とP_7及びP_4とP_{10}が対応する位置にある。P_{12}～P_{14}の３本は建物南西側に付設した庇の柱であろう。主軸はN-48°-Wを示す。柱穴径は20～30cmとほ

ぼ一定の大きさである。建物址の南東隅外側に大きな焼土塊（長径1.5m）があり、この内部の位置から鉄製刀子が出土した。陶器としては白瓷陶片及び古瀬戸灰釉皿破片が出土した。中世第Ⅰ期後半の建物址と見られる。

⑵8　掘立柱建物第28号址（第178図）

第23号址の北東に接して位置し、溝ⅡＣに臨む南岸に位置し第29号址に並ぶ。桁行は690cm、梁行400cmを測る長方形プランの側柱式建物である。主軸はN-80°-Eを示す。建物の北側と南側に平行する柱列P_9～P_{13}とP_{14}～P_{19}は両側にそれぞれ付設された庇と思われ、特に北側は幅２cmの片庇が想定され、溝の用水利用施設としての機能を示すものであろう。柱穴径は25～30cmのものが多い。遺物は熙寧元宝（1068）、青磁碗片各１を伴出した。本址は中世第Ⅰ期後半の建物址と見られる。

⑵9　掘立柱建物第29号址（第178図）

第28号址に東接し、棟方向を同じくして直列し溝ⅡＣに臨む。桁行590cm、梁行460cmを測る長方形プランの側柱式建物である。主軸はN-83°-Eを示す。建物の北側に平行するP_{10}～P_{12}の柱列は庇施設として主屋に付設されたものであろう。前期第28号址と同規模で２間×１間様の建物であるが、柱間も柱位置も不整で、柱は全体に細く、粗雑な建物と思われる。古瀬戸灰釉碗、白瓷坏破片各１を出土した。南隣りのニ－10グリッドから土師器片、須恵器片数点、天目片１点が出土しているが、下層に重層した他の遺構があり把握でき得なかった。本址は中世第Ⅰ期後半の建物と見られる。

以上、第Ⅱ調査区内で発掘調査された掘立柱式建物29棟を個別に詳述したが、ここで最も課題とする年代別棟数についてまとめてみたい。年代決定については主として、建物敷地内から検出された土器、陶器、貨幣等の生産年代を基準として、棟毎に検討し判別したものである。年代別棟数は次のような状況を示している。

①　中世第Ⅰ期初頭（数字は建物址番号を示す。）

１、４、５、12（号址）の計４棟

②　中世第Ⅰ期中葉

２、３、６、７、８、９、20、23、24、25（号址）の計10棟

③　中世第Ⅰ期後葉

10、13、19、21、26、38、29（号址）の計７棟

④　中世第Ⅱ期前葉

11、14、15、16、17、18、22（号址）の計８棟

以上４期分類でも平均７棟弱であるが、時期により消長があり、13世紀に急激に増加する。その他、建物の形態、規模等検討を要することが多く、時間が少ないので、ここでは調査を通じて感触したことを記し、後日これを仮説として、諸側面から検討を加えていきたい。以下この点につき項目的に列挙しておこう。

〔柱穴配置形態について〕

①　総柱式建物は中世Ⅰ期前葉の時期に集中する。これは古代末期に盛行する大形の総柱式建物の系列を引くものと考えられ、加えて２間×３間の長方形プランを基準として設計されているように感じられる。

②　側柱式建物は、中世Ⅰ期後半に長方形が多く、次のⅡ期に入ると方形プランに変わっていき、形・規模が拡大していく傾向がある。

③　棟方向は時期により斉一性が認められる。中世Ⅰ期初頭は東西方向に統一され、それ以後、同後葉になると南北棟に統一されていく傾向となる。

④　建物の附属施設、例えば庇・廂、あるいは下屋または縁側等の束柱的なものの認められる建物は９棟あり、

その内6棟は中世Ⅰ期後半に当たる。

⑤ ④と関連する建物の機能についてであるが、検出の過程を通じて、特に焼土塊を伴う建物が多くあり、囲炉裏・置き竈(かまど)・蹈鞴(たたら)等の址とも想定され、工房の可能性が濃いと思われた。特に竪穴状遺構を内設するものが3棟あり、その機能が課題とされてきたが、第13号址の小鍛冶遺構が検出されるに及び、鍛鉄工房であることが明らかになった。また付設されている総柱式建物も生活的機能をもつものと想定された。しかし側柱式の長方形のもの、加えて方形大形のものの機能は判然としない。しかし建物の周囲の溝、切岸遺構の位置関係、館郭としての位置等から充分に検討を加える必要がある。 (林)

2. 溝 状 遺 構

発掘区全域にわたって溝状遺構が存在する。このうち発掘によって検出できたII区の状況を中心に、発掘対象外の第Ⅰ区・第Ⅲ区については、観察し得た事象についてその大要を述べよう。(第92図)

溝第II址(第179～181図、PL79・80)

第II区、第II層の下層において長方形区画の周縁、すなわち南端－東端－北端をほぼ直線状に、コの字を呈し走る溝の存在が明らかになった。第Ⅲ区の丘陵の長軸稜線に沿って南下してきた溝は、第II区南端で直角に折れ、直線状に東進(b部)すると32cmの地点で北方に向って直角に屈曲し、直進(a部)すること36m地点でさらに直角に屈曲し、ほぼ直線状に西進(c部)すること約60m地点でやや南に曲り、さらに35cm直進し西縁の断崖遺構に到達し流下している。a部は、現在も「新井」水路として活用されており、幅1.3mのU字管が埋設されているため旧溝は撹乱されて調査不能であるが、昭和30年の市道丸山線拡幅工事の折、旧水路にコンクリート製U字管を埋設した際に縄文土器が多く出土し、特に人面をレリーフした石匙が出土したことは知られている(別掲)。

b部への屈曲点から現水路は北に直進し2m余で暗渠となり、地下へ約3mの滝となって流下していた。この工事の年時は不詳であるが、伝聞によれば20世紀初頭頃と思われる。したがって嘉永4年の新井開設当時の水路は、c部から屈曲して西方へ直進し25mの地点で直角に北方へ屈曲し第Ⅰ区を横断して直進していたことが、旧制土地台帳の水路(青線)図に明記されている。

以下、各溝址ことに述べよう。

(1) 溝 址 II a (第179図)

前述のとおり1851年新設の新井筋は、旧寺井筋水路を若干拡幅して使用し、その址1955年に至って丸山線道路の拡幅工事に伴い大改修を行い、1.5m幅のU字管に変更したが、その際U字管埋設のため水路の拡幅と掘り下げ工事を行った。この掘削により縄文中期土器破片多数と共に、人面のレリーフされた硬砂岩製石匙が出土した。中沢小学校6年生小松文彦君によって採集され、担任松村義也教諭の手を経て、茅野市尖石博物館長宮坂英弐氏に調査を依頼した。この地点は今回の発掘により、的場遺跡第7号竪穴住居址に北接した住居址であることが判明した。

現在は伊那市の上伊那教育会上伊那郷土館に保管されている。今回の発掘調査は現用水路として活用されているためU字管下層は調査不可能で詳細は不明である。

1955年以前の水路は、筆者所有水田内を通過していたため自分で水田管理作業等に携わったので、その状況を知悉している。およそ幅100cmで、ローム層を50cmほど断面U字形に掘り下げた素掘りの溝で、岸は土坡による草地となっていた。鯉や鮒や泥鰌などが泳いでいた。

(2) 溝 址 II b (第179・181図)

発掘調査第II区の南側縁を東方へ向って直進する47m、幅約130cmの内外、深さ50cm内外の規模をもつ溝遺構である。

発掘調査前の地形現況では確認できなかったが、この地点には旧寺井筋水路が走っていたという伝承を、80歳以上の古老を承知している。寺井の開設は記録が無く、廃絶された時期は明治初年頃の水路改修工事と思われる。

本遺跡址の中央稜線に添って蔵沢寺段丘崖下から流出してきたものらしく、b溝地点から南東70mの第Ⅳ区で本溝址の上流部を発見し、溝底から中世陶器を検出した。地層の状況は第Ⅲ区門前遺跡発掘調査により確認、測定することができた（第181図）。位置はⅡb溝最東端のヒ－3グリッドの東壁断面の状況で、自然堆積のソフトローム層（第5層）を掘り溝が作られている。その規模は幅220cm、下底部に硬質黒褐色酸化鉄層厚さ10cmが形成されており、水中堆積層である。これを上面から数えて第4層とすると、その上に第3層が形成されている。色調は青灰色の粘土層厚さ40cmを測り、質は粒子の均一な粘土で砂質が混じっており、水篩により沈澱堆積した地層であることは明瞭であるが、この規模の堆積には滞水可能な堰堤の存在が必要になる。溝Ⅱbに添った北面に高さ2mの土塁が存在するためである。発掘によりその確認を行ったが、緩傾斜の水田面造成により、ハードロームまで深く削平されており、これにより堰堤は消滅されたものと考えられる。

出土遺物は、精査されたグリッド2列のヌ～フ区の第3層内部から、磁器型物、湯呑、染付皿、同徳利、同碗、鉄釉碗、灰釉雪平、鉄釉鉢等の破片が出土している。またその下から灰釉の香炉、碗、鉄釉甕、色絵鉢が出土した。

最下底部の第4層から天目茶碗1点、鉄釉擂鉢胴部片1点が検出された。

(3) 溝　址　Ⅱ　c（第179～181図）

前述のとおり、第Ⅱ区の北端を東西方向に走る長さ85m幅4m内外の、断面浅いU字形を呈する形に硬質ローム層に掘り込まれた溝遺構である。幅がやや不定なのは、西側の肩や壁が第Ⅰ区の水田造成の際、切削されているからである。この溝内に堆積した青灰色粘土層（第3層）の所在によって溝の所在を追跡することができた。

c溝の東端部の断面形により溝の堆積状態を把握し得た（第181図）。ヘ－12グリッドの東壁面に当たるこの断面で、1851年の新井（高見町井）新設に当て旧（溝遺構）をそのまま使用したことが看取される（第181図－1）。

第1、第2層は19世紀初頭に造成された水田で、その際地場（第2層）下に暗褐色混砂礫層（第7層）が残されていたが、これが新堰の底部残痕である。その上に水田が造成されたのは、新堰コースがこの地点から暗渠に変ったため、水路を埋め立てて水田が新設されたことがわかる。1′、2′層はこのために築造された畦である。第3層は青灰色粘土層で厚さ40cm幅260cmを測る。この層は溝址及びこれをそのまま再利用した状況の中で堆積したものと思われ、幅は400cmを越える箇所もあり不同である。第3層下部は褐黒色の砂質粘土層の第4層厚さ20cm内外が、不整合に堆積しており、一部に小溝が存在し、中に第8層及び第9層が堆積している。砂礫が多く含まれ水流下部の堆積である。平面的にみれば粘土層で、溝の流水が粘土を多量に含んでいたことを証明している。本粘土層の下部から陶器が多数検出されている。遺物出土位置は第180図に示されたグリッド記号で示す。本地点から西（下流）へ25mは溝底まで精査できた。なお新井はa溝との接点すなわち屈曲点から西方へ旧水路を23m直進して、ヌ－12グリッドの位置で直角に北方に屈曲し、北進していることが発掘中確認された。19世紀半ばに新設された水路で、幅150cm深さ50cmを測った。この水路の精査部分、前述の東端部から新井屈曲点までの遺物出土状況を述べよう。

東端部をグリッドヘ－10区として西方へ、フ・ヒ・ハ・ノ・ネ・ヌ区までの状況である。前述ヘ区東壁の地層断面第3層を掘削して再利用した新井水路の下部、第4、第9層は褐黒色・暗褐色粘土に砂礫が混り、水路の底部堆積であることを示している。第8層は第3層下底部の幅約4mの中で3小溝が走っており、東溝（e）、中溝（c）、西溝（d）と称する。この下層の第5層は褐青色粘土層で若干砂礫を混じ、厚さ10cm内外の第3層に整合状態で堆積しているが、その一部が切られ、第11層（黒褐色混砂礫粘土層）・第12層（青白色混砂礫粘土層）が不整合状に堆積し、流水状態の中で堆積したこと、つまり河底部であることを示している。これも上層に認められた小溝と軌を一にしているので、東、中、西の小溝とする。なお第3層青灰色粘土層は度々浚渫が行われた痕あり、

ネ－10グリッドから溝の南壁側に崩落防止の横材や、これを支える木製杭が出土している（第180図）。

出土遺物は、東端部中溝のハ・ヒ・フ区の第３層下部から、染付磁器茶碗、碗、徳利、盃、香炉、仏飯器、盃、磁器急須、白磁紅皿等20数点が検出された。また第４、９、10層からは瓦器の蓋、鉄釉陶、緑釉小皿、染付陶茶碗、猪口、壷、南安焼碗等20点が検出された。西小溝からは染付徳利、土瓶、皿、碗、白釉紅皿等破片が検出された。第４層においては東小溝から常滑焼擂鉢、白釉碗、天目茶碗、緑釉皿、鉄釉鉢、皿、白磁碗、灰陶の鉢、瓶、皿等の破片10数点が検出された。また第５層及び（第10～11層）中小溝から黒色土器、白磁碗、鉄釉皿、常滑甕破片、土師器破片、須恵器破片が検出さ、西小溝底部から天目茶碗片、常滑甕破片、黒色土器片各１点が検出された。

なおネ－11グリッドの溝址屈曲点においては、新井と溝ＩＩｂ址の分岐点には自然石10数個を積み石してＩＩｂ址を塞ぎ止めてあった（第180図）、またこの東部ネ－11グリッド内には第３層上半部に径100～150cm 内外の分厚い酸化鉄層が形成されていた。

溝址ＩＩｃのこの分岐点から西方へ約30m 直進し、ソ－14グリッド位置で約45°南方へ屈曲するので、これを中間部と西端部に分ける。中間部においては、第ＩＩ区の耕土置場のため溝址の精査はできず部分調査に終ったので遺物は少ない。この中部のネ－11グリッド東壁溝址断面状況を第181－２図に示した。水田地場層から上は排土により作成されたので、その下層から図示してある。第１層及び第２層は第181－１図と同じ水田畦の土盛りで撹乱層である。第３層は同図－２の続き青灰色粘土層であり、その下層が第４層褐黒色粘土で砂質を多く含み厚さ40cm。これと不整合状態で、青灰色で砂礫の多い粘土層第６層が堆積しており、水成堆積の下部層と思われる。この２層の下層はハードローム層で、若干の凹をもってその間に礫が介在する。本溝址の最低部である。

遺物は第３層下部から鉄釉薬碗、磁器紅皿、染付徳利が、第４層から黒釉碗、第５層から天目碗各１片が出土している。中間部における遺物出土状況（数字は溝区名）を示せば次の通りである。第３層からは施釉陶小皿、碗、徳利、皿等13点（タ～ヌ）、染付茶碗、猪口、磁器佛飯器（ス－11）、染付鉢（マ－13）、輪花碗（ツ－13）、灰釉碗、甕（ツ－15）各１片が出土し、第４層から緑色釉皿、白磁碗、鉄釉瓶（ツ－12）片が各１点出土した。西端部の第３層からは染付皿、茶碗（コ－11）、灰陶皿、青磁碗（ケ－８）、灰陶小皿、鉄（サ－10）、染付瓶、灯明皿片各１が出土し、第４層、第５層から土師器内黒坏・須恵器瓶等の破片５点、山茶碗片１点が検出された。　（林）

３．柱列址遺構（第182図）

調査区第Ｉ区の東端部切岸遺構に接して、これを直角に交わる方向に４列の柱列址が検出された。発掘範囲は道路拡幅用地で、約300m²（30m×10m）であるが、この中に縄文時代竪穴住居址51号址、同53号址、平安時代竪穴住居址第52号住居址及び土壙群が存在するため、これらと重複し、加えて遺物が乏しいため柱穴の確認には困難度を加えた。柱穴の検出に当たっては、柱穴の規模基準を直径、深さ共に30cm として、許容範囲を10cm プラス・マイナスして選定に当たった。その結果判明した柱列址の状況は次のとおりである。

(1) 主　柱　址

切岸縁辺と平行して設けられた段切遺構上に、東西方向に並ぶ４箇の主柱が検出された。

主柱１号址（土壙306）はマ－19グリッドの位置において、段切遺構で厚さ60cm ほど削取られたハードローム層面を、直径130cm 深さ51cm 掘り下げた柱穴である。第52号住居址の北壁と切り合い、周縁はやや乱れるもほぼ楕円形を呈し、西側より常滑焼擂鉢片が検出された。北壁内側に径10cm 深さ50cm の小柱穴２箇が設けられていた。

主柱２号址（土壙307）は主柱２号址の北部210cm に位置し、段切遺構面から41cm 掘り込まれた、径120cm の円形のプランを呈する柱穴であるが、40年前の道路工事により切削が近くまで及び、周辺が乱れていた。底部に径５cm 程の小孔数箇が散在した。

主柱4号址（土壙311）は主柱3号址の西方350cmに位置し、段切面から42cmの深さに掘り込まれた径100cmの円形を呈する直壁の柱穴址で、底部南壁に沿って1箇の小柱穴（径20cm）が設けられている。

以上4箇の主柱穴は、規模の同じ1号址と2号址が370cmの間隔をもって切岸縁辺に並び、3号址と4号址も同規模で、350cmの間隔で相並ぶが、3号址と4号址の間隔は210cmで狭い。このことから主柱1号址と2号址とが組み合わさり、同3号址と4号址とが組み合わさるものと理解できる。この4柱址を基点として4列の柱列址が西方へ延びている。

(2) 柱　列　址

第Ⅰ号柱列址は主柱1号址の位置から直南の方向へ9 mに亘って7本の柱穴址が直列している。柱穴の規模はやや不揃いであるが平均径37cm深さ41cm。柱間は200cmと100cmで占められている。方向は切岸東縁の線に平行している。

第Ⅱ号柱列址は主柱2号址を基点として第1号柱列址と平行しつつ、その西側に250cmの間隔をもって、8 mに亘って南方に延びる柱列址で、西端は第51号竪穴住居址のため不分明である。6本の小柱穴をもって構成され、各柱穴の平均は径39.3cm深さ38cmで、柱間は200cm、150cmが多い。

第Ⅲ号柱列址は主柱3址を基点として、その東側外側から真南方向へ約9 mに亘って6本の小柱穴が直列している。列線は第Ⅱ号柱列址から180cm西側に平行している。小柱穴の規模は平均径37cm深さ29cmを測り、柱間は20cmと1 mが多い。西端は第Ⅰ・Ⅱ址同様、撹乱部があり不分明である。

第Ⅳ号柱列址は主柱4址の西側を基点として、第Ⅲ号柱列址に350cmの間隔をもって平行し、真南方向に直列すると見られるが、3 mで調査区外となるため発掘せず詳細不明である。基点北側からP_{20}～P_{22}と4本の小柱穴が検出された。規模の平均は径28.3cm深さ20.1cmを測る。

以上柱列址について詳細の状況を述べたが、この柱列址は前述したように第Ⅰ柱列址と第Ⅱ柱列址、第Ⅲ柱列址と第Ⅳ柱列址と組合わさることによって、2基の入口付設（門）と通路（塀）と見做すことができる。

第Ⅰ号柱列址と第Ⅱ号柱列址を入口A、第Ⅲ号柱列址と第Ⅳ号柱列址を入口Bと仮称すれば、この2つの入口の関係はどうであろうか。時期的な面では、入口Aは域内から石製風字硯、常滑焼甕、宋銭を出土し、入口Bからは表面採集により天目碗破片が知られるほか、さしたる共伴遺物が認められぬ（発掘範囲が狭い）等の差があり、また路線方向等近似していることなど考慮に入れると、前者は中世第Ⅰ期の後半、後者は中世第Ⅱ期前半期頃に、主郭内部の変容に伴って設置位置が変更移動されたものと考えられる。（林）

4．断　崖　遺　構（第3・4図）

前述のように、当遺跡地の所在する高見原丘陵の基部は、天竜川右岸の最高位段丘（蔵沢寺面）の段丘崖下に形成された幅90m内外の丘陵面の西側と東側及び、丘陵陵線と直角方向に北側を切削し急斜面を持つ切岸を形成することにより一辺80m内外の直線状に四至を区画してある。切削された斜面の状況は次に記したとおりである。

(1) 西　側　断　崖

本丘陵の西側は下間川の浸蝕による自然の段丘崖の斜面である。丘陵面西縁から段丘面内を幅10m内部の線で切削して高さ10mの急斜面（64°）が形成されている。したがって下端部には削取部分幅25m内外の平地が長さ240mに亘って形成されており、帯曲輪状を呈する。その西縁は下間川に面した自然段丘崖で、傾斜角度64°をもって深さ20m内外で川底に達する。西側斜面は谷底からおよそ60°内外の急傾斜で約30m立ち上がり、途中帯曲輪状の施設が整えられている。この古地名は「かぞた」と称されているが、下間川沿岸水田地帯を望む位置にあり、中世「門田」の遺存名と思われる。断崖上縁の第Ⅱ調査区西縁は直線状に土塁の下部が高さ1 m長さ25mに亘って

遺存しており、表面は孟宗竹が密生しているが、その断面下部に版築状の土層が遺存している。尚上縁部の切削時期は縄文時代竪穴住居第１号址及び中世の掘立柱建物址第10号址を土塁構築及び段丘縁切削により切削されていることからみて、中世第１期後半と見做すことができる。

(2) 東 側 断 崖

西側断崖に対応する第Ⅰ・Ⅱ調査区の東側は、西縁から82m の位置において段丘面を深さ４ｍ内外、幅約５ｍ（上辺）～３ｍ（下底）の断面Ｕ字形に掘削し切通し郭の東縁を画するが、その掘削角度は近世に至り門前集落への生活道として活用され、さらに下底部に「寺井」水路が通り、近世に至り数回に亘って道路が拡幅されたため、その工事により本断崖の傾斜面は次第に削取され変更されており、原況を窺うことはできない。第Ⅰ区の東発掘により中世の柱列遺構を検出したが、居館への虎口遺構と思われる遺構側辺まで近代の切削工事が及ぼされており、断崖の原況は現在の切岸線よりさらに10m 程東部に拡がっていたと思われた。

(3) 北 側 断 崖

前述の東及び西切岸の北端部を結び画する北側の断崖遺構で、丘陵陵線に直角に交わる長さ82m の直線状に整形されている。高さは、東断崖の切通し下底部北端の位置において高さ5.5m、傾斜角34°を測るが、東部において基底部より高さ3.5m の位置に腰曲輪状遺構（東西20m×南北10m）が設けられ、その面より２ｍ高くなり斜面は二段に構築されている。ここに立てば西・北・東の低地を広く見おろすことができる。断崖下端部西隅に古く的場八幡宮が奉斉されており、的場家屋敷神との伝承があり、現在も同家により祀られている。

(4) 南 側 断 崖

調査区第Ⅱ区と第Ⅲ区の境界線を延長して西部断崖線に達する直線状で全長82m、高さ1.7m、傾斜角33°を測る断崖遺構である。本丘陵の中軸陵線を横断して切削しているが他の三方に較べ低く、斜面は内面に向って作られており、防備性は極めて弱い。なお溝状遺構ｃが密接平行して設けられている。この断崖線に接した内側は掘立柱建物が密集しているが、外側の第Ⅲ調査区（門前地籍）では掘立柱建物の柱穴はわずか検出されたに過ぎない。この地籍は古来から「とうもん」と呼称され、この一帯は「とうもんまえ」と俗称されている。（林）

５．中世遺構について

以上、本遺跡発掘区内に建設された中世遺構について詳述したが、これを要約してみよう。

高見原丘陵の基部における陵線を中軸にして、まず地形を変えた断崖遺構である。東西両側の段丘崖を切削した急崖状の断崖で、その形状は一辺約80m の方形で約46,000m²の範囲である。西岸の断崖は極めて要害で、下間川渓谷まで30m の急崖である。急崖の中間には帯曲輪状遺構が設けられている。東側断崖は西側断崖線より段丘面内へ約80m の位置で南北に段丘面を切削して、長さ100m の切通しを作っている。北側は段丘中軸に直角に交わる長さ80m の直線状の急崖を作っている。高さは約６ｍで中段に腰曲輪状の施設が設けられている。南側断崖は西側断崖より南へ約80m で、丘陵の中軸陵線と直角に交わり高さ4.5m を測る。段丘面内に断崖線と平行に溝状遺構ｃが作られている。この一辺80m 区画は東西線で中央から分けられ、そこに逆コの字状の溝状遺構の長方形区画が２面設けられている。

このことにより本区画は南北に分けられる。溝状遺構は幅約４ｍ内外、深さ１ｍ内外である。南側の区画（第Ⅱｃ区・Ⅱｂ区）約2,000m²内に掘立柱建物址29棟が群集して検出された。この建物は２間×３間の掘立柱建物を主とし、中世第１期前半から中世第Ⅱ期前半に至る建物址で、これを時期的にみると中世第Ⅰ期初頭から中世第Ⅱ期前半に至る４時期に区分できる。各時期に分類すると１時期平均７棟である。また時期別では最も繁栄している

のは中世第Ⅰ期中葉で10棟、溝址に近く下屋または庇が付けられた建物が多いことなど、これを裏付けていよう。出土遺物も鉄製刀子、青銅器片、砥石などが多いことも、これを裏付けていよう。したがって、この掘立柱建物址群は工房、倉庫、住居址が混在した場所と考えられる。これに関連して第Ⅰ調査区の一部排土工事の中において観察された遺構の中に、一辺60cm内外の方形の掘立柱穴が並列した状態が観察された。また過去における表採資料に刀剣、鉄扇等の武器、青磁碗が認められることから、第Ⅰ区は主郭の存在した可能性が極めて高い。ここは保存地区となったために今後の調査が期待される。また発掘調査された第Ⅰａ区東断崖に接する部分では、直径100cm余の主柱を基準に幅4ｍの柱列址が長さ10mにわたって主殿の方向に向って設けられていることから、館址の入口施設と思われる。この地点は古くから「こぐち」と言いならわされており恐らく虎口に該当すると思われる。(林)

6．出　土　陶　器

(1) 青　　磁

当遺跡から、18点の青磁片が出土している。そのうち1点は国内産である。すべて小破片で器型の全体像の復元できるものは無い。口縁部は5片あり、4片が碗、1片が皿である。他はすべて胴部の破片である。そのうち4片に劃花文が認められる。(表No.1、3、5、12) 外側に蓮弁文が施されるもの6片、他に小破片が器種不明で外側の紋様のあるものが1片ある。輪花皿 (表No.12) の口縁部から胴下半部にかけてのものが1片あり推定径12cm位の口縁部が端反の輪花皿で、内面口縁下に三條の波線、その下に片切彫の紋様があるが何であるかは不明である。

尚本片だけが他の破片と胎土、釉調が異る。今回の調査では高台の出土は無い。中国での製作年代は13～14世紀であるが碗、皿の破片の1部に15世紀のものが含まれる可能性がある。

(2) 黒釉天目茶碗

今回の調査によって出土した黒釉天目茶碗は44箇である。高台から口縁部まで連続したものは1点のみである。(表No.14・図183－1) 器高6.5m、口径11.8cm (推定)、高台径4.7cmである。体部下方はやや直線的で、上方の立ち上がりは丸味を帯び立上り、口唇部はほぼ直立し、端部は外反しない。高台は削り出し内反り高台で、高台内の掘り込みは浅い。高台及びその周辺にサビ釉が施されている。(表No.13・図183－2) 耕作土中より出土で、高台部を欠く、口径は推定11cm前後で、体部下方はやや直線的で、上方の立上りは直線的で、口唇部はほぼ直立し、端部内側は丸味を帯びて端部に続く。(表No.16・図183－3) 高台部欠く、口径は、推定11.8cm前後で、体部下方はやや外に傾斜し直線的に立上り、口唇部は直線的に立上りわずかに外に傾く。高台周辺は露胎で化粧がけは施されていない。釉は二次的に火を受け、ひどく荒れている。(表No.15・図183－4) 5列トレンチ・クーコⅠ層出土で、高台部を欠く、口径は、推定11.7cm前後で、体部下方はやや直線的で、口唇部は直立し、わずかに外反する。高台周辺は露胎である。他に高台脇露胎のもの10片がある。高台は、2箇あり、削り出し内反り高台で、周辺の1部に糸切痕が残り、端部は丸味を帯びてろくろ目がわずかに残り、使用によるすれが顕著である。他に1箇3分の1位の削り出し輪高台がある。共に瀬戸、美濃産の茶碗で製作年代は15世紀である。

(3) 片　口　鉢

片口鉢は、高台から立上り部の破片が2箇出土しており、高台の型状を窺い知るものは1箇で、それも高台端部がわずかに残るもので、全体像は不明であるが、付高台で、三角型となり、わずかに外反する。施釉はされていない。内側底部は相当使用されたようで滑らかである。共に東濃産の12世紀以降のものと感じられる。

(4) 茶　　碗 (表No.108・109、図183－5・6)

山茶碗は、二箇出土している。(表No.108・出土No.1416) 高台の1部から胴部まで破片で、全体の器型は不明であ

る。底部は、糸切痕で三角型の付高台を付け、高台内をわずかに調整しており、高台端部に不規則な圧痕が残っている。立上りは、わずかに丸味を付け、ゆるやかに立上っていく。内外共無釉で、調整は余りよくない。

底部から胴下半部の破片で、全体の器型は不明である。底部の径は4.1cm、糸切底で、無調整ののまま残されており高台は付かない。立上りは、外反し1 cm前後で丸味を付けて内側へ立上り、再び外反する。無釉で、内外面共簡単な調整をしている。胎土は細かく硬く焼かれている。12～13世紀東濃産と考えられる。

(5) 鉄釉画花文瓶子（表No.194・出土No.1284）

頸端部から肩にかけての破片で、文様は、頸部との付け根に剣先文の1部が残っている。肩にかけて唐草文様が付けられている。器面全体に鉄釉が施される考えられ、肩部は光沢のある飴釉が美しくかけられている。古瀬戸中期様式の典型的な瓶子で、伊那谷では数少ない資料である。13世紀の瀬戸産である。

(6) 常滑系大壺（出土No.20・1301・1395・1406・1428他）

当遺跡から6片が出土している。口縁部、肩と胴下半部で底部の出土は無い。いずれの破片も部分的で全体の器型を復元できるものは無い。口縁部は折返し口縁で、口端部は欠損している。肩部はくの字にゆるく折れるもので降灰による自然釉が薄く掛かっている。器面は赤褐色に発色している。他の4片は、胴から胴下半部のものである。

1部残る口縁部の型態よりみて15世紀頃のものと考えられる。

(7) 施釉陶器（出土No.1374・1375・1402・1448・1993・図183－7～12）

鉢と盤の破片が多く出土している。内面は、黄緑色の灰釉が全面にかかり、外面は、胴部中央まで釉がかかり、下半部は無釉となるものが多い。三足のつまみ状の足の付く盤の底部及び足まで明黄緑色の灰釉が全面にかけられているものが1点ある。

(8) 近世陶磁器、瓦器

溝状遺構から多くの陶磁器が出土している。炉明皿（図183－14･15）は、油皿と受皿があり、内面と口縁部まで釉が掛けられており、推定口径10cm前後のものである。黒釉陶器碗で畳付部分を残し全面に黒釉を施したもので、畳付の無釉のところに押印のある破片がある。やや小振りの黒釉陶器碗で、全体が薄作りで、高台脇、高台内は無釉で、塗金（ときん）高台の小碗が1点ある（図183－17）。他に、皿、鉢、土瓶、擂鉢がある。

瓦器で蓋の破片の1部が1点あり、つまみが欠損しており、径は、推定9.5cmのものが1点ある（図183－16）。

仏餉具（図183－18）、溝状遺構Ⅲから1点出土しており、台部と、口縁部が欠損しており、全面に淡緑色の灰釉が掛けられている。

瓶掛けの口縁部の小破片が1点あり、全面に緑釉が掛けられるもので、瀬戸の勇右衛門窯の製品と考えられる。

磁器は、白磁と染付が出土している。染付は（図183－19・20）、碗、徳利、皿、そば猪口などが出土している。白磁は、紅皿が1点出土している。赤絵の茶碗が1点門前遺跡から出土している。陶器類は、美濃、瀬戸、染付は伊万里、瀬戸産とおもわれ、18～19世紀のものである。（木　下）

第Ⅴ章　総　　括

第１節　縄文時代中期の集落について

発掘調査区第Ⅱ区・第Ⅲａ区の南北40m東西75mのおよそ3,000㎡の区域内に検出された縄文中期の竪穴住居址群は、中央広場直径40mの円形の空間を中心に、その周囲幅30m程の帯状に環形を呈して展開し、その竪穴住居址数61軒を数える(第７図、ＰＬ２)。

これを時期別にみると、中葉Ⅰ期は１軒であるが、隣は中世の断崖工事で消滅したと思われる。中葉Ⅱ期は４軒と増し、円形集落址の北隅に位置する。中葉Ⅲ期は２軒を１群とし４軒を数え、群間３ｍでほぼ円弧状に展開する。中葉Ⅳ期は２軒を１群として計３群(６軒)を数え、長さ25mの間に円弧状に展開する。中葉Ⅴ期は２軒であるが棟間は30mで群を作らない。中葉Ⅵ期は２軒を１群とし計２群(４軒)を数え、各棟の距離３ｍで近接しながら円弧状に展開する。中期後葉Ⅰ期は３軒１群で２群(計６軒)。各棟間は10～15mで中央広場の内側に列状に展開する。中期後葉Ⅱ期は３軒で１群として５群を数え計16軒、棟間７ｍで住居址帯の中軸線及び内側線と２列に展開する。中期後葉Ⅲ期は２ないし３軒を１群として５群(計17軒)。中期後葉Ⅳ期は２軒を１群とし２群(計４軒)、住居址帯の内側に小さく展開する。以上が住居址群の状況であるが、円形の中央広場は住居址群建設の期間を通じて意識されていたようである。

以上のように観て来ると、中期中葉Ⅰ期に始まる本遺跡の集落の形成は、徐々に軒数を増し、組織化されて来て、中葉Ⅳ期に至り盛期を迎えるが、中葉Ⅴ・Ⅵ期は過疎化して行く。そして後葉は爆発的に増加し、そのⅢ期には最盛期となるがⅣ期には急激に過疎化する。集落形態は当初２～３軒の群で、南方に開口する円形であるが、次第に拡大して円弧状を呈するようになり、中葉Ⅴ期には各住居址が孤立化して行くようになる。やがて後葉Ⅱ期に至ると住居址数が急増し、中葉Ⅴ期の８倍以上に爆発的に増加している。完全な環状集落を形成するが後葉末期になると著しい過疎化現象を示している。これに対応して環状集落の形態も縮まり、中央広場を保持して行こうとする傾向がみえる。この段階で的場中期の集落は消滅し、引き続き縄文後期の時期には、この広場を中心に大型の環状列石遺構が形成されるようになる。

以上この集落の発展経過の大要について述べたが、今後これをアプローチとして詳細な資料分析により、この実態について検討を進めたい。また住居址別の内部規模や付属遺構、遺物のあり方も整理検討し、住人の生活形態や集落のあり方を解明する必要がある。また集落の中央広場は土壙群が密集して充塡されているように見え、その数200基以上を数える。このような例は本郡においても伊那市月見松、飯島町山溝など縄文中期の大集落の中心部にも認められており、ほとんど墓域として占地されているようであるが、本例の場合はどうであろうか。今後、土壙の分類及び特定化を通じて墓壙として詳しい検討を行いたい。　　(林)

第２節　配　石　遺　構

第Ⅱ調査区全域5,000㎡から検出された環状配石址は極めて大規模なもので、配石址の外縁の径75m、半径(南北方向)40mである。ただしこの台地の東西の縁は中世居館址の断崖(きりぎし)施設によって幅40mを切削されているので、、原状は直径80m～90mと推定され、縄文時代中期中葉から後葉末期に至る時期に造営された環状を呈する竪穴住居址群と重複しており、配石址造営の場所は縄文時代中期中葉の竪穴住居址群の廃絶に伴って、その場所に造営されたもので、造営の時期は中期後葉末と思われる。

配石址の構造は集石、組石、配石、立石、石器配列遺構によって構成され、同心円状に小規模なものから大規模なものへ発展している。各環状配石址の一部には屋外の石囲炉、土器埋設、小型竪穴址、垂玉埋納土壙を伴っているのが特徴である。

本址の類例は駒ヶ根市内では他に２例がある。１つは東伊那地区の青木北遺跡、１つは中沢地区本曽倉の小林(古林)遺跡である。青木北遺跡は高烏谷山麓の扇状地上に造られており、縄文時代後期の典型的なストーンサークルである。この環状列石の中心部西半分は未発掘のまま完全に保存された。小林遺跡は縄文時代中期初頭に属する大型の帯状列石で、石斧を埋納する祭祀の遺跡であった。縄文時代中期の初頭の祭祀として学会から注目されている。天竜川の左岸に、これらの大配石遺構が盛行する事象が極めて注目される。

これらの類例を日本全体に求めると、日本列島の中央部から北海道にわたる各地に発見されている。これを造られた時期、縄文中期後葉期に限定して見ることにしよう。まず県内では埴科郡戸倉町須坂の幅田遺跡がある。ここでは縄文時代中期後葉に属する長さ15mの環状配石帯と、これに伴う配石土壙が発見され、11体分の成人骨と敷石住居址、猪・カモシカの破砕焼骨が多量に検出されている。

また本遺跡に近い山梨県都留市の牛石遺跡では中期後葉に属する埋設土器を伴った直径50mの環状配石址が発見されている。ただし同期の住居址は全く検出されていない。このように大型の環状列石が静岡県富士宮市の千居遺跡にある。ここでは径50mを測る環状列石や様々な配石遺構が展開しているが、配石の下部には墓壙が無いので縄文時代中期の大祭祀場して認められた。また同じく静岡県加茂郡河津町の段間遺跡がある。立石・石棒を伴う中期後半期の配石遺構21基が出土しているが、詳報に接し得ない。また縄文時代後期の中空土偶を出土したことで知られる山梨県韮崎市の後田遺跡からは径５m以上の配石址２基が発見され、縄文時代中期の埋甕と中期終末の住居址３軒が検出された。群馬県吾妻郡中之条町の久森遺跡では、縄文中期後半期の住居址群の中に同心円状に配置された環状列石があり、その下層に埋甕を伴ったという。

以上のように縄文中期の環状列石遺構は山梨県、静岡県、長野県に多く存在しており、規模も大型のものが多い。この中に本遺跡の環状配石遺構を置いてみると、日本列島の東北部に出土した屋外配石遺構の中で最も規模の大きなものであり、その構成の内容もダイナミックなものが窺える。その詳細な検討は今後に残された大きな課題であろうが、立石遺構や石器配置遺構とその下部の土壙列帯、土器埋設が組成される配石遺構は他に例を見ないのであるが、縄文人の精神文化を象徴していると考えられる。集石や立石は墓標石として、その下部土壙は遺体埋葬のものとしての意味を持つと考えて良いであろうか。石棒状の立石、石器配列や焼獣骨の埋設等は祭祀としての意味が強いと単純に考えるだけで良いであろうか。

縄文時代中期の文化は、この中部山岳地帯が最も隆盛を極めた状況にあるが、このような祭祀遺跡は当時の人々の精神生活を直接的・具体的に伝える情報が濃厚に含まれているもので、今後の重要な研究課題である。幸い、環状列石の一部は第IIｂ区、第III区の水田下に現状保存されているので今後の検証が期待される。　　(林)

第３節　縄文早期押型文土器文化について

第II･III調査区から検出された押型文土器は当初予想しなかった成果である。出土土器およそ500片余は大別して５種類、細別して10種類に分類された。押型文土器群の全容は極めてダイナミックなもので、縄文時代早期前葉の土器群として時間的に位置付ける上に、時期差を持つものか、同一時期に所属するものか問題であるが、調査者としては、ほぼ同一時期のものとして差し支えないように思われる。土器片の大部分は縄文中期の二次的包含層から出土しているが、門前第16号住居址出土の一括土器67片の検討を経て、その施文構成の状況が類似しているので同一時期の土器文化と見做すことにした。

土器の施文による構成比を比較して見ると、出土口縁部のみでは市松文40%、山形文30%、格子目文16.6%、楕

円文8.3%、撚糸・縄文1.8%、無文1.2%に対して、第16号住居址出土の全土器片の構成比は市松文31.1%、山形文12%、格子目文11%、楕円文8.1%、撚糸・縄文22%、無文14%となる。これは口縁部のみと全破片との材料差があるのに施文種別の順序はほぼ変わりがない。これから見ても第16号住居址の構成比も尊重すべきと思われる。ただし第5類の撚糸・縄文が特に多い点は改めて検討すべきであろう。

したがって本遺跡出土の押型文土器は一定の時期の所産と見て、この上に立って編年上の位置を探ってみよう。

まず本県内の押型文遺跡として著名な塩尻市向陽台、岡谷市樋沢、岡谷市細久保などの施文構成比とは大きく異なっている中で、本例に最も近いのは飯田市立野遺跡のいわゆる立野式土器の構成比である。

このいわゆる立野式土器の分布は南信に密度が高い。近くでは天竜川水系の左岸に伊那市富県の三つ木遺跡、駒ヶ根市東伊那の反目南遺跡があり、右岸では飯島町赤坂、伊那市西春近の細ヶ谷、百駄刈、児塚、辰野町平出の丸山、高森町吉田の大宿、飯田市山本、石子原などがある。この地域の西隣の木曽谷では上松町お宮の森裏、最中上、日義村二本木、稲荷沢が最近発掘され、松本平では塩尻市片岡、竜神平、福沢、八窪、南小谷村林頭などが知られている。

これらの遺跡と本遺跡の土器を比較してみると、施文の様態が最もバラエティーに富み、施文要素の大きさもダイナミックな構成を示しており、押型文土器文化の中では古式な要素が色濃いと見られる。

的場・門前遺跡出土の押型文土器の特色としては、次のことが挙げられる。

1．市松文の施文構成が特にバラエティーに富み、この中で舟形沈文やネガティブ楕円が多彩であって、近畿地方の大川式や神宮寺式の要素が含まれていると認められる。また山形文と舟形沈文が同一土器面に並用され、帯状構成を持つものがある。

2．いわゆる大鼻式に盛行する「枝」回転文数点が認められる。

3．口唇部に施文がある網目状撚糸文が多く存在し、関東地方の井草式土器と近縁性を持つとみられる。

前述の縄文草創期の土器も、この地点から出土しており、それとの関係の追究も今後の大きな課題の一つである。この土器の包含地点は幸い残された第III区の中央部と第IIc区の保存区において、今後検証できることを期待するものである。

(林)

第4節　溝状遺構を配した中世居館跡

調査区の全域(9,200㎡)から、発掘や工事によって出土した中世の豪族の居館跡は、南北200m東西100mの断崖(きりぎし)によって区画され、その内部を南北40m東西80mのコの字形に溝を巡らせた郭を2面並列させ、この北東部に虎口(門)を設けた一辺約80mの方形館跡であることが明らかにされた。この館跡は本県内では全く知られていない谷田包括式館(やちだほうかつしきやかた)の形式を持つ中世豪族の居館跡であることに注目したい。この形式の館跡は神奈川県、東京都、千葉県等の南関東地方に多く、特に鎌倉幕府の中心である鎌倉や三浦半島方面に多い。

谷田包括式館としての本遺跡をみると、まず高見原丘陵の根部に占地し、北東側に現在宮の前地籍と呼ばれる凹地4 haを控え、その東側は新宮川の谷間となり、2段の段丘面と湧水により湿地が形成されている。館跡の西側は比高36mの下間川の急な渓谷となり、対岸は山麓まで幅200mの緩傾斜地形で、小山方形居館跡がある。これらの範囲は東西1㎞南北1㎞を包括し、その中に数基の郭跡(上垣外郭、白山城郭、香花社郭、高見原郭、小山郭)が設けられており、その近くに幾つかの湿地帯を持っている。このように農耕地(谷田)を周囲に巡らせている館は本県内では初見である。また本居館跡では攻撃用の施設は全く見当らず、防御上としても断崖施設だけである。また、見張り機能を持つ櫓施設は東方100m比高20mの段丘崖上(東禅庵)に構築されている。

以上のように丘陵上に居館を築き、これを中心に各丘陵の間の凹地に自然涌水を導き、水田を造成して稲作農耕

を隆盛に導くことが、中世初期の在地領主(武士)の目的であった。これが館の形式となって具体的に表されているのが本遺跡の特色である。この地籍において現在も農耕生活用水として重要視される寺井は中割区共有文書によっても造成が古く年次は不詳であるが、本遺跡の溝址と同一であって中世に造成されたことを示しており、出土遺物もこれを証明している。本館跡の東断崖に設けられた虎口の下は豊富な涌水があり、この畔が江戸時代の御判行(高札場)と定められており、この集落の中心施設であった。

当館跡の溝状遺構に類似したものは箕輪町中箕輪の中位段丘上に発見された堂地遺跡がある。ここでは昭和48年、中央道の造成工事によって方形の溝状遺構が発見された。この遺構は深沢川の谷に面した段丘端上にあって、東西約46m南北33mの規模を持つ長方形区画で、幅1.5m深さ50cmを測る。この区画内から掘立柱建物址2棟、溝より外側に20棟の存在が確認された。共伴した遺物から平安時代末期の溝状遺構で中世初頭に発生する方形館跡の祖形として重視されている。また段丘端を利用した方形館跡には県史跡に指定された箕輪町東箕輪、上の平遺跡及び下伊那郡松川町舟山城跡があり、地形的・立地的には本遺跡とよく類似している。溝状遺構は最古の城館跡としての特徴を持つ重要な遺構として注目されている。

本遺跡のコの字形を呈する溝状遺構は東西80m南北40mを測り、それが南北に並び郭を形成している。北の郭は主郭、南の郭は副郭であって、この南半部には29棟の掘立柱建物が配置されていた。この建物は13世紀から15世紀前半の時期のものとみられ、大部分が住宅と工房、倉庫などであった。北郭は東端の断崖部(Ⅰa区)を発掘したところ、虎口とみられる柱列址及び石製風字硯や中世陶器を出土し、さらにⅠb区では工事中に一辺60cmの方形掘立柱址数本が発見されていることから、主殿の存在が想定され、本郭としての機能を持つ区画と思われる。本居館跡は水稲耕作地としての谷田(やちだ)を支配するのに最も有利な位置に造営され、館跡を区画する溝遺構は灌漑用水の管理と貯水の機能を発揮していたと見られ、発掘中、溝の周辺に広く滞水の跡と思われる粘土層堆積が存在したのはその痕跡である。

鎌倉時代の初め頃、この段丘上に関東風の最新の形式を持つ城館を構築した主は、果たして何人であろうか。文献上から探ってみると極めて確実性の高い文献に「集古文書」(東京大学資料編纂室蔵)がある。ここには鎌倉幕府下知状案として「神光をして信濃國伊那郡中澤郷の内中曽蔵村三分の一地頭識たらしむべきの事」の記載があり、嘉禄三年(1306年)に神中沢太郎真氏が中沢郷地頭職として中沢郷八ヶ村を統治していたことが記されている。また真氏は承久の乱に出陣し、その戦功により出雲国牛尾庄(島根県大東市須賀)の新補地頭を兼任していた。姓に「神」」を名乗るのは諏訪神社上社祭神、建御名方命の直系の子孫の証しであり、中沢郷は諏訪神社の神領として栄えたこともわかる。

鎌倉幕府成立後、源頼朝は諏訪神社を厚く信仰したので諏訪武士団は幕府の御家人として重用された。したがって彼の住宅である館は鎌倉風の谷田包括館であってもなんら不思議ではなく、むしろ当然のことと思われる。

次に現存する高見城址との関係についてであるが、「中沢村誌」(大正8年刊)には、本遺跡の西北200mにある西城郭を高見城本丸跡とし、その東の外城郭を二の丸としてあるが、西城の地名は江戸時代には無く、明治以後の名称である。この2つの郭は丘陵の一部を切断して堀切とし、現在も「堀」の地名が残されている。なお城主については、応永三年、木曽氏の家臣である倉沢氏の居城と記載しているが、その根拠は希薄である。「駒ヶ根市誌((中世編)」は、この堀形・付近の町割・桝形を重視し、中沢氏の総領の高見氏が、中世末期に諏訪大祝(おおはふり)高遠継宗の弟蓮蓬軒に支配され、築城整備が行われたとしている。この堀切と空堀を郭の周囲に巡らせる築城は16世紀頃の新しい方法であって、市誌の記述の方が史実に即している。さすれば高見城址は本館跡よりは一時代新しい城跡と考えられるのである。

以上のことから的場・門前の居館跡が鎌倉幕府下知状案に記載された中沢氏の居館であったことは明らかに証明されるであろう。それを整理してみよう。

1．居館跡の形態が谷田包括式館であることは地頭職の居城であると見てよい。鎌倉幕府御家人の居館は鎌倉市

や三浦半島に多く現存している。

2．中沢地域の地頭職は中沢真氏であった。本館跡出土の遺物は、この時代の13～15世紀前半までの陶器が主であり、集古文書及び諏訪大祝文書に記載される中沢氏、あるいは中沢高見氏や中沢菅沼氏と、その時期を同じくしていることを重視したい。

3．当居館跡の遺構・遺物が示す14世紀代は、いわゆる南北朝時代であるが、中沢氏は南朝方の諏訪神党として活動し、15世紀半ばもなお信濃国守護(小笠原氏)との対立を示しているが、この時期にこの居館跡は突然に廃絶していることに注意しなければならない。

以上のように発掘された遺構・遺物によって中沢氏の遺跡が明らかにされたことは大きな成果の一つであった。

(林)

第5節　特異な出土品について

まず**旧石器**の黒曜石製木葉形尖頭器(第164図1・4)は、恐らくこの段丘面を覆うローム層上層部に包含されたものであろうが、縄文中期集落址構築の折に移動され二次的な包含層であり、一次的な包含層検出を試みたが確認できなかった。緑色岩製大型打製石斧(第164図11)もハードローム層上部にあったことは確かであるが層を測定できなかったので、今後この確認が最も必要となる。

次に引き続く**縄文時代草創期**の石器として有舌尖頭器(第164図2・7)、爪形掻器(9・10)、曽根形石核(6)や長脚鏃(3)が出土したことは極めて重視しなければならない。

次に**土偶**であるが、出土総数11点を数え、完形品は1点も無くすべて断欠品である。しかしながら第II区テ－12グリッド第III層に包含されていた中空土偶(第162図9)は座像形式の容器形土偶で、他に例を見ず貴重である。中期後葉の作品と見られる点、学会の初見であろう。他はすべて中実土偶で中期の特徴を持つ。また第162図5の土偶は開いた両手に穿孔され、土偶使用の方法を示唆しており、まことに貴重である。

また第162図1(PL61)は大きさにおいて30cm以上の超大型であり上半身欠失が惜しまれる。縄文時代中期中葉の作品と思われる。

次に**垂玉**(第166図11～16、PL67-3)は、硬玉大珠(第162図-15)を除きヒスイを素材とする小型の垂玉であって、原料不足を反映してか素材自体分割され小型化し、縄文後期の作品と見てよい。3点は頸飾りまたは腕飾りと見られ、一括された状態で埋納されたもので、出土した的場土壙153の性格を表明していて興味深い。　(林)

第6節　おわりに

以上、的場・門前遺跡の内5,800㎡にわたる全面の記録保存事業を目的とする発掘調査報告書の記述を終るにあたり、調査実施につき種々御配意いただいた県及び市開発関係者、埋蔵文化財保護行政担当者及び調査員また作業員として発掘に尽力された方々に対して、まず深く御礼を申し上げたい。

報告したとおり、的場・門前遺跡は本県を含めた中部山岳地帯では稀に見る貴重かつ重要な遺跡である。今から数万年前の旧石器時代、次の縄文時代、歴史の中の奈良、平安時代、中世等々の各時代の遺構・遺物が、平面的には密集し、そのうえ立体的には重層しており複雑な構造を極めている。調査団は総力をあげて足かけ2年にわたる発掘調査に尽力し、各時代の住居址群、縄文時代の環状列石、約600基の土壙群、中世の居館跡等を天日の下に露呈させ、膨大な量の土器・石器、古代・中世の陶器を採集・整理し記録保存に努めた。しかし、重層する複雑な遺跡に対して、調査員の不足、調査体制の弱体等のことによって進行する開発工事に対応できず、予算面からも調査技術の面からも限界に直面することがしばしばであった。よって関連工事の水田造成工事を設計変更し保存区を設

けて、原状保存計画を実施した。その面積845㎡で、工事から除外され保存された地区(Ⅰb・Ⅱc・Ⅲb)面積計1,500㎡の包蔵地が現状保存されたことになる。今後、この保存地区の保護について文化財保護行政担当局の特別の配意をお願いしたい。また道路開発によって煙滅したこの遺跡の名を後世に残すために記念碑が建立されるのに当たって碑銘を揮毫された中原市長、遺跡の解説文を揮毫された高坂教育長に対して敬虔な謝意を表するものである。　この報告書が今後、駒ヶ根市民及び研究者の方々によって充分に活用されるよう心からお願いしたい。

(発掘調査団長　林　茂樹)

付　表

1．縄文時代住居址一覧表

住居番号	平面形	主軸方向	規模(m)	炉形態	主柱穴数	埋甕	時期(中期)	備考
的場1	五角形	N-61°-W	4.8×(4.5)	掘炬状石囲炉 (炉石全て抜かれる)	5 (現存4)	正位1 (入口中央)	後葉III	
〃2	円形	N-55°-W	5.6×6.1	掘炬燵状石囲炉	6 (現存4)	正位1 (入口やや右)	後葉II	54住に貼床される 55住を切る 56住に貼床する
〃3	不詳			コ字状石組炉？			(中期)	炉の確認のみ
〃4	変五角形	N-86°-W	4.0×5.0	掘炬燵状石囲炉 (一つを除き炉石抜かれる)	5	正位1 (入口やや右)	後葉III	
〃5	不詳			掘炬燵状石囲炉			不明	炉のみ
〃7	五角形	N-24°-E	5.9×5.3	変五角形石組炉 (炉石半分抜かれる)	5		中葉I	
〃8	隅丸長方形？	N-81°-E	？×3.8	長方形石囲炉 (炉石抜かれるf1)	5		中葉II	後に9住作られる
〃9	円形	古IV-49°-E 新 N-78°-E	4.8×4.5 4.6×4.9	不明 (f2) 楕円形石組炉？(f3)	6？ 5		後葉II 後葉III	古・新住居址 8住より後
〃10	変五角形	N-1°-W	4.8×5.3	不明	6？ (現存4)		後葉III	土壙群に切られるが部分的に土壙上に床
〃11	六角形	N-72°-E	5.2×6.1	掘炬燵状石囲炉	6	正位2 (入口やや右) (縦並び)	後葉III	12、16住を切る 炭化材残る 香炉型土器
〃12	不詳			円形石組炉	(現存1)		後葉I	11住に切られる
〃13	楕円形	N-7°-E	5.4×5.1	不明 (地床炉か石組炉)	6	逆位1 (入口左)	後葉II	14住に貼床される
〃14	不詳			不明			後葉IV	13住に貼床する 一部床面のみ確認
〃15	隅丸方形	N-51°-W	3.6×3.4	円形石組炉 (炉内に土器埋設)	5	なし	後葉II	西側に段差 瘤付土器
〃16	不詳			石組炉	(現存3)		中葉VI	11住に切られる
〃17	隅丸方形	N-60°-E	5.9×5.9	掘炬燵状石囲炉 (炉石全て抜かれる)	6	正位1 (入口中央) (蓋石あり)	後葉III	18住を切る
〃18	六角形？		？×5.3	不明	(現存3)		後葉II	18住に切られる
〃20	変五角形	N-57°-E	6.9×6.2	掘炬燵状石囲炉 (炉石全て抜かれる)	6		後葉III	21住に切られる
〃21	不詳	S-79°-E		方形石囲炉	6		後葉IV	20住を切る
〃22	不詳			掘炬燵状石囲炉			後葉IV	炉の確認のみ 20住の上？
〃23	変五角形 (入口部張り出す)	(入口南西側)	(4.8)×4.8	不明 (土壙に壊される)	5	正位1 (入口右)	後葉II	24住に切られる

的場24	五 角 形	N-69°-E	5.1×4.9	掘炬燵状石囲炉 (炉石一部抜かれる)	6	正位1 (入口右) (蓋石あり)	後葉II	23住を切る 入口付近に石器散らばる
〃25	八 角 形 (円形に近い)	N-13°-E	5.1×5.3	掘炬燵状石囲炉 (炉石全て抜かれる)	6 (現存5)	正位1 (入口中央)	後葉II	26住、27住に切られる
〃26	変五角形	(N-24 °-E)	4.2×4.6	不明 (土壙に崩される)	6	正位1 (入口左)	後葉III	25住を切る
〃27	隅丸方形	古 N-73°-E 新 N-68°-E	4.4×4.0	掘炬燵状石囲炉	古4 新4	正位1新 (入口左)	後葉II	柱建て替えあり 25住、28住を切る
〃28	不整楕円形	S-66°-E	5.2×？	地床炉	4		中葉II	27住に切られる
〃30	五 角 形	N-16°-E	4.9×4.9	掘炬燵状石囲炉 (一つを除き炉石抜かれる)			後葉III	62住を切る
〃31	不詳 (円形？)			不明			不明	床面の一部のみ確認
〃32	不詳	N-6°-W		円形石組炉	6	なし	中葉IV	床面一部のみ残る 62住、63住に切られる
〃33	隅丸方形	N-77°-E	4.5×4.6	掘炬燵状石囲炉	4	現存なし (入口中央にあったか？)	後葉III	37住に貼床される 36住、38住、39住を切る
〃35	不詳			石組炉			中葉IV	炉のみ確認
〃36	五 角 形 (円形に近い)	(入口南西側？)	5.0×？	不明 (土壙に壊される)	古5　新5 (現存4)	埋甕3 (1、2は右3は中央) 逆位2 (炉の手前右)	後葉II	33住、37住に切られる 建て替えあり
〃37	不詳		6.2×？	不明	(現存3？)		後葉III	33住に貼床する 38、39住に切られ貼床される
〃38	五角形？	N-43°-E	？×5.6	円形石組炉	4		後葉III	39住に貼床される 33住に切られる 37住を切る
〃39	不詳	N-45°-E		石組炉	〃		後葉Ⅳ	38住に貼床する 34住に貼床される
〃40	円 形 ？	N-7°-W	？×(4.7)	変四角形石組炉	5		中葉IV	35住、58住と床面同レベル
〃41	不詳			石組炉			不明	存在のみ確認
〃42	不詳			不明			(中葉)	存在のみ確認 43住に切られる
〃43	不詳			不明			(中葉)	存在のみ確認 42住を切る
〃51	楕 円 形	N-15°-E	5.3×5.1	二(三)重石組炉	6		中葉Ⅴ	
〃53	不詳		？×4.8	不明	(現存3？)		中葉Ⅴ	北半のみ確認
〃54	変五角形	(入口南東側)	3.7×4.2	掘炬燵状石囲炉 (一つを除き炉石抜かれる)	6？ (現存4)	正位1 (蓋石あり)	後葉III	2住に貼床する 北側土壙群に切られる
〃55	六 角 形	N-59°-W	？×5.3	地床炉？	5		後葉IV	2･56住に切られる
〃56	楕 円 形	N-50°-W	4.0×.56	不明	5？ (現存4)	正位1 (入口やや右)	後葉II	56住に切られる 2住に貼床される 55住を切る

的場57	不詳			炉			(後葉)	炉のみ確認 土壙270を切る
〃58	不詳	N-2°-W		地床炉？	5 (現存4)		(中葉)	炉と柱穴のみ確認 35・40住と床面同じレベル
〃59	不整五角形	N-7°-E	3.6×3.3	埋甕炉	4	なし	中葉VI	
〃60	不整長楕円形	(入口南東方向？)	(4.0)×2.4	円形石組炉 (炉内に土器埋設)	4 (5)	なし	中葉VI	61住と接する
〃61	不整長楕円形	(入口南方方向？)	(4.9)×3.6	地床炉	4？		中葉VI	南側にくびれ部あり 60住に接する 床面焼かれている
〃62	円　形		4.2(東西)	不明	6？ (現存5)		中葉VI	30住に切れる
〃63	不詳		？×4.2	不明			中葉III	南半のみ残存 32住を切る
門前1	不詳	(入口北西側)	？×4.6	円形石組炉	(現存3)		後葉I	東半のみ調査 16住に貼床する？
〃2	不詳	N-44°-W		円形石組炉	6		中葉V	7・9住に切られる
〃3	隅丸方形	S-76°-E	4.9×4.7	掘炬燵状石囲炉 (炉石全て抜かれる)	4	正位3 (やや右に2つ縦並) (左りに1つ) 逆位1 (炉の右)	後葉II	建替あり 4住に貼床する 入口支柱2あり
〃4	円　形	古 N-23°-W 新 N-24°-W	4.5×4.5	長方形石囲炉	古4 新5		中葉IV 中葉V	3住に貼床される
〃5	円 形 ？			不明			中葉III	西半のみ調査 東半は破壊されている
〃6	六 角 形	N-38°-E	5.8×5.6	五角形石組炉 (一部二重石組)	6		後葉I	ローム マウンド及び土壙に切られる 集石2・貼床する
〃7	隅丸方形？	N-60°-W	(5.6)×5.6	円形石組炉　f3	不明 (現存3？)	正位1 (入口やや右)	後葉II	8・9住より新、14住より古
〃8	長楕円形？	(入口北西側)	？×4.7	石組炉　f2	5 ？		中葉III	7・9・14住より古
〃9	不詳			不明　f1 (地床炉)		正位2	後葉I	
〃10	不詳			不明			不明	壁一部のみ残存
〃11	隅丸方形	N-65°-E	4.3×(4.7)	掘炬燵状石囲炉 (炉石全て抜かれる)	6 (5)	逆位1	後葉II	柱建て替えあり 12住に切られる
〃12	不詳	N-63°-E	5.4×？	掘炬燵状石囲炉 (炉石全て抜かれる)	6？ (現存4)	正位1 (入口中央) (蓋石あり？)	後葉III	11住を切る 北側1/3破壊
〃13	不詳	(入口西側)	？×5.2	掘炬燵状石囲炉 (一つを除き炉石抜かれる)	6 (現存5？)	正位1 (入口やや右か中央)	後葉III	
〃14	不詳			楕円形石組炉		逆位1？ (炉の南東)	後葉III	炉のみ確認 17住の上
〃15	不詳			不明			後葉I	壁、周溝一部のみ残存
〃16	長楕円形？			不明			(早期)	1住に貼床される

門前17	隅丸方形	S-68°-E	6.2×6.3	掘炬燵状石囲炉	4		後葉III	入口部支柱2本 香炉型土器
〃18	円 形 ？			不明	(現存3)		中葉III	建て替えあり 南半のみ確認
〃19	不詳			二重円形石組炉	(現存2)		中葉IV	20住に貼床される
〃20	不詳			不明			後葉IV	一部のみ確認 23住に切られる 19住に貼床する
〃21	隅丸方形？	(入口北西側)	5.5×？	石組炉 (炉石抜かれている)	(現存3)		後葉Ⅳ	23住を切る
〃22	不詳			石組炉			不明	炉のみ確認
〃23	変五角形	(入口西側)	4.6×？	掘炬燵状石囲炉 (炉石一部抜かれる)	5		後葉III	21住に切られる 20住を切る
〃24	不詳			不明			中葉III	一部のみ確認

2．的場・門前遺跡土壙一覧表

（計測値はcm単位）

No.	位置	口径(cm)	底径(cm)	深さ	壁立上巾	平面形	断面形	備考	土器
的場									
1	ク－4	156×143	113×108	45	10～30	円形	鉢状(大)	底部に径30深25cmの小ピットあり。	
2	〃	149×134	109×100	63	20	〃	〃		中葉Ⅰ
3	〃	179×156	144×127	63	18	円形	〃	中層に石１コあり。	後葉Ⅱ
4	ク－5	126×100	79×54	47	27	楕円形	鉢状		
5	〃	88×90	45×48	62	23	円形	〃		
6	ケ－5	220×148	123×106	50	10～50	楕円形	〃	南から北へ低くなる石10コあり。	後葉Ⅳ
7	〃	109×98	80×64	47	4～22	〃	台状	底部東へ寄る。	
8	〃	85×82	58×37	57	18	円形	鉢状		
9	〃	128×82	60×50	46	17	楕円形	〃	土274･275を切る。	
10	ク－6	？×126	62×60	56	32	円形	〃	土14を切る。	
11	欠番								
12	〃								
13	ケ－5	98×90	53×51	34	20	円形	鉢状		
14	ク－6	？×120	74×35	45	30	不明	〃	土10に切られる。	
15	〃	101×77	66×44	5	10～25	五角形	〃		
16	ク－7	118×112	68×54	93	25	円形	〃		後葉Ⅲ
17	ケ－7	180×62	×	13		楕円形	皿状	土348に切られる上部に石４コ。	後葉Ⅰ
18	ケ－4	130×120	102×70	14	14	円形	〃		
19	〃	110×98	70×66	29	20	〃	鉢状		後葉Ⅳ
20	ケ－5	93×70	52×50	39	12	楕円形	〃		
21	〃	96×92	72×69	36	10	円形	〃	上部に石１コあり。	
22	コ－5	106×82	63×50	62	11	楕円形	桶状	底部小ピットに石入る。底部西へ寄る。	
23	ケ－5	100×(85)	70×65	22	13	円形	タライ状	下部に石２コ。	
24	〃	108×91	84×67	22	11	円形	タライ状	石１コ入る。	
25	コ－5	156×120		16		ハート状	皿状		
26	サ－6	127×114	110×98	22	10	円形	桶状		後葉Ⅳ
27	コ－4	93×88	74×71	39	10	円形	〃	石８コ西から流れ込む。	後葉Ⅰ
28	コ－5	(280)×(140)	95×77	42		楕円形	皿状	石２コ入る。	
29	シ－6	161×122	138×100	38	13	〃	タライ状	土部削られている。	
30	シ－5	(154)×(110)	(67)×(56)	86		不明	皿状	土340に上部南削られる。	後葉Ⅲ
31	〃			24		不明	皿状	上部に環状配石址Ⅱの石５コ	
32	サ－5	180×154	153×94	45	18	不整楕円形	タライ状	土342の西。	
33	シ－6	110×？	80×63	49	0～28	楕円形	台状	土394を切る。	
34	ニ－3	141×140	116×116	39	14	円形	タライ状	五角形か	
35	ヌ－3	100×82	73×68	45	13	〃	桶状	〃	
36	〃	106×70	92×57	78(52)	9	長三角形	桶状	石４コあり。土427を切る。	
37	ニ－3	96×80	71×61	110	10	円形	ドラム缶状	五角形か。土45･47を切る。	
38	ニ－3	69×69	55×55	95	7	五角形	〃		
39	〃	125×125	110×115	83	10	円形	〃	下部に石2コ石組、土40を切る。	
40	ニ－4	(230)×187	177×169	91	7～28	五角形	〃	土39に切られる。	
41	〃	103×96	63×58	80	6～33	〃	鉢状	土430を切る。	
42	ネ－3	152×150	121×114	91	0～35	円形	ドラム缶状	８･９住を切る。	中葉Ⅲ
43	ニ－3	？×107	？×87	18	13	円形？	タライ状	土44に切られる。	
44	ナ－3	166×164	138×135	75	14	円形	ドラム缶状	土43を切る。	
45	ニ－3	(140)×116	×70	89	12～38	楕円形	鉢	土37に切られる。土427･429を切る。	
46	ナ－3	91×100	75×70	104	11	円形	ドラム缶状		

（計測値はcm単位）

No.	位置	口径(cm)	底径(cm)	深さ	壁立上巾	平面形	断面形	備考	土器
47	ニ－3	(144)×134	(110)×85	118	12～30	楕円形	〃	土37に切られる。土427を切る。五角形か	
48	ヌ－4	101×85	85×66	89	3～12	〃	〃		
49	ニ－4	62×59	51×47	42	7	五角形	桶状	土430を切る。	中葉IV
50	ヌ－4	142×50	111×33	57	13	楕円形	桶状	上部に石8コ。土430を切る。	
51	〃	?×71	?×56	72	7	〃	〃	土431を切る。土52に切られる。	
52	〃	118×112	102×98	86	10	五角形	ドラム缶状	土51・431を切る。	後葉IV
53	ネ－4	101×76	82×65	58	8	楕円形	桶状	五角形か	
54	ネ－3	113×70	(85)×53	35	3～13	不整楕円形	〃		
55	ノ－3	104×98	88×83	40	9	円形	タライ状		
56	〃	110×107	87×86	35	14	〃	〃		
57	〃	95×64	66×40	52	4～22	五角形	鉢状		
58	ネ－4	(92)×74	?×65	19	5	不整五角形	タライ状	北側一部張り出す。	中葉III
59	〃	74×64	62×52	62	7	五角形	桶状	土61を切る。	
60	ノ－4	72×58	55×44	40	8	楕円形	〃		後葉II
61	ネ－4	165×110	140×85	24	3～28	不整五角形	タライ状	土59に切られる。北側張り出す。	
62	ノ－5	175×151	100×88	60	25～52	五角形	鉢（大）	底部に石7コ。	
63	ノ－4	(140)×99	100×74	34	5～24	五角形	鉢状		
64	ノ－5	96×?	81×?	30	5	円形	桶状	18住に切られる。	
65	ヌ－4	112×87	100×79	63(103)	6	五角形	〃	底部に石8コの石組。南東側別か。	中葉IV
66	ネ－4	125×111	103×97	51	10	〃	桶状(大)	13住・土425を切る。	
67	ネ－5	115×103	105×93	58	6	円形	ドラム缶状	13住を切る。	後葉IV
68	〃	157×147	140×120	84	8～18	〃	〃	〃	中葉I
69	ヌ－5	107×75	75×50	106	9	ハート状	缶状	13住を切る。下部に石8コ	
70	ニ－4	89×70	57×48	61	0～21	円形	鉢状	土77を切り、土77・82に切られる。10住を切る。	
71	ニ－5	83×80	58×51	126	7～22	五角形	ドラム缶状	10住・土70・77を切る。	
72	ニ－4	64×?	48×?	21	5	不明	桶状	10住内	
73	〃	90×84	74×69	94	8	円形	ドラム缶状	10住を切る。	
74	〃	123×96	90×70	81	4	楕円形	〃	〃	
75	ニ－5	95×72	72×58	47	10	楕円形	桶状	10住を切る。土87に切られる。底部に石5コ。	後葉III
76	〃	156×146	109×96	117	5～50	円形	鉢状(大)	下部に石3コ。10住・土83・437を切る。	
77	〃	96×?	×	82	10～35	不明	鉢状	10住を切る。土71・82に切られる。	
78	ネ－5	93×75	73×62	36	8	楕円形	桶状		中葉VI
79	ヌ－5	95×91	84×76	99	10	円形	ドラム缶状	土440を切る。	後葉III
80	〃	102×97	(90)×74	40	3～14	五角形	タライ状	土434に切られる。	中葉IV
81	〃	137×125	70×60	91		楕円形	2段状	下部に石2コ。土440を切る。土83に切られる。	
82	ニ－5	95×89	67×65	99	12	円形	ドラム缶状	10住・土70・77を切る。	
83	〃	100×96	84×84	78	8	〃	〃	10住を切る。下部に石3コ。	
84	ナ－4	88×68	72×59	128	6	楕円形	〃	五角形か。	中葉VI
85	〃	87×83	69×61	37	10	円形	タライ状	10住を切る。	
86	ナ－5	83×81	71×68	75	6	〃	ドラム缶状	土442を切る。	後葉III
87	ニ－5	116×100	95×76	90	10	五角形	〃	10住・土75を切る。土88に切られる。	
88	ナ－5	114×101	83×61	120	5～42	五角形	鉢状	土87を切る。土89に切られる。10住を切る。	
89	ナ－5	76×60	37×30	72		不明	2段状	10住・土88を切る。	
90	ニ－5	?×92	?×56	96	5～29	円形	鉢状(大)	土438・439に切られる。	
91	ハ－7	?×108	?×87	37	12	長三角形?	タライ状	17住に切られる。	

（計測値はcm単位）

No.	位置	口径(cm)	底径(cm)	深さ	壁立上巾	平面形	断面形	備考	土器
92	〃	160×119	140×96	31(25)	10～20	不整楕円形	〃	2基分か。	中葉IV
93	ヒ－7	55×44	44×32	19	7	楕円形	桶状	60住内部	中葉II
94	ハ－7	122×95	100×70	35	12	〃	タライ状		
95	ハ－8	160×126	109×94	104(52)	10～30	〃	ドラム缶状	東側に古土壙あり。	後葉IV
96	ノ－8	145×90	127×71	23～63	10	(楕円形)	桶状	長三角土壙に類する。	
97	ヒ－8	107×72	81×50	40	13	楕円形	〃	60住内部。	後葉II
98	ハ－8	168×141	118×106	86	20	円形	ドラム缶状	60・61住を切る。	
99	ヌ－7	？×96	？×75	78	10	〃	〃	23住を切る。土100に切られる。	後葉II
100	ヌ－7	188×182	175×167	113	10	円形	ドラム缶状	23住・土99を切る。東側角が出る。	
101	ノ－8	252×170	232×166	32	5～13	不整形	タライ状	土102の南	
102	〃	？×130	90×71	46		不明	鉢状？	土103を切る。	
103	〃	200×192	173×160	20	6	楕円形	タライ状	土102に切られる。	後葉II
104	ヌ－8	145×140	129×124	118	8	円形	ドラム缶状	23住を切る。	
105	ネ－9	143×135	125×115	97	8	〃	〃	27住を切る。	
106	ニ－9	161×151	139×134	60	10	五角形	〃	25住を切る。	
107	ヌ－9	94×83	80×65	100	8	円形	〃	25住炉を切る。	
108	欠番								
109	ノ－10	96×90	80×74	35(19)	8	方形	2段状	東が低く西高い。	中葉V
110	ハ－10	117×66	109×57	37	4	長方形	桶状		
111	ヒ－10	84×80	73×72	25	3～9	円形	〃		
112	〃	100×90	91×82	28	5	円形	〃		
113	ヒ－9	115×73	106×62	30	6	楕円形	〃		
114	〃	77×	73×		29	円形	皿状	西側底部に不整形ピット4。底中央に石1コ。	
115	〃	105×95	91×75	71	4～17	五角形	ドラム缶状	土116を切る。	
116	ヒ－8	207×125	196×111	22	4～15	楕円形	タライ状	土115に切られる。	
117	〃	135×103	117×87	25	10	〃	〃	土118を切る。	
118	〃	147×112	129×93	28	10	五角形	〃	土117に切られる。	
119	ヒ－7	104×？	91×(85)	38	10	円形	桶状	土121を切る。	
120	〃	(200)×140	(190×125	28	10	五角形	タライ状	土121の東。土121にかけて底に120×30の溝あり。	
121	〃	？×108	？×93	25	9	楕円形	〃	土119に切られる。	
122	〃	82×60	68×48	27	6	〃	桶状		後葉I
123	〃	153×113	140×105	27	5	五角形	タライ状		
124	フ－7	200×166	160×124	29	10～32	〃？	〃	土125の北	
125	ヒ－6	193×129	165×118	27	10	不整形	〃	土124の南、59住を切る。	
126	〃	162×74	142×63	23～52	4～10	長三角形	桶状	東側が深い。	
127	〃	95×83	70×54	44	14	楕円形	鉢状	周囲に不整形掘り込みあり。	
128	ヒ－5	？ 82	？×65	54	13	楕円形	桶状	第3号竪穴址を切る。	
129	〃	98×82	79×65	43	10	円形	〃	〃	
130	ハ－6		？×110	39	8	楕円形	タライ状	17住に切られる。	
131	ヒ－6	164×63	146×48	36～48	10	長三角形	桶状	第3号竪穴址を切る。西側が深い。	
132	ハ－5	127×118	103×87	59	14	五角形？	〃	第3号竪穴址を切る。南東壁際に花崗岩立石⑪	
133	ノ－5	129×96	94×76	77	5	楕円形	桶状(大)	16住を切る。後期	
134	ヒ－5	92×74	78×61	29	5	〃	タライ状		
135	ヒ－4	150×112	140×82	49	12～32	五角形	〃		
136	ナ－4	？×？	？×68	28		楕円形	2段状	北半失われている。土137に切られる。	
137	〃	137×123	91×76	35	22	円形	鉢状	土138を切る。	
138	〃	84×82	62×56	52	12	〃	桶状	土137に切られる。	
139	〃	106×92	99×86	52	7	〃	〃		
140	ナ－5	95×85	82×75	38	12	〃	〃		中葉III

（計測値は cm 単位）

No.	位 置	口径(cm)	底径(cm)	深 さ	壁立上巾	平 面 形	断 面 形	備 考	土 器
141	〃	？×100	×69	37	18	ハート形	鉢 状		
142	ト－5	126×123	110×109	99	6	円 形	ドラム缶状	土141切る。	
143	ト－4	？×76	？×50	26	10	楕 円 形	鉢 状	中層に石２コ。	後葉III
144	〃	120×80	53×46	55	15	〃	〃	下部に石１コ。	
145	〃	146×128	110×110	44	22	五 角 形	〃		
146	ト－5	112×75	88×54	19	14	楕 円 形	タライ状		
147	ト－4	140×103	120×80	55	23	五 角 形	鉢 状		
148	〃	84×52	14×41	51	10	〃	〃	底西に寄る。	
149	ト－5	68×60	53×54	64	3	円 形	缶 状		後葉III
150	ト－5	67×63	36×35	47	13	円 形	桶 状	土154に切られる。	
151	〃	86×	63×61	26	10	〃	タライ状		中葉III
152	〃	108×90	100×85	91	0～8	〃	ドラム缶状	下部に石組８コ。土153を切る。	後期初
153	テ－5	180×110	170×105	70	8	楕 円 形	桶 状	底でヒスイ玉３出土。土152に切られる。	
154	ト－5	80×78	62×50	63	12	円 形	鉢 状		
155	〃	90×60	×	34		楕 円 形	皿 状		
156	ナ－5	60×60	33×32	44	14	円 形	鉢 状		
157	ナ－4	110×100	70×66	48	36	〃	鉢状(大)		
158	ナ－3	60×47	46×34	25	6	楕 円 形	桶 状		
159	〃	86×73	74×38	51	4～20	ハート状	鉢 状		
160	〃	103×？	80×64	26	8	楕 円 形	タライ状	土162に切られる。	
161	〃	108×91	84×72	75	12	円 形	桶状(大)	石１コあり。	
162	〃	(80)×54	53×34	38	18	楕 円 形	鉢 状		
163	〃	110×88	70×48	58	14	〃	〃		
164	ト－3	90×76	77×64	18		円 形	タライ状		
165	〃	110×83	60×62	41	20	円 形	鉢 状		
166	〃	140×？	(75)×37	33		楕 円 形	鉢 状	土167に切られる。	
167	〃	114×100	70×48	69	14	円 形	桶状(大)	土166を切る。	
168	〃	168×116	112×80	47	30	楕 円 形	タライ状	土169を切る。	
169	〃	？×134	？×80	19	16	〃	〃	土168に切られる。	
170	〃	104×？	75×67	35	20	円 形	鉢 状	東西不明確	
171	ト－2	90×？	82×？	21	0～10	円 形	桶 状	南調査区外	
172	テ－4	90×100	80×87	2	8	〃	タライ状	土173を切る。	
173	〃	148×118	129×82	33	17	不整楕円形	〃	石組有	
174	〃	？×113	80×53	65		楕 円 形	２段状		後葉III
175	〃	115×60		25		〃	皿 状		
176	〃	160×160	135×130	82	13	円 形	ドラム缶状	土190を切る。	後葉III
177	テ－3	104×71		34		ハート状	皿 状		
178	〃	60×62	57×43	43	7	円 形	桶状(小)		
179	〃	104×78		24		楕 円 形	皿 状		
180	欠番								
181	テ－3	72×68		17		円 形	皿 状		
182	テ－2	183×？	153×？	41	14	楕 円 形	タライ状	南側調査区外	
183	テ－3	110×97	110×97	26	0	円 形	〃		
184	〃	77×62	55×39	38	12	楕 円 形	鉢 状		
185	〃	57×58	48×48	74	5	円 形	桶 状		
186	〃	70×53	50×52	63	0～10	楕 円 形	〃	縁に石２コあり。	
187	〃	99×90	83×69	33	10	五 角 形	〃		
188	〃	85×59	71×42	24	7	楕 円 形	タライ状		
189	ツ－4	109×100	88×77	11	12	円 形	〃		
190	テ－4	190×158		30		ハート状	皿 状	土176に切られる。	
191	〃	60×57	53×45	68	4	円 形	缶 状	フク土上層に石	後葉IV
192	ツ－5	145×89	118×70	19		楕 円 形	タライ状		
193	ツ－4	120×100		22		五 角 形	皿 状		

（計測値は cm 単位）

No.	位 置	口径(cm)	底径(cm)	深 さ	壁立上巾	平 面 形	断 面 形	備 考	土 器
的場									
194	テ－5	？×110	？×85	44	14	楕 円 形	タライ状	土195･196に切られる。	
195	〃	93×67	64×43	55	10	〃	桶 状	土194を切る。土196に切られる。	
196	〃	100×83	79×57	65	10	〃	〃	土194･195･197を切る。	
197	〃	？×100	？×60	72	20	〃	鉢 状	土195･196に切られる。	
198	ツ－5	97×89	77×61	28	12	円 形	タライ状	土199に切られる。	
199	チ－5	83×72	63×53	40	10	長 方 形	鉢 状	底部のみ。29住北。土199を切る。	
200	ツ－5	88×62	74×48	16	7	楕 円	タライ状		
201	チ－6	96×53	78×47	33	10	〃	鉢 状		
202	ツ－4	86×50	71×35	24	10	長 方 形	タライ状	29住の東	
203	ツ－3	96×92	62×56	44	20	円 形	鉢 状	土204を切る。	
204	チ－3	140×92				楕 円 形	皿 状	土203に切られる。	
205	タ－6	115×113	115×113	12		円 形	タライ状		晩期
206	チ－6	129×91	97×67	23	11	楕 円 形	〃	土204を切る。	
207	ツ－6	130×100		21		〃	皿 状	焼土粒を含むフク土。	
208	〃	210×120	166×108	36	6～37	〃	タライ状	土207の外側にある。	
209	ツ－5	73×63	57×48	16	9	円 形	〃		
210	〃	132×60	80×48	36	4～20	不整楕円形	鉢 状		
211	テ－6	72×63	49×47	46	10	円 形	桶 状		
212	ト－6	86×52	53×40	51	10	楕 円 形	〃		
213	〃	63×60	51×39	45	8	円 形	〃		
214	〃	105×59	67×47	41	2～20	楕 円 形	鉢 状		
215	テ－6	83×60	70×47	50	6	〃	桶 状		
216	ト－7	111×112	96×80	56	17	円 形	鉢 状	土217に切られる。	中葉IV
217	〃	89×42	59×38	80	13	楕 円 形	缶 状	土216を切る。	
218	ト－6	140×106	120×74	24	22	不整楕円形	皿 状		
219	ト－7	74×54	44×34			楕 円 形			後葉III
220	〃	70×46	49×34	64	7	〃	桶 状		
221	ト－7	70×64	48×44	52	10	円 形	〃		
222	〃	98×92	51×51	49	22	〃	鉢 状		
223	〃	105×109	83×87	123	11	〃	ドラム缶状	土224より古	
224	〃	147×111	131×89	39	10	楕 円 形	タライ状	土223より新	
225	ト－8	95×93	83×77	50	6	隅丸方形	ドラム缶状	北に深さ20cmの掘り込みあり。	
226	〃	120×100	91×73	129	13	楕 円 形	〃		
227	〃	？×78	64×64	70	9	円 形	〃		
228	テ－8	142×104	135×84	80	6	楕 円 形	〃	2基分か	
229	ト－8	100×？	75×57	79	8	〃	〃	土230を切る。土228と切り合い	
230	〃	119×89	92×59	20	12	〃	タライ状	土230に切られる。上部に石1。	中葉II
231	テ－8	100×80	68×59	28	16	〃	〃		
232	〃	166×156	135×136	102	11	円 形	鉢 状	土282に切られる。東側高く西側に低い6コの石あり。	後葉III
233	〃	141×121	91×65	139	32	楕 円 形	〃	土234に切られる。藤内	
234	テ－9	63×53	49×46	44	7	円 形	桶 状	土233を切る。	
235	〃	132×123	90×92	74	2～30	円 形	鉢 状	底部北側に寄る。	
236	チ－7	130×91	83×60	22	20	楕 円 形	皿 状		中葉IV
237	〃	89×78	30×22	44		〃	2 段 状		
238	ツ－7	149×128	114×86	25	24	ハート状	皿 状	後期地床炉か？	
239	ツ－8	152×98	109×73	46	12	楕 円 形	桶 状		
240	チ－6	153×105	103×110	22	10	ハート状	タライ状		
241	欠番								
242	チ－6	164×91	142×69	22	14	不整楕円形	タライ状	土246を切る。	

（計測値は cm 単位）

No.	位 置	口径(cm)	底径(cm)	深 さ	壁立上巾	平 面 形	断 面 形	備 考	土 器
243	〃	128×104	100×83	22	14	三 角 形	〃		
244	〃	73×56	57×40	20	9	楕 円 形	桶 状		
245	タ－7	？×68	？×62						
246	チ－6	90×63	67×45	33	8	楕 円 形	桶 状		
247	タ－7	205×167		56		五 角 形	皿 状	土246・土248・土249に切られる。	
248	〃	106×100	98×100	104	0～18	円 形	ドラム缶状	土247を切り、土壙249に切られる。	
249	〃	150×？	104×104	116	8～30	〃	〃	土247・土248を切る。	
250	チ－7	155×120	114×85	132	17	楕 円 形	ドラム缶状	土251に切られる。	
251	〃	92×88	60×50	89	15	円 形	缶 状		中葉IV
252	〃	140×110	107×85	36	18	ハート状	タライ状	土253に切られる。	
253	〃	？×75	62×58	57	10	円 形	桶 状	土252を切る。	
254	〃	142×129	75×67	101	30	〃	鉢 状	配石址の花崗岩立石⑧フク土斜めに入る。	
255	チ－8	139×102	112×78	69	12	楕 円 形	桶 状	環状配石址IIの花崗岩立石④底部から出土。	
256	テ－5	110×70	79×59	29	10	不整楕円形	〃	上部に石有。	
257	〃	210×167		12		ハート状	皿 状		
258	ツ－6	85×70	67×56	39	11	楕 円 形	タライ状		
259	〃	130×81		9		不整楕円形	皿 状	石１コあり	後葉Ⅰ
260	ツ－7	92×75	80×75	54	15	楕 円 形	台 状	北側袋状となる。	
261	〃	141×125	125×109	24	14	五 角 形	タライ状	縁に２コの石入る。	
262	ツ－8	160×116	80×75	18		楕 円 形	皿 状	柱穴４本に切られる。	
263	ク－3	？×103	？×89	16	6	〃	タライ状	南側調査区外	
264	〃	90×70	64×59	33	8	円 形	桶 状	土265を切る。	
265	〃	114×？	85×76	33	16	〃	鉢 状	土264に切られる。東に土266。	
266	〃	？×120	？×85	42	16	不 明	〃	土265・269の間、古銭出土中世	
267	〃	108×94	93×63	28	12	楕 円 形	〃	土268の南	
268	〃	？×62	？×36	25	10	〃	〃	土267の北	
269	〃	179×179	164×162	46	7	円 形	タライ状	土270を切る。土266の東。下部に石３コ。古銭２枚　中世	
270	〃	？×152	？×126	15	5～28	円形？	皿 状	南側57住炉に壊される。絡条体圧痕文土器、礫縁にあり	早期
271	ケ－4	84×77	68×60	19	9	楕 円 形	桶 状		
272	ケ－3	105×96	71×60	29	18	円 形	鉢 状		
273	ク－4	124×101		26		楕 円 形	皿 状		
274	ク－5	100×90	72×52	42	17	円 形	鉢 状	土９に切られる。	
275	〃	？×110	(70)×63	46	19	〃	〃	〃	
276	ケ－3	161×141	142×126	30	12	〃	タライ状	絡条体圧痕文土器出土	早期
277	コ－4	220×163	195×146	40	16	不 整 形	〃	上部に配石址に伴う配石。４基分か？	
278	ケ－3	184×129	150×99	24	17	楕 円 形	〃		
279	コ－3	200×163	130×127	38	20	五 角 形	〃	土328を切る。	
280	ツ－8	133×124	105×83	143	20	円 形	ドラム缶状	土281を切る。	
281	〃	？×133	？×75	51	29	楕 円 形	鉢 状	土280に切られる。	
282	テ－8	163×124	95×92	130	17	五 角 形	ドラム缶状	土232を切る。境に中期後葉III期土器あり。	
283	〃	151150	126×105	34	13	〃	桶 状	土284に切られる。	
284	ツ－8	103×77	77×62	90	11	楕 円 形	缶 状	土283を切る。	
285	ヘ－5	90×74	70×56	10	7	五 角 形	タライ状		
286	フ－15	140×90	123×72	28	10	楕 円 形	タライ状		
287	ヘ－16	84×70	68×48	11	8	〃	〃		
288	〃	123×75	83×48	62	3～27	〃	鉢 状	土296を切る。	
289	ヘ－17	(120)×(185)		18	8	〃	タライ状	土296に切られる。	

（計測値は cm 単位）

No.	位 置	口径(cm)	底径(cm)	深 さ	壁立上巾	平 面 形	断 面 形	備 考	土 器
290	へ－16	？×103	79×69	39	20	五 角 形	鉢 状	土291の北西。	
291	ホ－16	105×103	85×85	46	9	五角形？	桶 状	土290の南東。	
292	〃	198×87	174×70	28	12	長三角形	タライ状		
293	ホ－17	110×？	80×？	35	4～20	楕 円 形	桶 状	土294の西。	
294	〃	165×140	150×112	25	7～23	不 明	タライ状	土293と土295の間。	
295	〃	140×？	125×？	15	2～20	五 角 形	タライ状	土294の東。	
296	へ－16	219×？	189×127	38	0～26	不整楕円形	〃	土289を切る。土288に切られる。	
297	マ－17	138×112	113×90	15	10	ハート状	〃		
298	ホ－17	92×87		18		円 形	皿 状		
299	マ－18	82×80	63×55	7	13	〃	タライ状		
300	マ－18	119×90	96×70	10	16	楕 円 形	皿 状		中葉IV
301	ホ－18	105×89	69×67	26	9	五 角 形	タライ状		
302	〃	126×65	110×50	10	10	楕 円 形	〃	52住の南西隅。	
303	ホ－19	？×94	？×84	0～8	0～16	〃	皿 状	北側削られ消えている。	
304	マ－19	158×105	137×78	8	10	〃	〃	土305の北。	
305	〃	206×148	152×104	15	24	〃	〃	土304の南。	
306	〃	120×？	100×88	50	10	五角形？	桶状(大)	鹿砦に上部削られる。	
307	〃	150×133	125×117	69	8	円 形	ドラム缶状	〃	後葉II
308	ホ－20	124×117	113×105	(55)	6	〃	(タライ状)	底部に円錐形小ピット多数、石1コ。	
309	ホ－19	86×64	51×38	38	25	楕 円 形	鉢 状	53住内部、上部に石2コ。	
310	へ－20	80×78	56×50	24	8	五 角 形	桶 状	53住内部、石4コの石組あり	
311	ホ－20	110×92	88×73	(43)	10	五角形？	〃	段切に上部削られる。	中葉II
312	へ－20	106×？	84×？	20	3～12	〃	タライ状	南側調査区外	中葉IV
313	欠番								
314	タ－3	108×70	76×26	47	17	隅丸長方形	鉢 状	29住の南西	
315	ソ－3	188×179	150×140	62	20	円 形	ドラム缶状	縁に石2コ	
316	〃	75×35	75×35	30	0	楕 円 形	桶 状		後期
317	〃	83×62	82×62	29	0	〃	〃		
318	〃	(110)×75	(80)×51	32	14	〃	〃	南側調査区外	
319	〃	99×100	76×70	8	13	五 角 形	タライ状		
320	セ－3	206×130	183×100	25	13	不整楕円形	〃		
321	〃	112×82	87×58	43	7～16	楕 円 形	〃		後期
322	〃	×(150)		100	0	(円か楕円)	ドラム缶状	下部に石組。	後葉III
323	ス－3	178×？	11374	36	8～30	楕 円 形	鉢 状	東側不明確。	
324	〃	84×62	50×30	56	22	〃	〃		
325	シ－3			15	8	不 明	タライ状	東側壁の一部と底面のみ。	後期
326	〃			8	6	〃	〃	土325の南東。東側壁と底面のみ	
327	サ－3	185×100	162×92	19	10	不整楕円形	〃	土498に切られる。	
328	コ－3	？×131	？×90	22	15	不 明	〃	土279に切られる。石3コ入る。	
329	〃	152×136	104×106	97	24	円 形	桶状(大)	石9コ入る。土498切る。	
330	〃	164×148	115×118	36	7～40	五 角 形	タライ状	底部に石2コ。	後葉III
331	コ－4	150×150	110×90	57	28	円 形	鉢状(大)		
332	〃	150×120		93		不整楕円形	桶状(大)		
333	シ－3	270×160	250×140	34	8	楕 円 形	タライ状		
334	欠番								
335	サ－3	108×95	86×85	(23)	10	円 形	タライ状		
336	〃	167×135	152×115	18	10	不 整 形	〃	土337を切る。	
337	〃		80×62			楕 円 形		土336に切られ底部のみ。	
338	サ－4	150×114	120×95	20	17	五 角 形	タライ状	土337の北西	
339	シ－4	272×	×	45		不 整 形	皿 状	プラン不明確、底形不整形	

（計測値は cm 単位）

No.	位置	口径(cm)	底径(cm)	深さ	壁立上巾	平面形	断面形	備考	土器
340	シ－5	300×260	70×65	57	125	楕円形	〃	土30・339を切る。土341の南東。	
341	〃	？×182	140×60	52	80	〃	〃	土340の北西。	後期
342	サ－5	342×？	160×？	35	16	〃	タライ状	土31・32の間	
343	〃	114×112	86×66	89	20	円形	桶状(大)	土28を切る。	
344	ソ－5	133×98	99×80	25	15	楕円形	タライ状	底面壁際に溝あり	
345	セ－5	130×108	112×89	23	12	五角形	〃	底に石２コ。	
346	ク－6	202×134	170×104	32	18	楕円形	〃	石１コあり。	
347	ケ－6	87×80	72×61		10	円形		石２コ入る。	
348	ケ－7	152×105	143×95	32	5	ハート状	タライ状	土17を切る。	
349	〃	115×105	71×70	53	25	円形	鉢状(大)		後葉IV
350	ケ－7	93×81	62×40	79	25	五角形	鉢状	１号住内	後期
351	ケ－8	124×98	45×37	64		楕円形	２段状	〃	
352	〃	85×70				五角形	寺		
353	〃	95×90				〃	〃	石３コと台付土器	後葉IV
354	コ－6	76×76	50×45	18	18	円形	〃	４号住内	
355	ケ－6	83×83	43×39	88	14～33	五角形	鉢状	〃	後葉IV
356	ケ－7	65×40		9		楕円形	皿状	上部に配石址石組	
357	コ－7	(137)×(114)	(119)×(102)	37	(10)	円形	タライ状	１住内、底部計測。	
358	コ－8	198×179	(150)×122	60	5～15	楕円形	桶状(大)	２住を切る。上部に集石(石皿１、石14コ)。	後葉IV
359	〃	147×(100)	113×	33	7～20	〃	タライ状	下部に石６コの石組あり。	
360	ケ－8	72×54	62×45	26	5	〃	桶状		
361	ケ－9	148×79	137×69	36	5	〃	タライ状	土162の北西	
362	コ－9	85×58	65×46	26	5	〃	桶状	土161の南東	
363	〃	100×？	67×57	54	16～27	円形		54住を切り、土364に切られる。	
364	〃	？×154	？×122	50	6～15	〃	ドラム缶状	54住・土363を切る。下部に石５コ。	
365	〃	？×154	？×133	50	2～20	不明		54住を切る。土366～368に切られる。	
366	コ－8	99×95	90×92	104	0～10	円形	ドラム缶状	54住・土365・368を切る。	
367	コ－9	？×68	？×56	65	20	〃	〃	土364・365を切り、土368に切られる。	
368	〃	127×119	130×119	83	0～8	〃	〃	土365・367・369・54住を切り土366に切られる。下部に石３コ。	後葉III
369	〃	119×110		64	5～12	楕円形	〃	土368に切られ土370を切る。	後葉IV
370	〃	81×81	62×70	52	3～18	円形	〃	土369に切られる。	
371	サ－9	×	98×68	41		楕円形		底部のみ、土386・391を切る。	
372	シ－6	116×85	90×61	69	13	〃	桶状		中葉IV
373	サ－9	90×87	53×47	85	20	五角形	鉢状	下部に石２コ。	
374	サ－8	？×120	？×110	39	5～27	不明	タライ状	上部に石皿１、はちのす石１を含む８コの石組。土395に切られる。	
375	シ－7		80×60	48	30	〃	鉢状	底部と北の壁のみ。	
376	〃		19280	37		〃	楕円形？	底部のみ。土壙29に切られる。	
377	サ－7	106×？	72×？	43	0～10	楕円形	タライ状	東壁なし	
378	シ－7	80×72	56×49	96	13	円形	ドラム缶状		
379	シ－8	92×98		3		五角形	皿状	土387・398を切る。	
380	ス－4	118×111	80×74	50	17	円形	鉢状		後葉IV
381	ス－3	108×80	65×47	41	20	楕円形	〃		
382	ス－4	91×80	76×61	34	10	〃	桶状		
383	シ－5	206×(180)	106×84	109	75	〃	鉢状	下部に石２コ入る。	
384	サ－9	143×100	？×100	50	0～7	〃	ドラム缶状	土373に切られる。	
385	シ－8	100×89	×	16		〃	皿状	西壁際に溝あり。	後葉III
386	サ－9	133×99	118×65	30	9～25	〃	タライ状	土371に切られる。	

（計測値は cm 単位）

No.	位置	口径(cm)	底径(cm)	深さ	壁立上巾	平面形	断面形	備考	土器
的場									
387	シ－8	200×127	177×90	31	14	不整楕円形	〃	土379に切られる。	後葉Ⅰ
388	ス－4	180×140	144×75	41	0～40	ハート状	鉢状	不整形	晩期
389	ス－5	145×117	110×98	85	17	円形	ドラム缶状	底に石3コ。土495の北。	
390	サ－8	143×？	107×86	4	13～35	楕円形	桶状(大)	2住を切る。	
391	サ－9	？×101	85×65	31	18	〃	〃	土371に切られる。	
392	ス－7	112×103	96×93	15	5	円形	タライ状	2住を切る。土396に切られる。上部にはちのす石1。	
393	シ－7	？×73	？×73	21	0	楕円形	〃	西側不明	中葉Ⅳ
394	シ－6	226×		20		〃	皿状	土404～406を切る。土22に切られる。	
395	サ－9	153×118	121×139	188	5～20	〃	ドラム缶状		後葉Ⅳ
396	サ－8	125×109	84×66	33	5～30	五角形	鉢状(大)		後葉Ⅳ
397	サ－7	105×98	81×60	21	18	楕円形	タライ状	2住・土390を切る。上部に石6コと磨石1。	
398	欠番								
399	サ－8	85×71	81×63	28	0～9	楕円形	タライ状		
400	シ－5	157×120	100×70	50	30	楕円形	鉢状	土383・401に切られる。	
401	シ－6	115×？	70×58	65	25	五角形	〃	土400を切る。	
402	〃	？×123	(100)×88			円形		土403に切られる。	
403	〃	150×60	125×55			〃	2段状	土402を切る。	
404	〃		60×48	42		不明		底部のみ。土406・394に切られる。	
405	ス－6	？×120	？×94	41	24	〃	タライ状	土394に南側切られる。	
406	シ－6	？×112	96×70	48	24	楕円形	鉢状	土404を切る。土394に切られる。	
407	ス－5	111×92	78×66	14	5～25	〃	〃	底部西へ寄る。上部に石1コ。	
408	ス－6	200×164	180×132	42	4～20	〃	タライ状	上部に環状配石址	
409	ソ－6	107×105	39×31	23	7～48	五角形	皿状		
410	〃	111×77	111×62	13	8～42	円形	〃		
411	ソ－7	170×130		54		ハート状	〃		
412	〃	90×88	58×56	49	17	円形	桶状		
413	セ－7	159×90	143×70	30	10	不整形	タライ状		
414	セ－8	(11)×(110)	70×(75)	64	(34)	楕円形	鉢状	土415に切られる。底部計測。	
415	〃	(140)×(80)	86×70	35	(10～40)	〃	〃	土414を切る。 〃	
416	セ－6	220×160	115×80	73	70	ハート状	〃	不整形	
417	セ－7	130×110	96×85	48	35	円形	〃	東側不明確	
418	〃	152×129	144×83	27	6～25	楕円形	タライ状	〃	後葉Ⅰ
419	〃	82×80	47×44	33	18	円形	桶状		
420	ヒ－4	73×70	62×59	19	6	〃	タライ状	12住を切る。	
421	〃	89×71	65×54	50	11	楕円形	桶状	〃	
422	ハ－4	？×122	？×109	31	10	不明	タライ状	16号住を切り、11号住に切られる。	
423	ハ－7	104×103	87×85	25	7	円形	〃	土424の東	
424	〃	？×83	？×65	25	5	楕円形	〃	土423の西	
425	ネ－4	？×94	？×78	54	7	五角形？	桶状(大)	土66に切られる。13住を切る。	
426	ヌ－4	77×74	65×62	42	8	五角形	桶状	13住を切る。	
427	ニ－3			41	10	不明		土36・37・45・428に切られる。	
428	ヌ－3	？×94		36		〃	皿状	土429を切り土45に切られる。	
429	ヌ－4			40		〃	〃	土45・428・430に切られる。	
430	ニ－4	？×124	？×85	20	8～30	不整楕円形	〃	土41・40・50に切られ土429を切る。	
431	ヌ－4	176×？	155×？	30	12	不明	タライ状	土51・52に切られる。	
432	ヌ－5	×85	80×56	56	10	楕円形	桶状	12住を切る。土433に切られる。	
433	〃	79×63	60×50	85	9	〃	缶状	土432・434を切る。	

（計測値は cm 単位）

No.	位置	口径(cm)	底径(cm)	深さ	壁立上巾	平面形	断面形	備考	土器
434	〃	？×65	？×46	66	8	不明	桶状	土80を切り、土433に切られる。	
435	ニ－5	？×135	？×116	53	14	〃	タライ状	10住・土77・81～83に切られる。	
436	〃	(192)×	(165)×(140)	58	15	〃	〃	10住を切り土73・74・76に切られる。	
437	〃	？×149	？×111	85	18	〃	ドラム缶状	石2コ。10住を切り土76に切られる。	
438	〃	99×85	77×67	128	11	円形	〃	10住・土90・439を切る。	
439	〃	179×101	×	95	4～28	楕円形	桶状	10住・土438に切られる。土90を切る。	
440	ヌ－5	？×103	？×61	57		不明	2段状	土79・81に切られる。	
441	ヌ－6	74×73	60×51	35	4～13	五角形	桶状		
442	ヌ－5	105×82	93×67	87	7	楕円形	ドラム缶状	第2号竪穴址を切る。	
443	ネ－6	91×86	78×76	20	7	五角形	タライ状	18住を切る。	
444	ニ－6	94×76	72×55	89	11	楕円形	ドラム缶状	15住を切る。	
445	〃	？×89	？×78	46	7	不明	桶状	土446に切られる。	
446	〃	95×89	82×75	62	9	五角形	〃	土445を切る。	
447	ナ－5	145×94	113×63	77	15	不整楕円形		土140を切る。	
448	〃	120×99	？×82	44	11	五角形	タライ状	土86に切られる。	
449	ニ－5	？×67	？×56	32	6	不明	桶状	10住に切られる。	
450	ナ－6	84×71	67×54	55	8	楕円形	桶状	第4号竪穴址を切る。	
451	〃	67×60	51×50	58	6	五角形	〃	〃	
452	ニ－8	93×83	73×69	53	10	〃	桶状(大)		
453	ネ－8	？×178	？×154	29	12	五角形？	タライ状	24住に切られる。	
454	ヌ－10	108×91	108×91	20	0	楕円形	〃	30住に切られる。	
455	ナ－10	(220)×157	108×85	114	25～68	〃	鉢状	33・37住を切る。土456の南東。	
456	〃	110×？	74×55	114	10	五角形？	桶状	33住を切る。土455の北西。	
457	ヌ－11	95×83	75×57	60	5～16	楕円形	〃	底部南側深い。	
458	ナ－11	82×70	63×48		5	五角形		土459の北東。	
459	〃	171×105	115×80		6～38	楕円形		土458の南西。	
460	〃	96×70	70×57	50	0～34	〃	台状	底部南に寄る。	
461	〃	79×77	74×70	63	3	円形	ドラム缶状	33・36住を切る。	
462	〃	94×？	84×？	36	6	円形？	桶状	36住を切り土463に切られる。	
463	ト－11	194×158	146×136	80	10～30	五角形	ドラム缶状	36住・土462を切る。底は掘り込みで2段となる。	
464	ナ－12	105×83	69×60	27	0～20	楕円形	台状	40住内。土465に切られる。	
465	〃	117×85	121×95	63	-14～0	楕円形	袋状	40住内。土464をきる。	
466	〃	58×53	64×62	62	-7～0	円形	〃		
467	ナ－11	62×47	73×58	62	-5	楕円形	〃		
468	ト－12	120×103	107×79	79	0～23	〃	台状	土469を切る。	
469	〃	？×61	？×61	69	0	〃	桶状(大)	40住を切る。土468に切られる。	
470	ナ－12	98×78	98×78	69	0	五角形	〃	40住内。	
471	テ－13	？×81	？×65	17				土472の北西	
472	テ－12	132×103	122×82	20	40	ハート状	タライ状	石2コ入る。土471の南東	
473	テ－11	73×70	49×47	67	7～14	円形	缶状	土器	
474	テ－10	128×89	67×46	54		楕円形	2段状		
475	〃	85×72	75×63	41	5	〃	桶状		
476	〃	105×96	88×75	68	3～15	〃	ドラム缶状	土器多量	後葉IV
477	ヌ－5	166×？		42	13	不明	タライ状	土69に切られる。13住の入口施設の機能もある。	
478	ニ－6	340×181	？×163	36	6～13	不整形	〃	土479・485に切られる。2基分か。	
479	ニ－7	？×121	？×105	64	13	不明	桶状	土478を切り20住に切られる。壁際底部に溝。	
480	ナ－8	135×85	87×55	46×	18	楕円形	鉢状	38・39を切る。	後葉III～IV

（計測値は cm 単位）

No.	位 置	口径(cm)	底径(cm)	深 さ	壁立上巾	平 面 形	断 面 形	備 考	土 器
481	ニ－7	？×98	？×87	59	5	五角形？	桶 状	土482に切られる。	
482	〃	153×137	133×125	50	10	円 形	ドラム缶状	23住・土481を切る。	
483	ト－7	130×82	48×49	44	19～65	楕 円 形	鉢 状	20住に切られる。	
484	ニ－9	200×164	168×143	94	17	〃	ドラム缶状	26住を切る。底部に石１コ。	
485	ニ－7	136×135	113×106	99	16	円 形	〃	底部に石１コ。	
486	ナ－8	？×96	？×78	24	7	円 形 ？	桶 状	20住に切られる。内結礫。	
487	ト－7	161×110	133×80	150	15				
488	ネ－7	137×113	94×85	63	8～28	楕 円 形	鉢状(大)		中葉Ⅰ
489	〃	121×118	103×100	35	10	五 角 形	タライ状		
490	ノ－7	133×117	116×100	20	10	〃	〃	底部に石４コ石組	
491	ニ－2	165×？		27	7～24	不 明	〃	西半部不明。門前13住を切る。	
492	ト－4	115×108	77×76	48	15	円 形	桶 状	土493を切る。	
493	ト－4	109×？	90×？	26	7	不 明	タライ状	土492に切られる。	
494	ツ－6	109×79	85×52			楕 円 形		北東外に配石石棒	
495	シ－4	118×100	118×99	90	10	円 形	ドラム缶状	南から北へ低くなる石11コあり。内１コ石皿。	
496	シ－7	135×118	36×35	33	30～37	五 角 形	皿 状		
497	欠番								
498	コ－5	146×126	120×96	18	14	楕 円 形	タライ状	土329に切られる。土327を切る。	
499	ケ－7	108×93	76×76	11	13	円 形	〃	２住に切られる。	
500	ケ－8	60×60	47×45	55	7	五 角 形	桶 状		
門前									
1	ヌ－D	186×175	171×162	92	0～10	円 形	ドラム缶状	２住を切る。南西側に不整形掘込。底中央に石２コ。	
2	ノ－A	91×89	76×78	(84)	9	〃	〃	６住・土26・27を切る。	
3	ヌ－C	146×120	105×87	27	20	楕 円 形	タライ状		
4	ネ－D	76×70	70×60	49	-5～11	円 形	台 状	北東側袋状	中葉Ⅳ
5	ヌ－B	120×？	95×？	84	18	楕 円 形	桶状(大)	７住・土42を切る。土６を切る？	
6	ヌ－A	265×154	？×112	86	24	〃	鉢状(大)	７住・土７・39・42を切る。底部に径35深50のピット２あり。	
7	〃	125×82	73×51	36	10	五 角 形	桶 状	土39を切る。土６に切られる。	
8	ニ－B	96×87	79×68	47	2～20	六 角 形	桶 状	梨久保Ｂ式口頸部出土	後葉Ⅰ
9	ヌ－C	？×(162)	？×(143)	16	10	不 明	タライ状	７住に切られる。	
10	〃	117×113	79×82	61	18	円 形	鉢 状	底部に石７コの石組。２住を切る。	
11	〃	？×154	？×144	21	8	不 明	タライ状	７住に切られる。	
12	ニ－B	130×？	94×？	63	24	円 形	鉢 状	西側調査区外	
13	〃	59×49	49×36	60	8	楕 円 形	桶 状		
14	〃	(110)×86	？×67	29	5～12	〃	タライ状		
15	〃	(125)×？		47	10	不 明		西側調査区外。土41を切る。土40に切られる。	
16	ニ－A	？×122	？×105	97	8～29	〃	桶状(大)	〃 土40・41を切る。	
17	ニ－1	142×50	125×43	31	6	長三角形	桶 状		中葉Ⅳ
18	〃	97×85	66×54	(67)	17	楕 円 形	鉢 状	13住を切る？	
19	ネ－A	136×82	120×77	116	10	不整形(円形)	ドラム缶状	底部９コの石。釣手付深鉢、骨出土。	
20	ハ－2	87×71	68×54	12	10	楕 円 形	タライ状		
21	ノ－2	92×86	74×73	44	3～14	円 形	桶 状	下部に石１コ	
22	ニ－2	86×75	65×53	44	7	楕 円 形	桶 状	石８コの石組あり	
23	ネ－1	91×？	80×？	22	17	不 明	鉢 状	12住に切られる。	
24	ハ－A	96×78	80×69	26	3～10	五 角 形	タライ状	10住を切る。	
25	〃	110×106	100×98	(90)	5	円 形	ドラム缶状	10住内。	
26	ノ－A	164×157	155×136	25	10	不 明	タライ状	６住・土27を切る。土２・ローム マウンド土壙に切られる。	

（計測値はcm単位）

No.	位置	口径(cm)	底径(cm)	深さ	壁立上巾	平面形	断面形	備考	土器
27	ノ－B			(29)	(10)	〃	〃	6住を切る。土2・26に切られる。	
28	〃	74×69	47×51	59	10	五角形	桶状	6住内。	
29	〃	80×77	68×67	85	5	円形	ドラム缶状	〃	
30	〃	105×86	90×74	67	3～9	楕円形	桶状	〃	
31	〃	77×60	64×58	53	0～10	五角形	〃	〃	
32	ネ－A	70×66	55×48	20	8	円形	〃		
33	〃	75×60	66×52	22	5	楕円形	〃		
34	ネ－B	78×60	67×52	23	5	〃	〃		
35	ヌ－A	113×103	92×83	46	5～14	五角形	桶状(大)		
36	〃	84×？		42	6	不明	桶状	土37に切られる。	
37	〃	84×68	73×50	44	6～12	五角形	〃	土36を切る。	
38	〃	100×95	86×77	34	9	〃	タライ状		
39	〃			23	5～30	不明	〃	土6・7に切られる。	
40	ニ－A			23		〃	不明	西側調査区外。土15・41をを切る。土16に切られる。	
41	ニ－B	140×？	129×？	36	10	楕円形	タライ状	土15・40に切られる。石3コ入る。	
42	ヌ－B	110×？	85×？	44	6～18	不明	鉢状	住内。土5・43に切られる。	
43	〃	85×75	67×60	56	2～13	六角形	桶状	住内。土42を切る。	
44	〃	109×105	70×81	59	-15～5	不整形	袋状	住居内土壙か。	
45	〃				5	不明	タライ状	土44・7住炉に切られる。	
46	〃	80×64	65×60	57	7	円形	桶状	住内。	
47	ヌ－C	91×84	54×44	62		五角形	2段状	2住内。	
48	ネ－C	？×95		15	9	五角形？	タライ状	4住に切られる。	
49	ネ－D	66×59	72×57	63	-9～5	五角形	袋状	4住内部。	
50	〃	78×64	50×47	35	5～16	〃	鉢状	4住を切る。	
51	ネ－E	75×65	63×61	50	-3～10	円形	台状	東側袋状	
52	〃	66×63	59×51	42	2～8	〃	桶状		
53	〃	91×？	71×？	24	8	〃	タライ状	3住に切られる。	
54	ニ－D	74×66	60×58	61	8	五角形	桶状	1住内部。	
55	ナ－D	(85)×79	？×56	57	3～16	楕円形	〃	16住内部土壙。	
56	Tr2	106×103	98×94	11	3	不整楕円形	皿状	底に焼土9cmあり、石8コ入る。住居炉か。	
57	〃	231×222	208×210	79	5	円形	ドラム缶状	中葉土器多量に出土。藤内II～井戸尻I	中葉V
58	〃	110×？	101×？	48	5	〃	〃	西側調査区外	中葉VI
59	道下	113×110				〃	袋状	縁部に土壙より新しい伏甕あり	
60	〃	184×172	156×137	53	5～20	五角形？	鉢状(大)		
61	〃	98×78	89×74	18	0～8	楕円形	後葉IV期		
62	〃	98×(88)	98×(88)	14	0	円形	タライ状	石1コ入る。	後葉I
63	〃	114×111	114×111	40	0	〃	〃		
64	Tr3	177×150	130×125	52	0～54	楕円形	台状	20住に貼床される。土65を切る。	
65	〃	70×66	60×50	25(45)	7	円形	桶状	土64に切られる。浅いピットに土部削られる。	
66	〃	？×118	？×99	51	7	楕円形	〃	土67に切られる。	中葉VI
67	〃	130×132	128×118	64	-8～12	円形	台状	19住・土66を切る。凹石1コ。	
68	〃	162×115	89×78	69	19～57	楕円形	鉢状	西側調査区外	
69	〃	155×146	144×124	66	10	円形	ドラム缶状	19住を切る。	
70	欠番								
71	欠番								
72	Tr3	113×87	100×74	19	9	楕円形	タライ状		
73	〃	134×127		41	8	不明	〃	北西側調査区外	
74	道下	164×134	142×122	48	10	楕円形	〃		後葉IV

（計測値は cm 単位）

No.	位 置	口径(cm)	底径(cm)	深 さ	壁立上巾	平 面 形	断 面 形	備 考	土 器
75	〃	242×204	242×204	44	0	〃	〃	土76を切る。	後葉IV
76	〃	？×104	？×104	25	0	不 明	桶 状	土75に切られる。東側調査区外	
77	〃	102×90	102×90	30	0	円 形	タライ状		後葉III
78	〃	74×62	56×49	64	6	〃	桶 状		
79	〃	223×172	213×158	11	29	五角形？	タライ状		
80	Tr4	114×112	97×98	28	3～10	五 角 形	〃		後葉IV
81	〃	119×105	104×94	57	6	楕 円 形	桶 状		
82	戸	84×79	64×56	20	2～16	五 角 形	〃	石２コ入る。	
83	〃	84×63	67×56	26	3～10	〃	タライ状		
84	〃	107×？	92×？	30	0～10	不 明	〃	東側破壊。	
85	〃	(120)×？		27	12	〃	〃	22住炉を切る。	
86	〃	120×106	100×70	49	3～30	五 角 形	鉢 状	土器	
87	〃	162×150	140×125	55	2～20	円 形	タライ状	底部に礫２コあり。	
88	〃	161×75	160×72	133	0～5	楕 円 形	桶 状		

3．縄文時代住居址別出土石器一覧表

（上段覆土、下段床面出土）

種別 / 住居	打製石斧	磨製石斧 定角	磨製石斧 蛤刃	磨製石斧 乳棒	石匙	石錘	敲打器	磨石	小型棒状石	凹石	はちのす石	石皿	横刃製石器	石鏃	石錐	その他	計	剝片 硬砂岩	剝片 黒よう石チャート	剝片 緑色岩	剝片 粘板岩泥岩等
的場	2	1											1	2			6	14	22		2
1	2			1		1	1										5	3	15	6	
〃			2	1			1	1				(1)	1				6(1)		3		
2・56	6					1		2					1	1		台石1	12	1	17		3
〃																					
3																		3	5		
〃													1				1	4	4	1	
4	6																6		11		
〃	14	1						2	2	1	(1)		4				24(3)	25	24	5	2
5																					
〃	28	2	4	1		2	1	3	2	3			29		1	チャートナイフ形2	78	100	46	15	3
7	1							1									2	4	2	1	1
〃	10							3		1			2				16	11	17	1	1
8・9	20		1	1			3	8	1				10				44	33	20	9	5
〃	20	1				1	2	4					2			石棒1	31	19	16	4	1
10	9							1		1		1	2			台石1	15	23	14	6	
〃	5	1	1			1		2	1				7				18	10	22	2	1
11	5		1		2		2	6		1		1	3				21	9	17	3	
〃	1							2					4				7	6	11	1	2
12																	2	2			
〃	7		1	1		3		2		1		1	2				18	2	7	2	2
13・14	10			1	1		1	3	1				7		1		25	16	10	2	3
〃	3					2	1	1		2			1	1			11	2		2	
15	2					1		1				2	2				8	3		1	1
〃								1					2				3	1			
16																					
〃	6			1	1	1		1	1	1	1	1	4		1		19	7	20	1	1
17																					
〃	15	1		2	1			6					10				35	11	18		
18	9				2		3	5					3				22	8	27		5
〃	12	1					1	2					4		1		27	15	15	1	2
20	12	1						2	1	6		1	7	1	1	小型石棒1	33	13	24	4	
〃	8	1						7		2	(3)		6				24(3)	20	9	1	2
21	4	2	1														7	6	11		
〃	20	1									(1)	1	3				25(1)	14	39	3	1
23																					

種別 / 住居	打製石斧	磨製石斧			石匙	石錘	敲打器	磨石	小型棒状石	凹石	はちのす石	石皿	横刃製石器	石鏃	石錐	その他	計	剝片			
		定角	蛤刃	乳棒														硬砂岩	黒よう石チャート	緑色岩	粘板岩泥岩等
的場	27	1	1		3		2	1	1	2			6			黒よう石掻器1	45	14	19		
24	17		4		1		3	4		1		1	2	1			32	27	25	11	1
〃	6	1						3		1			1				12	1			
26	6		1		1											台石1	9	5			
〃	19		2	1	3	1	1	2		1			5				35	5	32		
27																					
〃	1				1			1					1			(緑色岩原石)	4	4	1		
28																					
〃									1								1	1	9		
30																					
〃	2		1				1						7			(定角石斧は赤色	11	1	14		1
32	12	2	2		1		2	3	2	1		1	3	1	1	チャート製)	31	3	22	1	3
〃	8			1	1		1	1				1	2	1			16	6	41		
33																					
〃	3			1	2		1			1			1	1			10	3	9		
35・58																					
36	4		1														5				
37	1		1							1						黒よう石ナイフ形1	4	3	1		
〃	7	1			5			2			(1)			1			16(1)	4	34	2	
38・39								1		1			2	1			5	5	14		1
〃	2						1						4				7	5	1		
40																					
〃	1				2	1				1			6				11		3		
42・43																					
〃	6		1					1					2				10	3	8	1	
51																					
〃									1								1		2		
53																					
〃																		2	3		
54																					
〃	1	1	1										1				4	1	8		
55																					
〃	1												2				3	5			
59																					
〃	2						1										3		2		
60																					
〃													1			(硬砂岩原石？1)	1				
61																(花崗岩立石1)					
〃	5							1					6				12	2	1	1	
62													1				1			1	1
〃									1							石英製刀状石1	2				1
63																					

種別／住居	打製石斧	磨製石斧 定角	磨製石斧 蛤刃	磨製石斧 乳棒	石匙	石錘	敲打器	磨石	小型棒状石	凹石	はちのす石	石皿	横刃製石器	石鏃	石錐	その他	計	剝片 硬砂岩	剝片 黒よう石チャート	剝片 緑色岩	剝片 粘板岩泥岩等
門前1	12						1	5					6	1			25	5	31	1	
〃2	19		2		1	1	4	3					21	1	1	片麻岩台石1	54	28	97	8	
〃3	21 5	2	2 2		2	1	1	4		1			18 3	2	2 1		55 12	9 6	74 9	2 1	1
〃4	15		2		1		3	3 1		2		1	10 1	1		硬砂岩石台石1	35 6	9 2	26	2	1
〃5	2												4				6	3			
〃6	9						3	4		1			4				21	1	19	3	1
〃7・8・9	20 7				1	2 1	3 2	12 2			2	2	22 4	1	1	(硬砂岩原石1)	60 22	20 9	40 27	2	1 1
〃10								1				2				3	7	3	2	1	
〃11	1 9	1						1 1		1			7 6				9 18	6 10	1 6	2	1
〃12														1			1		4		
〃13	9		1	1			1 2	1		1	(1)		4 6				7(1) 19	5 3	12	1	
〃14	3												3				6	4	20		
〃15	1												2				3	3	1 5	1	
〃16	9 1	2	1				2	3 1		2			8 2	3			30 4	11 2	114 6	3	2
〃17	3			1						3							7	2	15	1	
〃18	2		1				1										4		3		
〃19	3				1			1					1	1			3 4		17		
〃21	1 1				1						2		4	2 1			10 2	2	14 13		
〃22	1																1				
〃23	1		2					2		1			1				7	1	7		2
〃24	1					1										2					

4．配石址に伴う石器属性表

1．はちのす石（多凹石）

計測値はcm単位

No.	出土グリッド	凹数（表）	凹数（裏）	石材	大きさ 縦×横×厚	形状・特徴
1	ケ－8	8	0	縞状片麻岩（赤）	22×16×6	楕円形（平）
2	ケ－8	2	2	〃（〃）	24×19×8	変6角形（平）　表裏磨
3	ケ－8	1	0	縞状片麻岩	23×15×6	隅丸長方形（平）
4	ケ－6	34	0	〃（赤）	30×28×8	多角形（平）
5	ケ－5	3	0	〃（〃）	28×17×7	変5角形（平）
6	サ－9	1	1	〃（〃）	22×18×10	隅丸3角形（平）
7	サ－7	13	22	花崗岩質片麻岩	18×15×8	変5角形（平）
8	サ－7	14	1	縞状片麻岩（赤）	20×17×7	楕円形（平）
9	シ－11	8	0	〃	19×15×7	〃（平）
10	シ－7	12	8	〃	34×28×8	変5角形（平）
11	サ－5	3	0	〃（赤）	22×8×8	破損
12	シ－5	3	0	〃（〃）	60×44×14	変3角形（平）
13	ス－12	16	0	〃（〃）	35×18×10	変長方形（平）
14	ス－12	26	0	〃（〃）	48×37×12	変楕円形（平）
15	ス－10	12	0	〃（〃）	24×9×8	変長楕円形
16	ス－10	1	0	〃（〃）	20×12×5	隅丸三角形（平）
17	ス－10	8	4	〃（〃）	24×15×7	破損（平）
18	セ－12	1	1	〃（〃）	24×22×8	変6角形（平）
19	セ－8	13	0	〃（〃）	38×25×14	変5角形（平）
20	セ－6	9	0	〃（〃）	23×13×7	変長楕円形（平）
21	ソ－8	11	0	〃（〃）	25×9×12	変台形
22	ソ－8	1	1	〃（〃）	25×13×11	長三角形（平）
23	ソ－7	8	0	〃	29×29×9	隅丸三角形（平）
24	チ－11	2	0	〃（赤）	24×10×15	変多角形
25	チ－11	11	5	〃（〃）	25×22×12	〃　石硬質
26	ツ－12	7	0	コートランド岩	21×15×8	変4角形（平）
27	ツ－11	2	0	縞状片麻岩	18×17×5	変5角形（平）
28	テ－11	10	0	〃	18×13×8	〃（平）
29	テ－5	11	9	〃（赤）	29×18×8	長楕円形（平）
30	テ－5	17	13	〃（〃）	22×21×8	隅丸5角形（平）
31	ナ－11	15	0	〃（〃）	23×17×13	隅丸台形
32	ナ－11	1	0	〃（〃）	20×20×5	変4角形（平）
33	ナ－12	4	2	〃（〃）	16×13×7	楕円形（平）

2．石　皿

計測値はcm単位

No.	出土グリット	凹み部 長さ×幅×深	石材	大きさ 縦×横×厚	備考
1	シ－10	(9)×13×4	縞状片麻岩（赤）	32×(21)×8	破損品、裏面多凹　逆位出土
2	チ－11	20×10×1	花崗岩質片麻岩	30×24×4	変6角形、石質荒　凹み不明瞭
3	チ－10	32×18×1.5	〃	36×24×7	石質密
4	ツ－11	26×9×1	〃	35×21×8	長楕円形、石質荒
5	ツ－11	26×8×2	〃	37×36×5	変5角形、石質荒　逆位出土
6	ツ－9	(16)×13×1.5	縞状片麻岩（赤）	(23)×22×11	破損品、多角形
7	ト－11	(8)×13×3.5	花崗岩質片麻岩	29×(15)×8	破損品

5．出土陶器一覧表

〔的　　場〕

No.	出土場所	名称器形	部位	製作年代	挿図番号	備考
1	No.1313テ-12	青磁碗	口縁	13C		内面片切刻
2	No.1320ツ-8	〃　〃	〃	13C		外　シノギ文
3	No.1383シ-6	〃　鉢	胴	13C		内面方切刻
4	トレンチI	〃　〃	〃	13C		外面シノギ文
5	No.1400セ-6	〃　〃	〃	13C		内面片切刻
6	コ－13II層	〃　碗？	〃	14C		無文
7	トレンチI セータ	〃　鉢？	〃	13C		外面シノギ文？
8	－タII層	〃　〃？	〃	13C		〃
9	ソ－11II層	〃　碗？	〃	14C		無文
10	ネ－11	〃　算木手か？	〃	13C		外面に文様？
11	排土中	〃　鉢	〃	〃		外面シノギ文
12	〃	〃 輪花折縁皿？	口縁	14~15C		内面櫛書紋
						12点
13	排土中	天目	口縁 高台脇	15C	2	窖 高台周辺錆釉窯
14	ピット内	〃	口縁 高台	〃	1	〃　〃 内反高台、〃
15	トレンチ 7－コ	〃	口縁 高台脇	17C	4	口縁部直立 大窯
16	No.1880	〃	口縁～ 高台脇	15C	3	火を受け釉面が荒れている口縁部尖る露胎
17	土拡 No.259	〃	口縁	〃		
18	11－ネ 溝I	〃	胴	〃		2点
19	11－ノ 〃	〃	〃	〃		
20	溝III	〃	口縁	〃		
21	No.1232ネ-10	〃	〃	〃		
22	No.1271セ-11	〃	〃	〃		
23	No.1293テ-9	〃	〃	〃		
24	No.1355タ-8	〃	〃胴	〃		
25	No.1381シ-7	〃	高台脇	〃		
26	No.1389ス-6	〃	口縁 胴	〃		
27	シ列	〃	口縁 腰	〃		4点
28	A－ヌ	〃	口縁	〃		
29	補助トレンチ	〃	腰	〃		2点
30	I列サブトレ	〃	高台	18C		
31	11－ソ II層	〃	口縁	15C		2片
32	11－セ 南ベルトI	〃	高台	？		
33	11－ス 南ベルトI	〃	胴	15C		
34	4－ク ～ 7－サ	天目	口縁	15C		
35	〃	〃	口縁 高台脇	〃		2点二次的火を受ける
36	5－ツ	〃	口縁	〃		
37	ツ列トレンチ 5－7－I層	〃	胴	〃		
38	ハ列トレンチ 7－9	〃	腰	〃		－20C

No.	出土場所	名称器形	部位	製作年代	挿図番号	備考
39	5列トレンチ 7－コII	〃	口縁	15C		2点
40	コ－シI層	〃	〃	〃		
41	シ－セI層	〃	口縁 胴	〃		
42	〃	〃	胴	〃		4点
43	セータII層	〃	口縁 胴	〃初		
44	7トレンチ ロ－E2層	〃	〃	〃		
45	11列トレンチ ネ－ハ地場II	〃	口縁 高台脇	〃		1点 1点
46	表釉	〃	肩	〃		
						46点
47	堀立柱 建物址	チ－12－P 土師、不明	？			小破片
48	チ－12－P	須恵　甕	胴			〃
49	チ－12	〃　壷	〃			〃
50	チ－13	白磁　こね鉢？	口縁	10C		〃
51	ソ－12	〃灰釉　杯	口縁 胴			
52	セ－7	白磁　杯	口縁 胴	10C		内面全灰釉 ハケ塗り
53	セ－8	〃　杯	〃 〃			内外面に灰釉わずかに残る
54	ソ－8	須恵	胴			小破片
	建物址No.3 タ－9	白磁　杯	口縁	10C		〃
55	ソ－11 溝内埋土	碗？	胴	19C		陶胎、呉須
56	溝状遺構	碗、皿	口縁1 胴6	〃		陶器、灰釉
57	〃	碗、杯、徳利	口縁9 胴10	〃		肥前 高台3、伊万里
58	ネ－11 〃　小	盤	口縁 〃下 胴	15C		3片
59	ネ－11 〃	碗	口縁	18C		3片
60	ノ－11 溝状遺構I	縄文土器	胴	中期		3辺
61	ノ－11 〃	陶器、碗、杯	口縁 胴	18C ～19		12片
62	ノ－11 〃	蓋(土瓶？)	蓋	江戸 後期		瓦器
63	ノ－11 〃	徳利、碗	口縁 高台	19C		染付
64	ヒ－10 溝状遺構I	碗、杯	口縁5 胴6	19C		白磁2点
65	〃 〃	碗、徳利、土瓶他	口縁2 胴	18C ～19		陶器、施釉、鉄釉
66	〃	灯明皿	口縁 底部	19C		
67	溝3西	土師器、杯	胴 底	？ 6C		内黒、小破片
68	〃　中	〃	胴	？ 6C		〃　〃
69	〃　底	壷	胴	？ 15C		
70	〃　東	蓋		？ 江戸 後		瓦器

No.	出土場所	名称器形	部位	製作年代	挿図番号	備考
71	〃 中	佛飯器	杯、脚	19C		
72	〃 中	灯明皿	口縁	19C		油皿
73	〃 東	すり鉢	胴	? 16C		胴下半部時期決定？
74	〃 〃	黒色土器	〃			瓦器？小破片時期決定？
75	〃 〃	碗、杯	口縁 胴底	19C		染付磁８点
76	〃 〃	灯明受皿、土瓶、甕他	口縁 胴底	19C		施釉陶器４点
77	〃 中	染付、白磁碗、向付、杯	口縁 胴高台	18C ～19		砂利層土９点
78	〃 〃	土瓶、灯明皿他	口縁 胴	19C		施釉陶器６点
79	〃 西	碗、酒杯、紅皿	口縁 胴	19C		染付、白磁
80	〃	碗、杯、他	口縁 胴	19C		染付、白磁
81	〃	甕、碗、皿、灯明皿、壷、徳利、土瓶他	口縁 胴	19C		施釉陶器
82	溝５	黒釉碗	高台脇			
83	〃	徳利	底、胴	19C		染付
84	〃 東	碗	半筒体	19C		染付丸紋
85	〃 〃	碗、皿、鉢、紅皿、水滴、杯、徳利	口縁他	18C ～19		染付、白磁？
86	〃 〃	碗、皿、壷？	口縁 頸部	18C ～19		呉須、鉄絵のものが４片
87	〃 〃	灯明皿、擂鉢、土瓶他	口縁 胴底	18C ～19		擂鉢中世か？
I	溝状遺構 ヒ－10	磁器　徳利？	胴	18C ～19		外青白釉、内無釉
II	ヒ－10	陶器　碗	口縁 胴 高台	〃		小破片５点
III	ネ－11	碗、陶器 ソバ猪口磁器	胴 高台立上り	〃		安南写し？
IV	溝３	碗	口縁			陶胎、白釉り
V	溝状遺構 ソ－13	佛飯器	台脚部	19C		磁器
88	２号住居址	盤	胴	15C ～16		釉荒れている
89	15号　〃 北壁土拡	？	胴	？		土師か？
90	26号住居址	長頸瓶	口縁	11C		白瓷
91	35号　〃	内黒杯	底 高上り	６C		土師器
92	39号　〃	内黒杯　甕	口縁 胴	６C		土師器
93	40号〃溝	甕	胴	７C ～８		須恵器
94	51号住居址	杯	台脚	８C ～９		〃　２片
95	52号　〃	碗	口縁	19C ～20		染付プリント
96	土壙Ｉ南層	碗	口縁 胴	11C ？		二次的に火を受け釉が荒れている
97	土壙62ノ－５	杯	口縁 底部脚	6C～ ７？		須恵器
98	〃 127ヒ－６	土瓶(急須)	口縁	19C ～20		万古
99	〃 145ト－４	長頸瓶、杯、甕、	甕 口縁胴	６C ～７		須恵器 土師器
100	〃 153テ－５	甕、杯	底部	〃		須恵器１ 土師器３
101	〃 179テ－３	甕？	胴	６C ～７		須恵器
102	〃 197テ－５	甕、杯	胴 口縁	６C ～７		須恵器
103	〃 201チ－６	甕	胴	６C ～７		土師器
104	〃 259ツ－６	杯	口縁	〃？		〃
105	〃 307ニ－19	鉢？	胴	16C ？		陶器
106	〃 322セ－３	杯	口縁	６C ～７		須恵器
107	〃 333シ－３	杯	底	16C ～16		灰釉陶器
108	No.1461テ－７	山茶碗	高台脇	12C	5	モミガラ圧痕付高台
109	No.1507ソ－７	〃	〃	13C	6	底部糸切り
110	11列トレンチ トーニII層	こね鉢	口縁	12C		口端部溝
111	No.1249チ－９ No.1305テ－11	〃（片口鉢）	底部	12C		
112	No.1358タ－11	〃 （　〃　）	〃	12C		
113	5列トレンチ ７－フＩ層	甕	口縁	15C		常滑系 折返し口縁
114	タ－12II層	〃	胴部	〃		常滑系
115	No.1301テ－10 No.1395ス－７	〃	〃	〃		〃
116	No.1406ナ－８ No.1428ト－８	〃	〃	〃		〃
117	77土 ８号住居址	輪花皿？	口縁	19C ～20		印判手
118	No.1177ネ－10	黒釉、碗	胴	18C ～19		
119	No.1246チ－９	灯明皿	口縁	〃		
120	No.1277ニ－10	碗	胴	〃		染付
121	No.1278ニ－10	皿	口縁	〃		染付、角皿、向付？
122	No.1319ツ－８	碗、灰釉	胴	10C		猿投
123	No.1338ツ－11	鉢？	〃	15C～ 16？		陶器
124	No.1340ツ－11	碗	口縁	18C ～19		染付
125	No.1352チ－８	〃	〃	19C		印判手
126	No.1371ケ－５	〃	〃	〃		
127	No.1444テ－８	〃、灰釉	〃	10C		猿投
128	No.1445テ－７	〃？	胴	？		須恵器小破片
129	5例トレンチ ７～コＩ層	碗、徳利	口縁 胴腰	18C ～19 C		染付
130	〃	徳利、他？ 鉄釉	胴	〃		
131	〃	鉢、碗、皿、香炉	口縁 胴	〃		灰ぐすり陶器
132	〃	鉢	高台	〃		鉄絵、灰ぐすり
133	5列トレンチ コーシＩ層	碗、鉢	口縁 胴	〃		陶器、染付
134	5列トレンチ シーセＩ層	碗、皿	口縁 胴	〃		陶器灰釉 磁器染付
135	〃　II層	碗	胴	〃		陶器灰ぐすり 磁器色絵
136	5列トレンチ セータII層	碗 佛花瓶	口縁 底	〃		
137	5列トレンチ クーコＩ層	輪花碗	口縁	〃		白磁
138	11列トレンチ コーシII層	碗、紅皿	口縁 胴	〃		染付 陶器灰ぐすり
139	シーセ－20 cm	碗、皿、行平	口縁 胴	〃		染付皿印判
140	セータ－20 cm	碗　徳利？	胴	〃		染付印判

No.	出土場所	名称器形	部位	製作年代	挿図番号	備考
141	トーニ－20cm	鉢、急須、根出シ、碗、皿、徳利	口縁胴蓋	〃		印判、染付、白磁、鉄釉、朱泥
142	タ～ツ－20cm	碗、鉢、擂鉢、徳利、土管、ガラス	口縁胴	19C～20		染付、鉄釉あり釉
143	ツ－ト－20cm	碗	腰	18C～19		呉須、陶器
144	ネ～ハ地場内	碗	口縁	18C～19		磁器、色絵陶器、灰ぐすり、緑釉
145	ハ－フ－20cm	碗、灯明皿、壷	口縁胴高台	18C～19		染付、黒釉、灰ぐすり
146	ツ列トレンチ5～5′	香炉	口縁	18C～19		染付
147	5～7Ⅰ層	碗、箸置	胴台	〃		白磁
148	ツ列トレンチ11~13地場土Ⅱ	碗	口縁	18C		染付
149	13～15Ⅱ層	碗	胴高台	19C		染付、灰釉陶器
150	ハ－13－20C	輪花碗、小型かめ	口縁胴	19C		染付、鉄釉
151	ハ列トレンチ7－9Ⅱ層	碗、鉄釉陶器、白磁、染付、呉須、皿	口縁胴底	18C～19		染付、灰釉陶器印判手、白磁
152	Ⅱ層補助トレンチⅠ	盤	口縁肩	15C		るり釉磁(20C？)
153	Ⅱ層補助トレンチⅢ	碗	腰高台	18C		染付
154	構内埋土補助トレンチⅣ	灯明皿	口縁	18C～19		
155	ネ－9南北トレンチⅢ層	鉢向付	高台脇〃	18C		内面灰釉、外無釉染付蛇ノ目高台
156	1区北西トレンチ	輪花皿	口縁～高台	19C		印判、染付
157	ソ－11南ベルトⅠ	碗	胴	19		〃　〃
157	4－11南ベルト	蓋？	角	19		青磁、伊万里？
158	ク－7Ⅱ層	緑釉皿	口縁	16C		鉄釉、他白磁片
159	ケ－8Ⅱ層	鉢	〃	16C		灰ぐすり、他緑釉碗片
160	サ－10Ⅱ層	皿	〃	18C		灰ぐすり
161	ソ－13	鉢	〃	16C		〃
162	チ－4、P	〃	〃	〃		〃
163	チ－13、P	緑釉皿	〃	〃		〃
164	チ－10、ⅡP1	鉢	胴	19C		鉄、灰ぐすり
165	ト－5	〃	口縁	16C		灰ぐすり
166	ト－12Ⅱ	甕	胴	？		小破片時期決定？
167	〃	皿（灯明皿？）	口縁	19C		口縁下、外無釉口縁部灰ぐすり
168	ヒ－9Ⅱ	碗	胴	19C		染付
169	ハ－8Ⅱ	〃	〃	18C		灰ぐすり
170	フ－11	〃佛飯器	口縁	18C		灰ぐすり、呉須
171	マ－19	擂鉢	胴	15C～16		鉄釉
172	クトレンチD～EⅡ層	甕？	胴	8C～9		須恵器
173	〃	皿　陶碗　磁	口縁高台脚	19C20		
174	ヒ列サブトレ	灯明受皿碗、土瓶、香炉、黒釉小碗、染付碗、箱型湯呑	口縁胴他	19～20C		
175	ノ列サブトレカク乱層	陶器　碗染付　碗	胴	18C～19		小破片
176	サブトレ遺構外	灰、壷内黒杯	〃	6C～11		陶器、染付印判、染付磁器
177	第1号竪穴址	かめ	底部	〃		
178	ヌ－11　Ⅱ	瓶	胴	6C～7		須恵器
179	チ～ナⅠ5～8Ⅱ	杯内黒土師器瓶	口縁胴	6C～7		土師器須恵器
	〃	杯碗	胴高台脇	18C～19		白磁
180	クーサ～Ⅰ4～7Ⅱ	盤、碗、鉢、擂鉢	口縁胴底	18C		
	〃	碗、小碗	口縁胴	18C～19		染付印判、みじん唐草
181	ス－11南ベルトⅡ	鉢碗	胴口縁	15C～18		染付
182	セ－11南ベルトⅡ	鉢	脇高台	15C		内面灰釉
183	粘土帯水路石積中	長頸瓶、急須鉢、碗	口縁頸脇	7C15C19C~20		須恵、万古
184	ケ－5	盤	胴	15C		釉、荒れてざらついている
185	ケ－8	盤	口縁	〃		〃
186	ト－9	〃	胴	〃	〃	
187	ハ列トレンチ7～9No.1474	鉢	〃高台脇	〃		脇、露胎、赤く発色している
188	No.13タ-11	花瓶	頸部	14		
189	No.1247チ-9	折縁皿？	口縁	14C～15		
190	No.1249チ-9	四耳壷	〃	15C～16		灰釉
191	No.1252タ-9	器種不明	肩？	？		須恵器？
192	No.1265セ-9	〃		？		〃　？
193	No.1273サ-8	碗	口縁	15C		平碗
194	No.1284テ-9	瓶子(梅瓶型)	肩	14C		鉄釉剣先－印花－平行沈線
195	No.1286ニ-10	壷？	肩？	？		須恵器
196	No.1310テ-12	縄文か？	胴			無文
197	No.1361ソ-12	卜石				
198	No.1366セ-11	碗	口縁	15C		平碗
199	No.1376サ-5	〃	〃	〃		〃
200	No.1377サ-5	盤	胴	〃		
201	No.1779	碗	高台脇	〃		平碗
202	No.1382シ-7	盤	口縁	〃		
203	No.1386シ-6	碗	高台	〃		
204	No.73タ-11No.1335ツ-10	〃	口縁	〃		平碗
205	No.1433テ-8	壷？	胴	？		
206	11列トレンチネーハ－20C溝3、西	四耳壷	肩	16C		
207	ツ列トレンチハ－13Ⅰ層	壷	口縁肩	？		
208	5列トレンチ	〃	〃	15C		
209	〃コーシⅡ	盤	胴底	15		
210	シーセ	場、碗	胴	15		
211	セータ	盤、壷？	底脇	15		
212	11列トレンチセーター20C	碗	口縁	17C		
213	ツ－ト－20C	擂鉢	胴上部	18C～19		
214	〃	黒釉碗	口縁胴	18C～19		

No.	出土場所	名称器形	部位	製作年代	挿図番号	備考
215	〃 ネーハー20C	擂鉢	口縁	18C ～19		
216	5列トレンチ セ － タ 、 シーセ	黒釉碗	胴	18C		挙骨茶碗か？
217	5列トレンチ 7 〃 11 〃 ク 〃 ツ 〃	須恵器、瓶、壷、杯				
218	No.1248	須恵器				
〃	1253、1255 1257	〃	裏面青海波			
〃	1259、1262 1268、1266	〃				
〃	1276、1279 1283、1284 1290、1291 1295、1296	〃				16片
219	1300、1304 1306、1307 1308、1315	〃				
〃	1316、1320 1321、1322 1329、1339 1344、1351	〃				
〃	1353、1355 1356、1360 1362、1368 1399	〃				21片
220	1437、1440 1443	〃 甕	腰			
〃	1445、1457 1469	〃				
〃	1455、1464 1471	〃				
〃	1481、1450 1453、1473	〃				
221	1407、1411 1412、1413 1417、1421	〃				
〃	1429、1430 1431、1434 1436、1439	〃				
〃	1441、1449 1452、1458 1462、1463 1467、1468	〃				
〃	1470、1474 1476、1479 1482、1486 1487、1488 1493	〃				29片
222	No.1500 1510、1516	〃				
〃	1518 表釉	〃				6 片
223	シー5、ス－4 ソ－9、ソ－11 セ－8	〃				6 片
224	タ－8 タ－13	〃 瓶				4 片
225	チ－8、ツ－6 ツ－8、ツ－9	〃 〃				4 片
226	チーナ 5 － 5 Ⅰ、Ⅱ層	須恵器、土師2				4 片
227	ツ－6、ツ－9 ツ－10、ツ－11	須恵器				5 片
228	No.1456 〃 1460	四耳壷 須恵器		肩		
229	ツ－6 、テ－6 テ－10、テ－8 テ－11、テ－12	杯 、 瓶 、 〃		口縁 底部		13片
230	ト－5、ト－7 ト－8、ト－11 ト－9	杯、瓶	〃	口縁 底		8 片
231	ナ－6、ナ－8 ナ－9、ナ－10 ナ－11	杯 、 瓶 〃		胴肩 底		12片
232	ニ－11、ハ－8 チ列、表釉	杯 、 瓶 〃		口縁 底		9 片
233	溝内埋土 ニ－ 3	擂鉢	胴	?		
234	溝 2	杯 須恵	口縁	7 C		
235	〃 3	瓶 〃	胴			
236	構内埋土 ソ－13	瓶 〃				
237	上ノ田 シーテの4～8	杯、蓋、瓶	口縁 胴底	6 C ～ 7		

〔門　　前〕

No.	出土場所	名称器形	部位	製作年代	挿図番号	備考
1	トレンチ 2	天目	口縁	15C		地場上(耕土)
2	〃	黒釉碗	〃	江戸		〃
3	〃	〃	胴部	〃		
4	〃	杯釉鉢	〃	〃		
5	〃	鉄釉鉢	胴上半	〃		すり鉢？
6	〃	甲鉢	口縁	〃		
7	〃	〃	胴部	〃		
8	〃 南土拡	合子	蓋	〃		
9	トレンチ 2	染付	口縁	18C		2点 18C後半
10	〃	〃	碗 徳利	近世		2 点 破
11	〃	卜石				2 点 破
12	トレンチ 3	天目	高台	15C		削り出し
13	〃	緑釉皿	口縁	16C		15～16C ？
14	〃	すり鉢	胴上半	?		小破片(2)時代不明
15	〃	甕	底部	?		鉄釉
16	〃	向付	口縁	18C		染付(伊万里)
17	〃	輪花深皿	〃			〃
18	〃	徳利、急須他				5 点(万古)
19	トレンチ 4	こね鉢	胴部	? 12C		無釉 2 点(片口鉢)
20	〃	〃	底部 立上り	16C		灰釉、地場層
21	〃	天目	口縁胴	15C		
22	〃	杯(須恵)	底部 立上り	10~11		糸切
23	〃	〃(土師)	底部	〃		暗文 内黒、高台欠
24	〃	すり鉢	口縁			鉄釉
25	〃	〃	口縁 下部			〃
26	〃	〃	胴部			〃
27	〃	皿	底部			無釉 糸切り

No.	出土場所	名称器形	部位	製作年代	挿図番号	備考
28	〃	灰釉陶器	口縁	江戸		4点、皿、佛飯器他
29	〃	ホーロク？	底部	〃		無釉　2点
30	〃	こね鉢	立上り	？		須恵質
31	〃	土びん他	口縁	江戸		蓋、他3点
32	〃	磁器	口縁他	江戸時代		碗、徳利、他
33	〃	卜石				
34		道路下溝	天目口縁	15C		
35	〃	〃	胴	〃		
36	南土手下	甕、他	口縁胴			土師、小破片、5点
37	ニ－B	碗、皿、徳利他	口縁他	近現代		染付他
38	道路下	染付、碗、徳利	〃	〃		プリント、他13点
39	15号住居址	壷	高台脇	？		須恵質土器、つり土？
40	2号　〃	急須？	〃	近現代		
41	19号　〃	縁釉皿	口縁	15C～16		鉄釉
42	ノ－1	碗	〃	19C～20		染付
43	ヌ－1	〃	〃	〃		〃
44	C－ニ～1	擂鉢？	底部	？		
45	ヌ－1	香炉？	口縁	19C		灰釉
46	〃	碗	胴	19C		染付
47	ナ－C	甕、雪平？	胴底	19C		かめ　鉄釉 雪平？　灰釉
48	ニ－B	皿、徳利	口縁高台	18C～19		染付
49	ハ－A	鉢	口縁高台	18C～19		色絵
50	C－ニ～1	甕、小碗、型物	胴部	19C～20		甕、小碗、陶器 型物　磁器
51	トレンチII	碗、擂鉢	口縁高台	19C～20		碗(丸紋)
52	トレンチIII	碗	口縁	19C～20		染付、プリント
53	トレンチIV	紅皿 黒釉碗、鉄灰釉鉢	口縁胴高台	19C		白磁 陶器
54	表釉	盤	口縁	16C		灰ぐすり、胴露胎
55	〃	灯明皿、碗	胴底部	19C		灰ぐすり3点
56	〃	碗、皿、壷？	口縁胴	18C～19		染付

報告書抄録

ふりがな	まとば　もんぜんいせき
書名	的場・門前遺跡
副書名	平成5年度・平成6年度農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業 及び市道丸山線改良工事に伴う埋蔵文化材緊急発掘調査
シリーズ名	発掘調査報告
シリーズ番号	第35集
編著者名	林　茂樹　北澤武志　木下平八郎
編集機関	的場門前遺跡発掘調査団
所在地	〒399-41　長野県駒ヶ根市上穂栄町23-1　Tel 0265-83-1135
発行年月日	西暦　1995年　3月31日

所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積
まとば　もんぜんいせき 的場・門前遺跡	ながのけんこまがねしなかざわ 長野県駒ヶ根市中沢	市町村 20210 遺跡番号 130・132	35度 42分 37～ 42秒	137度 59分 36～ 41秒	19930713 ～ 19940818	4371m²

調査原因	広域農道建設及び市道改良工事に伴う事前調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
的場・門前遺跡	散布地	旧石器時代		尖頭器、有舌尖頭器、石斧	
		縄文時代 草創期・ 早期	集石5基 土壙2基	表裏縄文、押型文土器 絡条体圧痕文土器 薄手土器	
	集落	縄文時代 中期	住居址79軒 竪穴址3基	中期中葉土器（狢沢～井戸尻Ⅲ）	土器はほぼ全型式期揃う。
			土壙588基	中期後葉土器（Ⅰ～Ⅴ）	埋甕　34例
			ロームマウンド1基	土製円板、土偶、各種石器、ヒスイ製飾玉	中空円錐土偶・両手に穿孔のある土偶等
	祭祀	縄文時代 中期・晩期	環状列石址3帯 集石4基	多凹石、石棒、石剣、石皿 後期土器（初頭～末） 晩期土器（　〃　）	東を基点に西へ波及するように3帯。中規模のものは円周状に列石。 山岳を意識した構造。
	集落	平安時代 中　世	竪穴式住居址3軒 掘立柱建物址29軒 溝状遺構 切岸遺構 柱列址（入口） 遺構	土師器、須恵器、灰釉 山茶碗、青磁、天目、銭貨、フイゴ羽口、硯、砥石等	居館址に関連した生活生業址と思われる。 小鍛冶に関連した炉体と竪穴状遺構あり。
		近　世 （江戸～明治）	溝址	各種陶器	

的場・門前遺跡
（本　文　篇）

―緊急発掘調査報告書―

平成７年３月20日発行

発　行　　上伊那地方事務所
　　駒ヶ根市教育委員会

印　刷　　日本ハイコム株式会社
　　塩尻市大字北小野